麻原彰晃の世界 PART II

自己を超えて神となれ！

大人気を呼んだ尊師大学講演会特集

東大・京大・東北大・慶応大・筑波大（島田裕巳氏との対談）において

真理の御魂

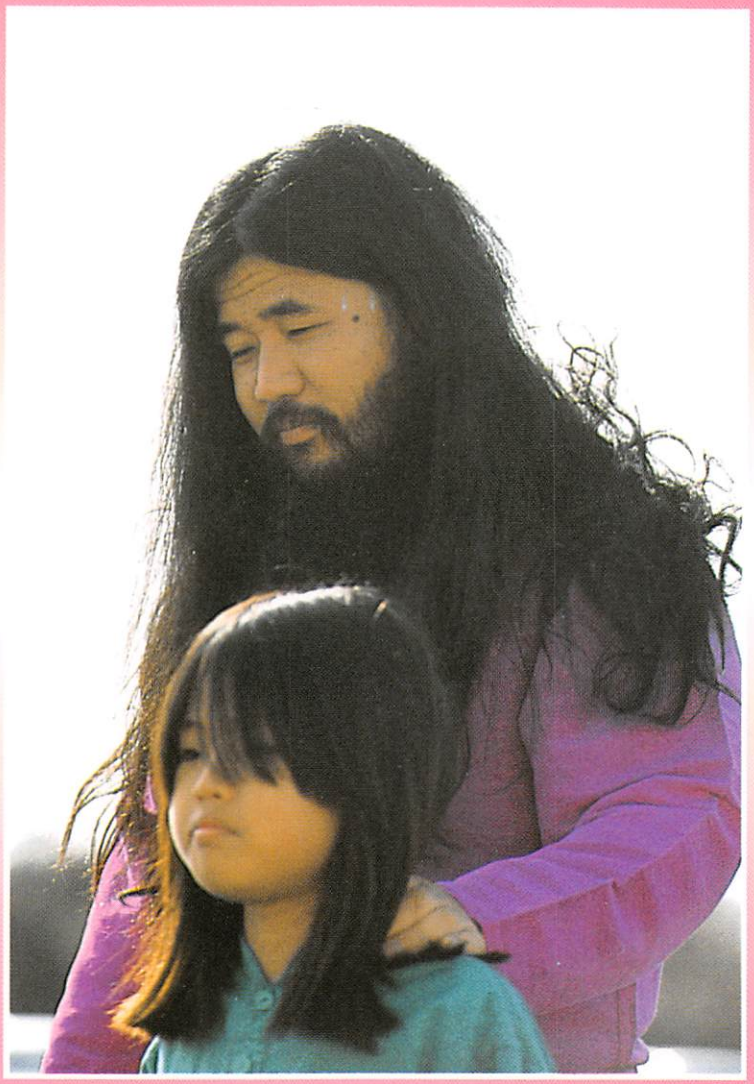
最聖 麻原彰晃尊師

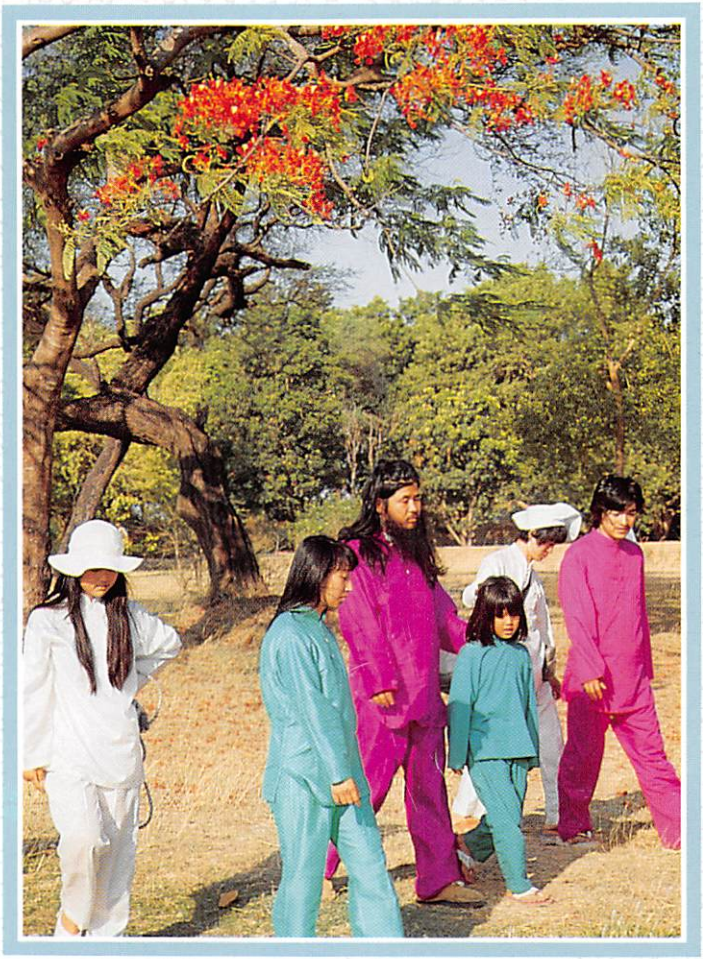
麻原彰晃の世界 PART II

自己を超えて神となれ！

大人気を呼んだ尊師大学講演会特集

東大・京大・東北大・信州大・気象大（島田裕巳氏との対談）において





はじめに

今回は、今年度の大学祭おける講演会において大好評を博した尊師の説法、対談、質疑応答の特集である。

物質的には、世界の中でも大変豊かになった今の日本。しかし、若者は心からの充足感を得ていない。それは、この本に掲載された学生の質問を見ても明らかで、若者の模索する姿がうかがい知れる。

今、若者に必要なものは何か。戦後、世界のレベルから見ても稀に見る日本人の勤勉さ、真面目さにより高度経済成長を遂げた日本。しかし、物質的には何不自由ない現代に生きながら、日本人が今求めようとするものは何なのか。生まれながらにして物質的に恵まれた環境に育った今の若者。そして、自らの青春時代を振り返る者たちにも、真剣に生きようとする者ならだれしにも、尊師の説法は効

を奏することになるであろう。

何事にも全力で取り組まれる尊師の姿勢は、この書の巻末の島田裕巳氏（日本女子大助教授）との対談にもあるように、徐々に周りの見方が変わり、受け入れられつつあるようになってきている。尊師の態度は以前と何ら変わりはないのだが、真理の時代の到来というところだろうか。

あくまでも真理の法は一つしかない。麻原尊師の説かれる真理の法は、二千六百年前の覚者サキャ神賢の法を、『南伝大蔵経』の原典であるパーリ仏典から厳密に訳したものと、尊師ご自身の深い瞑想体験をもとにしている。

なお、過去からあった、漢訳の音写というわかりづらい仏教用語も、現代のわかりやすい日本語に置き換えて説法をされているので、その対比については巻末の言語対比表を参考にしていただきたい。

人生を真剣に模索する方にならだれにでも、この書は前途に灯明を灯すに違いない。

最後に、本書を手にされた功徳のあられたあなたが、真理の流れに入られんことを願ってやまない。

一九九二年一月

オウム真理教広報編集部

麻原彰晃の世界 ❋ PART II

自己を超えて神となれ！

大人気を呼んだ尊師大学講演会特集

——目次——

はじめに——1

◆第一話　物質的に豊かな国、日本で（信州大学において）——8
「若者の宗教の必要性」

◆第二話　キリスト教を包含する仏教の教え　（東北大学において）
「自己を超えて神となれ！」　52

◆第三話　高い世界へ生まれ変わる思考を　（東京大学において）
「下位と上位に結びつけるきずなと転生」　85

◆第四話　一番活況を呈した大学祭　（京都大学において）
「真理はすべてを明らかにする！」　125

◆第五話　島田裕巳氏（日本女子大助教授）と共に語る
（気象大学において）
「現代における宗教の存在意義」　166

言語対比表　252

自己を超えて神仏となれ！

◆第一話　物質的に豊かな国、日本で　（信州大学において）

「若者の宗教の必要性」

◉満足は欲求のコントロールから

今日はまず、「なぜ今若者は宗教なのか」ということから、修行する場合のメリット、そして人がどのような形で神々に至るかという話について、皆さんにお話をしたいと思います。で、この二つの命題、つまり「若者の宗教の必要性」、そしてその「宗教の目的」というものは、これはおそらく皆さんも、絶対にそれを聴くことによって、不利益になる命題ではないだろうと考えています。

まず、わたしたち日本人は、外国に比べると大変物質的に豊かな生活をしてい

る。確かに、この物質的な豊かさというものはわたしたちに外的欲求における幸福というものを与える。もちろん、この外的欲求を満たすということは、その瞬間瞬間において幸福感というものを満足させている——まあ、そういう感じはするわけですけども、実際わたしがいろいろと研究し、そして、これは京大でもかなり研究されているみたいだけども、その幸福観の定義からいくならば、決して幸福になれないと。

それはどういうことかというと、まず、わたしたちの欲求というものがあると。そしてこの欲求というものは、いろいろな情報によって増大すると。これはまあ、分母と考えてみたらわかるわけだけども。そして、分子にはわたしたちの現実的な物質的充足度というものがあると。

ところがね、分子の物質的充足度というものは、分母の欲求に比べると、そのスピードが遅いと。そして結果的には、分母の欲求が増大すればするほど、欲求不満の状態に陥るんだと。そして、それが、例えば自然破壊につながるし、ある

いは自分自身の器でもないようなことをしでかし、例えばサラ金地獄とかそういう状態に陥ると。

ここで、だから問題になってくるのは、この欲求をいかにコントロールするかということが問題になってくると。この欲求をもしコントロールすることができるならば、もともと物質的に、世界的にも満足感を与える国、日本であるから、最高の満足した状態でこの人生を満喫することができるはずであると。

ところがね、例えば宗教というと、即その欲求を増大させ、欲求を増大させたものを満足させるという教え、これが日本では広がっているわけだね。今から二千五百年以上前登場なさったサキャ神賢の教えも、その当時は新興宗教であったわけだけど、そういう新興宗教というのは、そのニーズに合わせて法を説くという形を展開することにより、その時代の人たちを幸福へと導くわけです。

◉観念的教えは幸福を与えるか

そして、今の若者は、これは世界的にも水準の高い知的生命体であると。この知的生命体は、当然自分の煩悩、つまり欲求というものと、そしてその欲求から来る苦しみというものを絶えず見つめて生きているはずである。そうするとね、この欲求、そして物質的充足度のこの差というものは永遠に縮まらないんだということを、日本人は賢いからわかるわけだね。そこで、いろいろな神秘主義、あるいは神秘主義ではなくて観念的な教えといったものに少しずつ少しずつ取り込まれていくと。

ところがだ、よく考えていただきたいんだけども——まあこれは、実は今から四日前、中沢新一（宗教学者）という人と、二時間ぐらいのちょっと対談を行なったわけだども——そのときも出てきた話だけどね、この観念的な教えというものは、既にこれは中国の支配思想として使われているし——例えば、それは孔子の儒教であったりするわけだけどね——そういう観念的な教えが、これから先のわ

たしたちの満足、あるいはわたしたちの幸福といったものを与えてくれるかどうかというのは、大変難しい問題である。というよりも、わたし自体は与えてくれないだろうと考えているわけだ。

それはなぜかというと、あの当時の中国はもともと貧しい人たちがたくさんいたわけだし、そして、ある程度上の力、つまり国家の力に対して、その力に従うことによって自分たちの低い生活レベルでの安定というものを得ることができたわけだから。そして、それこそ善であるとかいう言葉で表わすことにより国家運営ができたわけです。

しかし、今はそうじゃないよね。それぞれがそれぞれの生き方を持っているし、そして、それぞれがそれぞれの考え方を持っていると。つまり、この生き方、あるいは考え方の延長線上にわたしたちの幸福観というものがなければならないんだと。わたしたちの満足というものがなければならないんだと。

◉知性を超えて智慧を得よ

とするならば、今のあなた方の知性というものをいかに超えるかということが問題になってくるわけです。なぜならば、知性というものは問題を解決するただ一つの道具だからである。そして、その知性の最終的地点に智慧、ウィズダムというものがあるわけだよね。

ところで、この知性から智慧への発展、これは何によって得られるのだろうかと。実は、これは中国にあまり受け入れられなかった老子・荘子の思想であるタオイズムがそうであるし、あるいは原始ヨーガがそうであるし、あるいは仏教がそうであるし、あるいは密教がそうであると。

このような教えというものは、自分自身を変化させることにより、自分自身を昇華させることにより、意識を変え、そして高い世界の経験をすることにより、その世界の叡智を引き出してくると。まあ、要するに秀才型のタイプではなく天才型のタイプをつくり上げていく教え、あるいは実践であるわけだね。

◉苦しみから逃げるな

そして、この教え・実践が、あまりにも日本にはなさすぎたがために、皆さんもおそらく、今、先程言った欲求と、そして現実の満足感との間で大きなギャップを感じながら苦しんでいるはずだ。もちろん、そういう話をするとこう言うかもしれない。

「俺たちは苦しみなんかないよ」と。

「わたしたちは苦しみなんかないよ」と。

「今が楽しいんだよ」と。

しかし、よく考えてみようじゃないか。例えばね、本当に苦しみがなければ、次から次へと欲望の対象を求めるだろうかと。本当に楽しければ、次から次へと新しいことを試みようとするだろうかと。もちろん、これは真実において内側に充足感がないがゆえに、そのような方向に向かうわけだよね。つまり、行動を起こすときには必ず動機というものがあって、その動機をしっかりと見つめるなら

ば、自分自身の今の状態というものがわかるはずであると。

そして、これらの教えをすべて完璧に説き明かされた方、この方が、まあ今、日本では仏陀という称号――実際この仏陀というのは、個人の一人を指すのではなく状態を指すわけだけども、二千六百年前のサキャ神賢、サキャムニの教えであると。これは、その教えの途上にある、例えばイエス・キリストなどの教えもすべて包含された絶対的な教えであると。

そして、その教えの中に、わたしたちがこの人間から神に至る道があるんだということを、その経典、例えば、これはインドからスリランカに伝わった『南伝大蔵経』や、あるいはインドからチベットに伝わった北伝のいろいろな教えが説き明かしているわけだね。そして、この教えをしっかりと皆さんが実践することにより、確実に神に至ることができる。

◉神の定義とは

では次に、この神という場合の、神の定義をしなければならないと。例えば人間といった場合、二本足・二本手、そして話すことのできる生命体であると。あるいは、考えることのできる生命体であると。これを人間と定義するならば、ではいったい、神とはどのような生命体だろうかと。それは、人間より優れた智性を持ち、そして神秘的な力――まあ、これは一般にいわれている超能力とは若干違うものだけども――そういう神秘的な力を有した生命体と。そして、最終的には煩悩が完全になくなり、食べる必要もなく、あるいは飲む必要もないような状態に至った魂ということになるよね。

ではなぜ、この食べる必要がなく飲む必要のない状態の魂を神といえるのだろうかと。つまりそのとき、その生命体はそういうことなしに、心の中に完全なる満足、充実した心の状態を経験しているからであると。まあ、これはわたしの修行上の体験からいってもそういう状態に入ると、実際、いっさいの行為なしに身

体全体が、体全体が本当に快感状態に至り、そして心の中は充実すると。そしてこの状態に入ると、いかなる外側の刺激に対して、情報に対して心が動かなくなり、そして真に生命に対する喜びが生じてくると。

しかし、この神の状態ですら最後ではないと。この神の状態も、この喜び、あるいは満足という状態も、いずれはその原因が切れたとき、終わってしまうと。この原因が切れたとき終わってしまうというのは、ちょうど車にガソリンを入れ、そして、そのガソリンが尽きるまではその車は走るが、ガソリンが尽きてしまったら走らないのと同じである。

これらの状態をもう一つ超える——これが、十力者とも真理勝者ともいわれる状態であると。

◉三界の構成要素

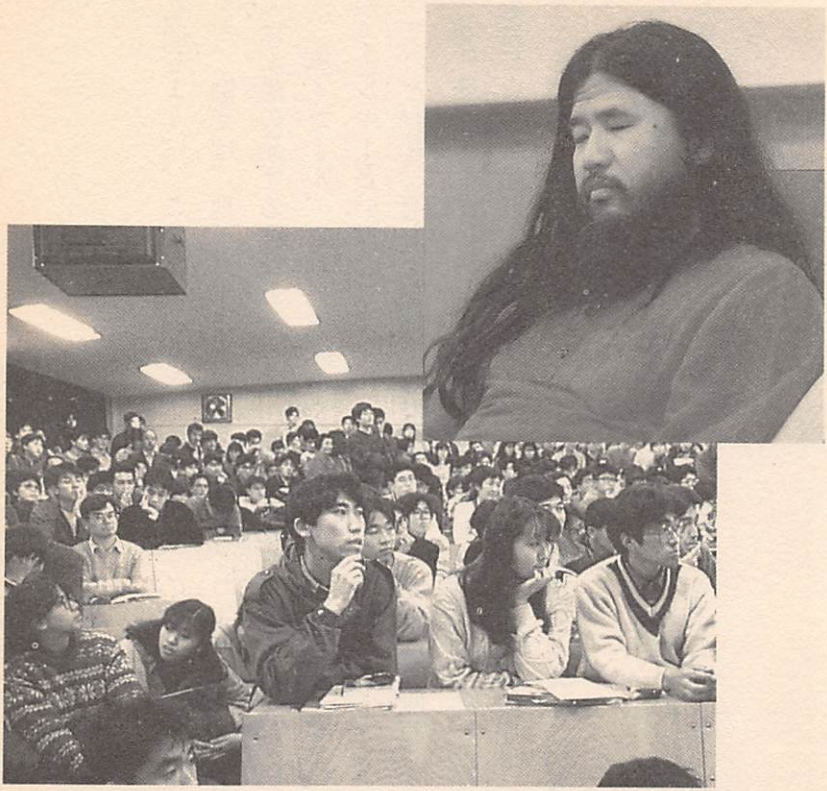
この人間、神、そして真理勝者、タターガタというね、この三つの言葉の定義

をしっかりしておかないと、君たちにはわかりづらいだろうから、定義をするとしよう。

まず、この粗雑な世界、これは肉、血、そして体温、呼吸、それから空間と——空間って、例えば口腔、口の空間だとか、あるいは鼻腔、鼻の空間だとか、そういう空間——これらのものによって形成されていると。

例えば、骨などは、その肉の部類に属すると。この肉の部類とは何かというと、実際には、地、地元素であると。つまり、個体元素であると。そして二番目の血液、これは水元素であると。だから、血液だけではなく、例えば消化液とか、あるいはリンパ液とかいう、液と名のつくものすべてがこの二番目のカテゴリーに入ると。そして三番目は、火元素は、これは体温を生じさせるもの、あるいは熱を発生させるものであると。四番目は、これは呼吸であると。で、五番目は、空間である。これはOKであると。

そして、これらの五つの元素の集大成によって、わたしたちの肉体は形成され



ていると。

これと同じように、この宇宙のすべての要素が、この五大元素によって明らかにされると。例えば、地イコール土であると。水イコール水であると。火イコール、例えば太陽の発する熱などすべて、この火元素に属すると。

そして、風イコール、これは火元素を昇華した形でのエネルギーであると。で、ここでのエネルギーというのは、先程の呼吸とどう関係があるかと。それは皆さんも知ってのとおり、例えば空気中の酸素をわたしたちは吸収し、それによって熱エネルギーを生産しているわけだけども、それと同じように、この風元素、例えば核融合によって生じたエネルギーというものは、火元素の比ではないほどのエネルギーを発すると。そして、その上に空が生じていると。この空というのは、ブラック・ホールだと考えるべきであると。

で、この小宇宙と大宇宙の粗雑な元素、これと心の働き、そしてもう一つ、わたしたちが夢で使うような身体、この三つを合わせて、この現象界の構成要素で

あるといっていると。で、この現象界の構成要素というのは、今わたしたちがこの住んでいる現実といわれるものだね。

そして、ここからもう一段階深い意識状態に入ってくると、心の要素と、そして形状・容姿だけになると。これは、皆さんが夢で経験しているようなもの、これが、もっともっと実際リアルな世界が存在するわけだけど、その世界では先程述べた粗雑な五大元素はなく、微細な五大元素が存在していると。

そして、その形状、つまり姿・形を完全に止めた状態が、心の本質の世界――まあ、これを非形状界といっているわけだけど――が存在していると。そして、この心の本質を完全に止めた状態でこの三界から脱却すると。で、ここはポイントなんだけどね、この三界を完全に捨断した状態こそがタターガタ、つまり真理勝者であると。で、この真理勝者こそが二千六百年前に現われられたお釈迦様がその典型であると。

◉仏教――生きているうちの問題解決法

では、その止めてしまうということは、どういうメリットがあるんだと。これは、生命に対して自由になるのであると。つまり、その三界のどこへ生まれることもできるし、あるいはいつでも死ぬことができると。そして、いっさいの現象を思うままに動かすことができると。これが、真理勝者の最終的段階であると。

そして、そのとき欲求もすべてコントロールできるから、そのときは分母の欲求と、そして分子のこの現世的充実感というものとは、必ずイコールになると。つまり、絶えず一定の心の状態で生活することができると。

このような状態をつくり上げていくこと、これが、人間の状態を超えて、そして神になると。そして、神の状態を超えて真理勝者、つまりタターガタになるということなんだね。そして、このような状態を完全に会得することができるならば、この世の苦しみというのは、先程も述べたとおり、分母と分子が一定になるわけだから、完全に消えてしまうと。そのための教え、これが仏教であると。

ところが、今の仏教を見ると、人が死んだとき、一生懸命お坊さんが来て拝むと。まあ、その拝むこと自体は悪いことではないし、素晴らしいことだと思う。しかし、もともと仏教というのは、生きている人たちをいかに幸福にするか、生きているうちにいかに死後の準備をするか、あるいは生きているうちにいかに未来の準備をするかと、これが仏教だったんだね。ところが、その生きているうちの問題を解決することは難しいから、徐々に徐々に死後の問題点へと論点は移っていったということになる。

◉新しい時代の到来を前に

ところでだ、少し、皆さんあまり興味がないかもしれないけど、これから日本が、そして世界がどうなっていくかの予言についての話をしましょう。

君たちは、『新訳聖書』の中に「ヨハネの黙示録」というのがあるのを知っているかな。この「ヨハネの黙示録」の預言というものは、今のところ百パーセン

ト成就をしていると。

この成就については二つの考え方があって、一つは、自然にそうなっているのだと。もう一つは、より大きな力によってそうなっているのだという二つの考え方があります。まあ、いずれにしろ完璧な成就をしていると。

例えば、ソビエトが四十二年間、アメリカの力によって権威を与えられると。現に、ベルリン封鎖以降四十二年、つまり一九九〇年にソビエト連邦は崩壊し——まあ、完全に崩壊したのは今年だけども——ロシアの、ソビエトの覇権主義というものは終わってしまった。こういうことを中心として、必ずやその預言どおりの現象がこれからどんどん起きてくるだろうと。

では、その預言が、これから先何を示しているのかと。それは、ある程度のカタストロフィー、大破局と。そして、その後の新人類の登場の預言であると。

この、ある程度のカタストロフィー、そしてその後の新人類の登場、これについては、そうなった方がいいという考え方と、そうならない方がいいという考え

方がある。しかし、いずれにしろ、今の人類の形態が、例えば共産主義対資本主義という対決、そして資本主義が生き残ると。この後に来る物質主義対、次は精神主義の対決と。そして、より高度な方が残るであろうと。そして、預言がそのとおり、今の百パーセントの預言の的中と同じような形で達成されるならば、おそらく精神的な、心の成熟した超人類が生き残るであろうと。

これはね、なぜわたしが今日「ヨハネの黙示録」を今取り出したかというと、君たちだって自由に本屋さんに行って『聖書』を買えば、その内容が書かれているから、自分たちで研究すればよくわかるからである。そして、その最終的な選別は、そうだね、あと十年はかからない期間のうちに行なわれるであろうと。

まあ、これらのいろいろな現象があったがゆえに、今オウム真理教は積極的にその部分を教え、そして、まず自己を改革していただきたいと。まあ、そのために今日わたしも参加したわけだけど。よって、この講演が君たちの少しでも利益になれば幸いだと思います。

【質疑応答】

◉人間はなぜ生まれてきたのか

（質問者A）僕らは毎日こうして生活してるんですけれども、やっぱり一番疑問に思うのが、どうして僕たちは生まれてきて、こうして生活して、最終的には死んでしまうんですけども、こうやってお金稼いだり、勉強したりして、結局、何を目的として暮らしていくのか知りたいんですけど。

（尊師）大変いい質問だと思うね、それは。まず、人間がなぜ生まれるかというのは、十二の条件生起の法というのがあります。この十二の条件生起の法というのは、まあ君たちは正しくない言葉で、「あいつはわたしに因縁をつけた」とかいうわけだけど、その因縁、これは十二因縁の法とか、十二縁起の法とかいわれている、これは正確に訳すると、十二の条件生起の法という言葉で表わすことができると。

で、その十二の条件生起の法そのものが、わたしたちがこの人間の世界へ生ま

れてきたプロセスをしっかりと説明していると。よって、その十二の条件生起の法についてお話をしましょう。

まず、わたしたちが死というものを迎えた直後、わたしたちはまず気絶状態に入ります。この気絶状態に入るというのは、この粗雑な人間の世界をすべてであると考えている意識がそこから解き放されるときに、そのショックによって気絶をするわけです。そして、その気絶状態に入ってその次の段階で、経験の構成を認知するプロセスに入ってくると。

経験の構成を認知するとは何かというと、例えば、その前の生においてロックをたくさん聞いていたとか、あるいはジャズをたくさん聞いていたとか、あるいは科学の本をたくさん読んでいたとか、あるいは実際に科学の研究をしていたとか、あるいは、例えば食べ物で信州そばをたくさん食べていたとか、そういう経験の構成が甦ってきます。

で、経験の構成が甦ってきた段階で、次は識別作用が生じます。識別作用とい

うのは、その経験に基づいてどの世界へ行こうかという識別作用が生じます。で、そして自分の望む世界はここであるというそういう識別が生じた段階で、次は先程述べたとおり、形状-容姿と心の働きのみが存在する世界へと至ります。この、心の働きと形状-容姿というのは、要するに触れることのできない身体と、そして心の働きが同時に存在している世界へと移行していくわけだね。

そしてその次の段階で、その心の働きと形状-容姿の六つの器官、これは、目、耳、鼻、口、ね、そして触覚という五つと、それから心の働きの六つが外界と接することにより、というのは、この心の働きと形状-容姿の世界にはたくさんの他の生命体がいますから、外界と接触することにより、そこで感覚が生じてくると。

そして、感覚が生じるがゆえに、次はもっともっとより強い感覚を得たいと。これは、例えばおいしいものを食べたらよりいっそうおいしいものを食べたいとか、あるいはわたしたちが性的快楽に対して縛られているのと同じように、より

いっそう強い渇愛が生じてきます。つまり、欲求が生じてくるわけだね。

そして、その欲求が生じてきた段階で、その次の段階で、その欲求なるがゆえにとらわれるようになります。例えば、恋愛においても、あの人でなきゃ駄目だとかこの人でなきゃ駄目だとか、食べ物でも、わたしは例えばカレーが好きなんだけどラーメンは嫌いだとか、このような形のとらわれ、愛著が生じてきます。

で、実はその愛著が生じた瞬間に、それと同時に、裏側に嫌悪、つまりあの人は嫌いだこの人は嫌いだといったような感情も生起するわけだけど、まあそれはいいとして、その相反する感情が生起した次の段階で、それを具体的にもっともっと経験したいという心の働きが働きます。そして、子宮へと至るわけです。

子宮へと至った魂は、もう君たちも知ってのとおり、そのまま生存へと至ると。これが、わたしたちがこの世に生まれてきた意味合いです。ですから、この世に生まれてきた意味合いというのは、要するに欲望、煩悩というのがあって、その煩悩によって生まれてきてるんだということになるわけだね。よろしいでしょうか。

◉絶対的価値観と相対的価値観

（質問者B）わたしは、絶対的な価値観というものは存在するのかって書いたんですけれども、先日、人と話をしていて、三人で話をしてたんですけれども、二人の方の価値観があまりにも違うっていうか、うまく説明できないんですけれども、わたしはほんとにもうどちらが正しいかってことは自分でももちろん判断できなかったんで、こうしてこういうこと書いたんですけれども、人間が生きていく上で、どういうものに価値を置いて生きていくのが正しいのか、そもそも正しい価値観とか正しくない価値観とかそういうものがあるのか、そういうものがすべてわからなくなってしまったんで、そのへんをちょっとお聞きしたいと思います。

（尊師）価値観っていうのは、二つのカテゴリーに分けることができると。その第一の価値観は絶対的な価値観と。第二の価値観は相対的な価値観と。で、この絶対的な価値観と相対的な価値観の違いは、その超越した煩悩の状態との価値観

を中継するのか、あるいは煩悩によって目的を追求することによって生じる価値観を採るのかによって違ってくると。

例えば、第一番目の例は、わたしたちは必ず死にますと。よって、長生きしたいと。あるいは、わたしたちは必ず死ぬから、苦しみの少ない世界へ、幸福の多い世界へと生まれ変わりたいと。あるいは、この人生で生きていて幸福になりたいと。このようなものは、すべて絶対的価値観に属すると。

では相対的価値観とは何かというと、例えば学校生活を実際送ると。そして、高学歴、そして一流会社といったエリートコースを歩むと。これに価値を見いだしてる人、あるいはそうではなくて、例えば人生というものはもっとゆったりと楽しみながら生きていくことの方がいいんだと考える生き方と。このような例えば価値観というのは、相対的な価値観に属するということがいえると思うんだね。

で、この相対的価値観というのは、必ずその人が何らかの精神的トライをするならば変化すると。しかし、絶対的価値観というのは、その絶対的価値観の終局

である悟り、あるいは解脱をしない限り、その絶対的な価値観における満足を得ることができないと。こういうことがいえると。

そして、この相対的価値観は、瞬間瞬間、一時的には喜びを満たしてくれると。例えば、この人間の世界はわずか八十年であると。この八十年間の間において相対的価値観は有効であると。しかし、絶対的価値観は、それを超越した長い長い魂の流れにおいて有効であると。ということは、相対的価値観を捨断し、絶対的価値観を採った方がわたしたちにとってはより多くの利益があるといえると。よろしいでしょうか。

◉真理勝者の発するヴァイブレーション

（質問者C） 仏陀である釈迦が悟りを開いた後に人々に法を説いたときには、人間の言葉もわからない動物もその教えに聞き入っていたというんですけれど、それについてはいかがでしょうか。

（尊師）それは事実だと思うね。というのは、真理勝者の発するヴァイブレーションというのは大変神聖なものであると。例えば、オウム真理教でわたしが法を説くときも、例えばネズミがね、わたしの体に乗っかってきて体の上で遊んでるという状態もある。

これは、全くその同じ意味合いで、仏教の修行の中に非害心というのがあるわけだけど、相手を害さない修行、あるいは非暴力・非残酷という修行があるわけだけど、そのような形で、動物界というものは完全に動物連鎖によって恐怖を覚えてるわけだけど、サキャ神賢の場合、その恐怖を全く与えない心の働きがあられたので、動物たちも神聖な気持ちになれたということだよね。

それからもう一つは、これは、そうだね、物理の話になるわけだけど、人間が聞いている可聴範囲の声ではなく、例えば低音範囲とか高音範囲には別の成分があって、その別の成分は、例えば動物とかそういうものに対しても一種のヴァイブレーションとして会話することができるといわれています。ですから、それは

正しいと思います。

（質問者C）えっと、そういううんちくを聞きたいんじゃなくて、実際にネズミが体の上に乗ってきたっていうのだけじゃ信じられないので、そういうのを見せてほしいんですけど。

（尊師）君の心の中には、既に〝真理〟というものに対しての否定的想念というか、そういうものがあって、そしてそれを面白がってるよね。そういう心をまず切らないと、自分自身がそういう見せ物的な立場に置かれる可能性が高いよ。わかるかな、言ってることは。

◉サイエンスは精神科学から降りてきた一部である

（質問者D）こないだね、NHKのテレビだったんですけども、「アインシュタインの宇宙」っていうの見たんですよ。で、詳しい内容はよく覚えてないんですけども、麻原さんの考える宗教と科学――科学っていうのは、化学じゃなくてサ

イエンスの方なんですけども――宗教と科学の接点についてちょっと聞きたいと思うんですけども、よろしかったら答えてください。

（尊師） まず、アインシュタインが徹底したユダヤ教徒であることは知ってるよね。

（質問者D） はいはい。

（尊師） で、科学というのは、精神科学から降ろされた情報の一部を一生懸命追いかけてるということだとわたしは思うんだよ。つまり、まず先に精神科学があって、その後に実際の科学が存在してくるというか。で、それについてはね、今日、これは阪大で宇宙物理学をやってたマンジュシュリー・ミトラが来てるから、より詳しくちょっと聞いてみようじゃないか。

（マンジュシュリー・ミトラ正悟師） 皆さんもね、ご存じのように、いわゆる偉大な科学者とおっしゃる方はね、皆、例えば瞑想の経験とか、あるいは深く思索し続ける経験を持ってるかしています。で、これは、わたしたちがね、オウム真

理教の修行においてなされる瞑想その他の修行と同じなんだね。

で、そのとき、実は宇宙の構造というのがあるわけですけれども、この現象界に対してさらにその上のね、アストラル世界、それからその上にコーザル世界というね、情報の本質のあるところがあるわけですが、そこからの情報をキャッチするわけです。で、それが、例えば啓示であるとか、ひらめきであるとか、あるいは直感であるとかいう形でポッと与えられるわけだね。

で、後、それをいかにね、具体的に、例えば数学的に記述していくかとか、あるいは観測によってそれをね、証明していくかというのが、どちらかというと技術的な問題になる。だから問題は、要するに、いかに根本的な情報にわたしたちが触れるかということになってくるわけです。で、それをね、直接的に扱っているのが、まあ精神的な科学ということですね。ですから、その成果の一部を利用していくのが物質的な科学ということになると思います。

（尊師）で、そのアインシュタインのね、言葉の中で有名な言葉があるわけだけ

ど、自分は科学の大きな波の一部を経験したにすぎないと。そして、真理の本当に一部を経験したにすぎないという有名な言葉があります。しかし、わたしはそれは事実だと考えています。なぜならば、先程言ったとおり、サイエンスというのは、精神科学から降りてきた一部なんだということだよね。まあ、それについては、これから徐々にオウム真理教の方でもいろんな形で証明をしていきたいと考えています。よろしいでしょうか。

◉科学的な疑問は差異を背景にしている

（質問者E） 基本的にはいいんですけど、科学というのは、サイエンスの方は、今精神科学から降りてきたものの一部と今言いましたよね。もうちょっと詳しく説明していただくとうれしいんですけども。何か具体的なことで。よくわからないんですが、はっきりはそのへんが。

（尊師） 例えばね、電話があるとしましょうと、ね。そうすると、電話というの

は、ここからある場所に対して瞬間的に話をしたいという発想から起きてきてるね、当然。ところがそういうのは、例えば、教団内においては日常茶飯事で起きるわけだよね。

で、例えばそれはどういう形で起きてくるかというと、先程マンジュシュリー・ミトラが言ったように、アストラル——つまり、このアストラルというのは音の世界なわけだけど、その音の世界を使って速く伝播するというか、例えば今の電話を考えた場合も、一応電気を信号に変えて、そして対象に対して送るわけでしょ。それと同じように、例えばアストラルで、あるエネルギーを信号に変えて対象に送るわけだよね。で、そこに気づいたのがベルではないかと、あるいはエジソンではないかということだよね、例えば例を挙げるならば。まあこれは、科学技術の問題に入るわけだけどね。

もっと典型的な例をいうならば、アインシュタインが相対性理論の理論背景の中でこういう表現を使ってるよね。例えば、一般の生活の時間のスピードと、そ

れからある人が、例えばまあ、ものすごく熱い、そうだね、鉄板の上に座ってる場合とでは時間の流れが違うじゃないかと。つまり、時というものは絶対的スケールではないんだと。

（質問者E） ええ、聞いたことありますけど。

（尊師） あるよね。わかるよね。こういうこともすべて、先程言ったとおり精神科学から出ていることでしょ。

（質問者E） それは、精神科学かどうかよくわかんないんですけども、ちなみにアインシュタインは、普通の人間といる場合は時間の経ち方は同じですけども、美人といるときは時間の経ち方が速いと言ったように記憶してるんですけど。

（尊師） その一つだけじゃないよね。それはもっと読んでちょうだい、しっかりと。だから、例えばそういう、まず心に対してしっかりと洞察すると。心に対してしっかりと洞察することによって、その差というものをこの現象界に降ろした場合、それが科学でしょ。

（質問者E）そんなもんですかね。
（尊師）じゃあ、君にとっての科学はそうじゃないんだ。
（質問者E）いや…。
（尊師）つまり科学というのは、必ず差異というものを起点として…。
（質問者E）差異って何ですか。
（尊師）例えば、ある理論があるとしましょう。その理論と例えば現象との間にどのような関連があるのかと。まず、これが第一段階で考えられると。
（質問者E）あ、それはそうですね。
（尊師）でしょ。ところが、その理論とそれから現象の間に疑問を生じない人というのは、そこから発展しないよね。
（質問者E）当然ですね。
（尊師）でしょ。つまり、その理論と現象との間の差、つまり相違点を追究していくのが科学じゃないの。

（質問者E）あ、そうです。っていうか、その疑問の追究ですよね。

（尊師）いや、だから単純に疑問の追究ではなくて相違の追究じゃないのかな。まあ、そこで君のいう曖昧語の疑問というものと、それからわたしのいう差異というものとの間におそらくズレがあると思うんだね。つまり、疑問というのは何かというと、もともとわかっていることを疑問として生じさせる場合と、それからわからない部分について、あるいはズレについてしっかりと押さえる場合と二つあるよね。

（質問者E）ああ、おそらく後者の方を僕は疑問というと思うんですけども。わかってることっていうのは疑問じゃないと思いますけど。

（尊師）いや、わかってることも疑問だと思うんだよ。

（質問者E）え、どういう、例えばどういうような感じなんですか、わかってる疑問というのは。

（尊師）ここに、例えば先程言ったオウム真理教の教えがあると。そして、オウ

ム真理教の、要するに、そうだね、デモビデオが流れたと。それに対して疑問を生じさせたと。しかし、これはしっかりと考えていけばわかる内容だよね。

（質問者E） あ、あ、そういった類いの疑問ですね。

（尊師） そうです。だから、科学的な疑問っていうのは、あくまでも差異を背景とした疑問であると。

（質問者E） あ、言ってることわかりました。

（尊師） ということなんだよ。で、それをまず精神世界において、精神科学において追究して、それが降ろされてくると、科学というのは。わたしは科学技術を言ってるわけじゃないから。

◉大脳は受信機、データバンクの働きをしている

（質問者F） 人間がものを考えたりするときには、大脳を使って考えてるとかと思うんですけど、魂とか、例えば死後の世界とかっていわれた場合、体がなくなっ

た状態で、例えば魂とか——オウム真理教ではどうか知りませんけど——死後の世界でまだ意識があるというようなとらえ方をしている話を聞いたことがあるんで、体がなくなって人間の脳自体で思考が行なわれていないときに、果たして魂っていうのがあり得るのかどうかっていうの、そこらへんはどういうふうにとらえてらっしゃるでしょうか。

（尊師） いや、もちろんそれは存在するよ。そして、意識も存在するし、思考も存在する。というよりも、思考を最も鋭くしている状態というのは、死後のある段階だと、これは仏典にうたわれてるし、わたしの瞑想体験においても同じことがいえます。

（質問者F） ということは、人間がこういうふうにものを考えたりしているっていうのは、すべて大脳によるものばかりじゃなくて、それ以外の何かによってもいえるということですか。

（尊師） 大脳というのは、単なる、そうだね、思考をするときの、まあ例えばデー

タバンクであったり、あるいは、そうだね、データバンク、あるいは——ちょっと難しいな。何が難しいかというと表現が難しいわけだけどね——要するに、考えてるということそのものは大脳で考えてるんじゃないんだというのが仏教の考え方なんだよね。で、その例として挙げるならば、例えば、もし大脳で単純に考えてるんだったならば、精神的コンディションによって、例えば記憶力とか、あるいは思考のレベルっていうものが狂ってくるはずないじゃないかと。これはどうだ。

（質問者F） うんと、そのへんは学者じゃないんで詳しくはわかりませんけど、例えば体調が悪くて、血の巡りが悪くて頭が鈍くなるとか、例えば貧血を起こしたときにはものを考えれる状態ではないとか、そういったことはあり得ると思います。

（尊師） うん、だから例えばね、たくさんものを食べたときと、それからある程度空腹なときと、どちらの方が思考力があるのかといった場合どうかな。

（質問者F）ある程度空腹なときですか。

（尊師）だよね、やはりね。で、じゃ例えばそのときだよ、大脳に対する血液の量というものが変化してるのかと。あるいは逆に、次に血液の量を変化させることによって思考というものは鋭くなるのかという問題があるよね。

（質問者F）はあ、その点に関しては実際自分で確かめたわけじゃないので断言はできませんが、ものを食べた後っていうのは、胃や腸、肝臓の方に血液が流れていて、空腹時に比べたら大脳ってか頭の方に回っている血液量っていうのは多少、少ないという話を聞いたことがあります。

（尊師）じゃあ逆にだよ、じゃあ血を多く流すことによって、大脳の働きは正常になる、あるいはそれ以上になるというデータはあるかな。

（質問者F）それは聞いたことがないです。

（尊師）ないよね。だからまあ、マイナスの情報というか、血液の流量が少ないがゆえに大脳の働きが鈍くなる、あるいは血液の流量が正常なるがゆえに大脳の

働きは良くなるとか、あるいは正常になるという単純な問題ではないと思うんだよね。例えば、例としては植物人間を考えたらわかるとおり、植物人間で、例えば大脳のある部分が全く損傷がないとしても、結局その人の知性というのは止まってしまってる場合もあるわけでしょ。だよね。

（質問者F） まあそうですね。

（尊師） だから、大脳でものを考えるということに対する反証というものはいろいろあるわけだけど、でも逆に今度は、医学的実験において、例えばある大脳の一部分を切り落とした場合、それによって思考力が停止するとか、あるいは記憶力が停止するということがあるわけだから、それから考えるならば、大脳は何らかの受信機の働きをしている、あるいはデータバンクの働きをしていると考えるのが妥当じゃないかと思います。

（質問者F） あ、よくわかりました。

（尊師） はい。

◉本質的な能力に限界はない

（質問者G） いろいろな修行によって人間の能力が開花するって言ってましたけど、その能力に限界はあるんでしょうか。

（尊師） 例えばね、人間が執筆をするスピードがあるとしましょう。例えばまあ、一人の作家が書ける限界っていうのが一日原稿用紙四十枚だとしようじゃないか。ね。ところが、修行によって、例えば、一日原稿用紙三百枚五百枚のものが出せるとしましょう。

しかし、それは粗雑な肉体を使っている以上、例えば口の限界とか――つまり、口を動かすための時間的な限界とか、あるいは手を動かすための時間的限界に制約されることによって、その能力というものはある段階で制約を受けることになる。しかし、本質的な能力については限界はないと考えていいと思います。わたしの言いたいことわかるかな。

つまり、ソフトの部分については限界がなくて、ハードの部分について限界が

あるんだということだね。

◉サキャ神賢はヨーガを実践していた

（質問者H）今ビデオを見せてもらったんですけれど、そこでヨーガのことが出てきたんですけど、オウム真理教というのは、ヨーガなんでしょうか。

（尊師）質問していいかな。仏教は、君は何だと思うか。君たちは仏教というものが存在していると考えてるかもしれないけど、仏教というのは、釈迦牟尼が亡くなられた後に仏教徒たちがまとめた教え、これが仏教です。そして、例えばサキャ神賢の、釈迦牟尼の教えの中で仏教という言葉は一度も使われていません。では、彼は何を実践したのかと。彼はヨーガを実践してたんだよ。

ということは、オウム真理教の中で、ヨーガという言葉が出てきても当然だし、例えば、インド・ヨーガの大家である聖者アカンダナンダは、原始仏教の研究をしているということから見ても、わたしの言っている意味合いが理解していただ

けると思います。つまり、日本というのは、完全に仏教国といいながら仏教音痴なんだね。よろしいでしょうか。

◉宇宙人は意識堕落天の神

（質問者Ｉ） 単純な質問なんで端的に答えていただきたいと思います。宇宙人はいますか。

（尊師） います。

（質問者Ｉ） いるとなると、それはいわゆる――いろいろ本読んだんで、欲六界ですか、現象界っていうんですか、それの属するあれだと思うんですけど、前世が宇宙人だったっていう人がやっぱりいるわけですか。

（尊師） はい、います。宇宙人というのは、欲六界の中の意識堕落天を指してるんです、今は。

（質問者Ｉ） どうもありがとうございました。

一九九一年十一月一日

COLUMN—1

◉尊師と巡り合ってから

信州大学理学部　高橋英利

わたしたち人間は、その本質な〝生〟を知らずに生きている。僕は社会を観察していて、どうしてもそういう見解に達せざるを得なかった。僕のこれまでの経験によると、人間はただ己の環境に対し反応することしかできていない。それぞれの取り巻く環境に対し、絶対的な自由を獲得できない……。これは、僕にとって根源的な寂しさを感じさせるものであった。

あまりに無力なわたしたちは、時をごまかして生きねばならないのであろうか？楽しみとして得られるものは、みな一瞬のものであるように感じた。

尊師が信州大学に来られたとき、僕はなぜか淡々と会場に足を運んでいた。質問を試みるというより、未知のものにコンタクトを取る感覚だった。

講演会では、「僕の知りたいことを、この人は既に説き明かしている！」……そう直感し、背筋が凍った。

引っかかりは、宗教団体に対する周囲の懐疑心の存在だったのだが、これに対しては、尊師の横に座る高弟のミラレパ正悟師の姿を一瞥し、そういった観念がわいたことに恥ずかしさを感じた。また、その後のアーナンダ師との面談は、まさに僕に確信を与えてくれた。

最初の十日間は〝やっと見つけた！〟

という歓喜状態でいっぱいだった。僕を導いてくれた、尊師とアーナンダ師と大橋君が夢に出てきて、僕は必死に彼らに追いつこうとしていた。

僕にとって、尊師に巡り合ったこの十一月一日は忘れられない日になりそうだ。

早速オウム真理教に入信した僕は、十一月十日は、尊師による五大エレメントのイニシエーションを受けた。この日から、尊師に対するイメージはいっそう強くなり、心がさらに軽くなる感覚を得た。今までの様々なわだかまりが一つ一つ落ちていくのを感じた。僕は、だんだんこの喜びを皆にも体験してもらいたいと思うようになってきた。

十二月十日、僕の体験を聞いた友達が入信した。この日の夜、僕は神秘的な体験をした。

尊師に巡り合って以来、とてもはつらつと生きている。僕は宇宙を見据える観察眼を養うためオウム真理教に入信し、修行をしていくつもりだったが、アーナンダ師の説法を聴き、その生き方を見、人としての現象界でのあり方を再び思索し始めた。

まさしく、僕の現世での生きる基盤を尊師は説かれている。僕に残る問題は、修行についていけるか否かである。あとは、俗世間に没しないように努力していくしかない。

◆第二話　キリスト教を包含する仏教の教え　（東北大学において）

「自己を超えて神となれ！」

◉統制経済後の解放経済

今日は「自己を超えて神となれ」という命題について、これから皆さんと一緒に検討していきたいと思います。

この「自己を超えて神となれ」、これは、今から二十一世紀に向かって、この日本がどのような方向に向かうのかとも重要な関係のある命題だと考えています。なぜならば、資本主義対共産主義の対決、つまりルソーから始まった解放経済対、そしてマルクスによって確立された統制経済の対決は、皆さんもご存じのとおり、

ソ連邦の崩壊といった形で解放経済の勝利に終わったと。

これが、次の段階でこの解放経済の中に二つの種が現われると。まあ、実際は現われるというよりも、二つに分化されると。その一つは、物質主義の権化の生き方をする魂と、そして、物質主義は物質主義として肯定しながら、その上に乗っかり、精神主義に至り、そして、より高い智慧・智性を得る生き方をする魂と。この二分化されると。

◉キリスト教的立場から見た預言

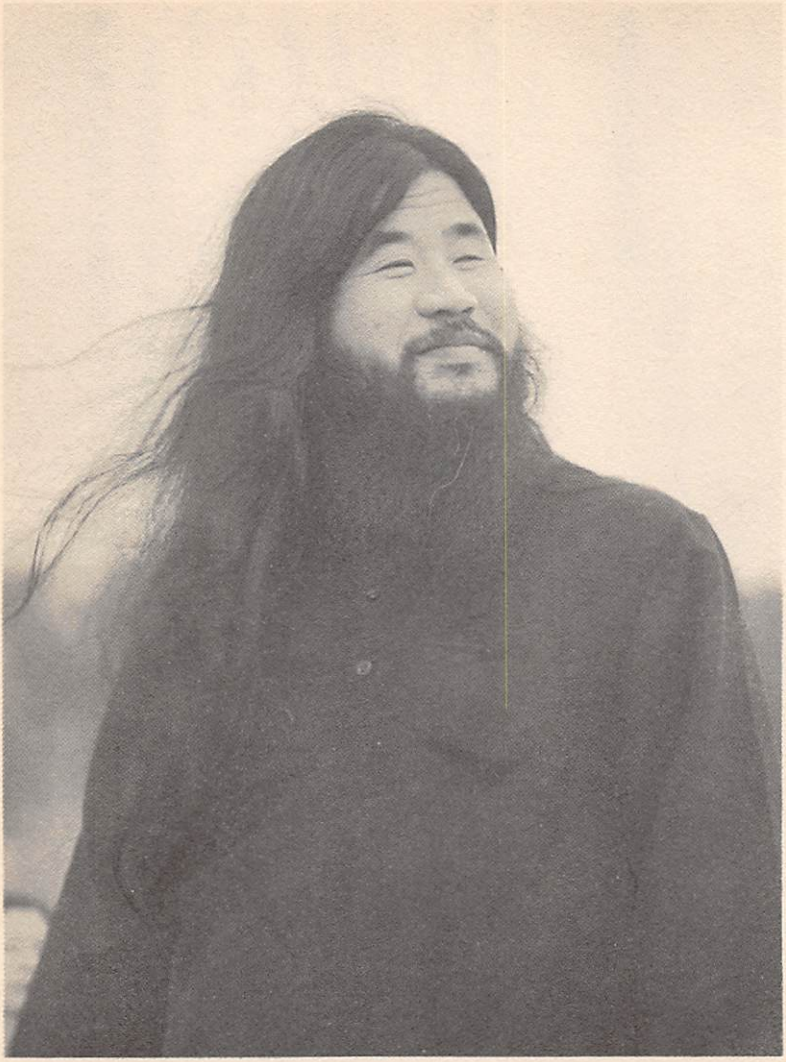
で、これは、キリスト教などでは「最後の審判」といった形で、この二分化された魂が、小羊とそして山羊といった形で表わされ、まあ山羊はすべて地獄に落ちるんだという一節ですべてを表わしていると。

この解放経済の後の預言は、実は、皆さんもよく知っている、『新約聖書』の中の「ヨハネの黙示録」の中に詳しく内容が解かれていて、これは、実際はかな

り示唆的な内容であるから、わたしたちにはあまり理解することができないかもしれないけど、それをよく読み、そしてその一つ一つの謎を解くならば、その選別の時は近づいているんだということが理解できるはずである。

例えば、例を挙げるならば、ベルリンの壁ができあがった時代からちょうど四十二年後、つまり一九九〇年に、皆さんも知ってのとおり、大統領制、そしてソ連の最高会議がかなり弱体したと。で、共産主義体制が崩壊の兆しを見せたと。まあ、これは預言どおり、四十二年後であったと。

とするならば、次に来るのは、中国の、同じように共産主義の崩壊、これは、おそらく来年から数年間の間に起きるでしょうと。そして、その次に、今わたしたちが想像している以上の災害が起き、そして人類のある部分は滅亡の方向へ向かうんだと。これがキリスト教的立場であると。



◉仏教的見地から見た生

仏教の見地から話をするならば、仏教というのは、もともとこの人生の喜びに重きを置いているわけではない。つまり、生、生きているということに対して重きを置くのではなく、この生はあくまでも次の死のための準備であるというような考え方をするわけだから、いかに人類が滅亡しようと、カタストロフィーが起きようと、そういうことはいっさい関係がないと。それに対する準備は、日々しっかり行なっていれば、全く問題はないはずであるという見解を採っていると。

これはちょうど、キリスト教的な発想からいくならば、一夜漬け的な勉強と。仏教的な発想というのは、日々努力し培ったもので勝負するということになるわけである。

◉預言の活用の仕方

ところで、これらの預言、これらの預言は、活用の仕方によってはわたしたち

の人生を豊かに幸福にしてくれるし、もし活用の仕方を誤れば、ただ単に不安を増大させるだけのものになってしまうと。

では、どのような形で活用するのかと。それは、カタストロフィーが起きようと起きまいと、そういうことはお構いなく、まあ一応起きるんだろうなという仮定のもとに、淡々と自分自身の心を成熟させ、そしてスピリット、霊性を成熟させていくと。これを培っておくならば、たとえ世紀末に何が起きようと、あるいは起きまいと関係なく自分の目的を達成することができると。

それはちょうど、例えば高校から大学に入るとき、基本的な数学、あるいは物理といったようなものを日々学ぶことにより、そして、自分自身が例えば大学に入り、理系の勉強をより速やかに進めるという目的のもとに用意をしている人の生き方と大変類似している。

ところで、そうではなく、もし、ただ単に世紀末にカタストロフィーが起きるんだという脅迫観念に襲われるならば、その人の生き方は悲惨なものとなろう。

なぜならば、これは皆さんもよく知ってのとおり、恐怖というものは精神の集中を妨げ、そして、その精神の集中を妨げるがゆえに、今なさなければならないことに対して集中することができず、結果的には自分の実力を発揮できない状態でその時期を迎えなければならないからである。

◉仏教とキリスト教の包含関係

ところで、なぜわたしが今日「自己を超えて神となれ」という命題を皆さんに提供したかというと、これは仏教にしろキリスト教にしろ、教えている内容は一致していると。ただ、その教えている内容の包含関係が、仏教の中にキリスト教の教えというものがすべて含まれるのであるということを理解できれば、結局、宗教というものは、いや真理というものは一つの体系なんだなと。

そして、それさえ実践すれば、キリストのように、あるいは仏陀釈迦牟尼のような、偉大な心と偉大な精神と、そして偉大な神秘的な力を有する魂になること

ができるんだということをお話ししたかったからである。

◉『聖書』における堕落天使

では、その世界観について検討してみよう。

まず、『聖書』においては、「堕落天使」という言葉が出てくる。この堕落天使とは、仏教でも同じ言葉、例えば意識堕落天だとか、あるいは戯れ堕落天だとかいう、この愛欲の世界の神々のことをそう表していると。で、この堕落天使は、父なる神の使いであると。で、この父なる神の使いとは何かというと、この父なる神とは、神聖世界、仏教的ないい方をすれば、神聖世界――神聖世界とは、性欲や食欲を完全に滅した神であるというわけだけども――その神聖世界の「御使」、使いとして登場してくる。

そして、この意識堕落天使、あるいは戯れ堕落天使、キリスト教でいう堕落天使に至るための、まず修行というものは、わたしたちが日々聖者に対して布施・

奉仕等の功徳を積むことによって、そこへ至ることができると説かれている。

例えば、これは、『聖書』の一節を借りるならば、わたしの弟子に対し水一杯でも施した者は、来世神の世界へ生まれ変わると。まあ、もちろん、水一杯施したぐらいでは神の世界へ至ることはできないだろうが、そのような心を持ち合わせているならば、神の世界へ至ることができるということを説いているのである。

◉仏教における最終までの段階

同じように、仏教においても、まず修行の第一歩は布施から始まる。この布施は、まず食事の布施、そして座具の布施、敷物の布施、寝具の布施、それからあと住まいの布施といったようなものが推奨されている。これらはすべて、神聖世界へ至る、あるいは他の神々に至る仏教徒のために説かれた教えである。

これらの教え、これらの教えをもししっかりと実践するならば、わたしたちは堕落天使の世界へ入ることができる。皆さんは、この堕落天使という意味が理解

できないかもしれないが、要するに、まだ煩悩を有している天の神々であるというふうに理解していただいたらよろしい。

そして、この堕落天使から一歩進んだ修行をする。つまり、煩悩を捨断することにより、しかし生存に対する欲求を持ち合わせた魂は、形状界の世界へと入っていくと。この形状界の世界が、例えば父なる神であったり、あるいはアラーであったりするわけである。つまり、あなた方も、そのような父なる神、あるいはアラーに至ることができるということを仏教では説いているのです。

この形状界へ至った魂は、そこで宇宙の創造・破壊という担当をすることになる。そして、その宇宙の創造・破壊といった担当をし、その状態において、生存の無意味性、これを悟った魂は、そこでもう一段階、生存に対する欲求というものを完全に超え、そして、非形状界、心の本質の世界へと入っていくと。

この形状界には十七段階あり、そして非形状界には四段階あるわけだが、この四段階の心の世界を通過し、心の本質そのものが、結局わたしたちを苦しめるん

だと理解した魂は、そこから経験認知滅尽、つまり、すべてを完全に空にした本質の世界――これは、ヨーガではアートマンといっているわけだが――その本質的な世界へと没入するのである。

これが、仏教、ヨーガ、あるいはキリスト教、『旧約聖書』等を通しての統一した世界観である。そして、これ以上の世界観は存在しないし、またこれ以外の真の世界観というものも存在しない。ということは、わたしたちが何をなせば本当に幸福になり、何をなさなければ幸福にならないのかということが、おのずと見えてくる。

◉五つの愛欲の構成要素

例えばである、皆さんが最も欲しがっている集中力、この集中力というのは、皆さんも経験があると思うが、雑念によってその集中を阻害されると。

では、この雑念とは何かというと、これは五つの愛欲の構成要素ということに

なる。

例えば、それは、スタイル、あるいは顔に対するとらわれであったり、あるいは感覚に対するとらわれであったり――この感覚というのは、グッドフィーリングだけではなく、バッドフィーリングもそうであるが――であったり、あるいは、第三番目にイメージに対するとらわれであったり、あるいは自分自身が過去において経験したことに対するとらわれであったり、あるいは識別に対するとらわれであったりすると。

この形状・容姿、つまり、スタイルや顔、そして感覚、イメージ、経験、そして識別――まあ、識別というのは判断だね。例えば、美しい醜い、あるいは、痩せている太っている、あるいは、熱い冷たい、あるいは、おいしいおいしくないといったようなそういう識別――これらの五つの愛欲の構成要素がわたしたちの心の中に強く浮いてくることにより、わたしたちの集中は途切れてしまうと。

もし、これらの五つの要素が浮いてこないような方法があるならば、わたした

ちは集中を続けることができる。そして、この集中を続けることができることによって、わたしたちは偉大な力を発揮するのである。

◉集中の長さとステージ

仏教やヨーガにおいては、その人の心のステージを集中の長さによって規定している。その基準は、二十分、四十分、一時間、三時間、三時間以上といったような分け方をしている。このときの集中というものは、その二十分の間いっさい雑念のわかない状態、あるいは四十分の間いっさい雑念のわかない状態、あるいは一時間の間いっさい雑念のわかない状態、あるいは三時間の間いっさい雑念のわかない状態なのである。

そして、三時間以上精神集中ができた場合、そのとき呼吸は停止し、そしてこの肉体から心の本質は離脱すると。心の本質が離脱することにより、この人間の世界の要素だけではなく、他の世界の要素を経験することができると。

経験することができるがゆえに、確信が出てくると。わたしの生まれてくる前はこうで、死後はこうなると。そのために、わたしは何を実践しなければならないのか、あるいは何を実践することによって苦しみ多き来世が待っているのか、あるいは、苦しみ多き今生の未来が待っているのかということが理解できるようになる。

つまりすべては、「精神を集中する」、この一言に尽きるわけである。そして、その精神を集中させるためのいろいろな技法、これが仏教による教えであり、あるいはヨーガによる教えであると考えたら、よく理解できるはずである。もちろん、ここに完璧な、例えば船を造る場合、その完璧な船をもともと昔造ったことのある人の設計図を借りてき、そのとおりに造るという方法が一つある。

これは、今オウム真理教が、まず船を造り、その後に世界の聖者方がどのような船を造ったかの図面を持ち帰り、その図面を正確に復元している作業を行なっているわけだが、それはそういうことである。これが、第一の方法である。

第二の方法は、自分自身で図面を解読することはできないから、その図面を解読することのできる人の教えを多く聞くことにより、自分自身でできるところから図面を書き、そして、船の製作に入るという方法である。

そして、第三番目の方法は、とにかく、自分にできる範囲内でその船の模造品をつくり、そして、とにかく走るということである。

これが、真理勝者、多学見解の修行者、そして独覚の修行者ということになる。この三つのタイプのどの道を選ぶにしろ、少なくとも皆さんが、これらの偉大な教えに触れ、そして今の生き方をより良く発展させていただくならば、それは、わたしが今日皆さんとこのような形でお話をできる機会を設けていただいたことに対して、大変喜びとして神々に対して感謝することができるのではないかと思います。

はい、それでは、質問に移りましょう。

【質疑応答】

◉学校の勉強と修行の関係

（質問者Ａ）僕は高校生なんですけれども、毎日学校とかで勉強していることっていうのは、麻原さんのおっしゃる修行においては意味があるもんなんですか。

（尊師）修行に対して意味があるかどうかというのは、高い知性を有すればそれだけ高い理解力を有することができるわけだから、マイナスであるとは思わない。ただ、教科の内容そのものにもしズレがあるとするならば、それが間違った観念を形成することになるから、そこのところは選択の余地があるということだね。だから、勉強というものを一つの土台として集中力を身につけるということにポイントを絞って勉学に励むならば、決してマイナスではないと思います。

（質問者Ａ）どうもありがとうございました。

◉表層意識・潜在意識・超潜在意識

（質問者B）よく酔っぱらうと意識がなくなる人がいます。例えば、自分がどんなことを話したか覚えてないとか、どうやってうちに帰ったか覚えてないとかいうことですが、それは心霊学的に見たらどういうことでしょうか。

（尊師）人間の意識の層は、大きく分けて三層に分けることができます。それは、表層意識、それから潜在意識、超潜在意識といわれるものです。そして、わたしたちが通常〝わたしである〟と考えているものは表層意識であるわけだが、しかし、わたしたちを動かしてるもの、例えば衝動的行為等は、表層意識ではなく潜在意識の影響を受けています。

そして、この酔っぱらっているときには、この潜在意識が活動を始めると。例えば、わたしたちが生まれ変わりをするときの中間状態に入った場合、つまり死から次の生へ至るときの状態、このときにも潜在意識が働きます。つまり、酔っぱらっているときと、その転生を繰り返すときの意識というのは、大変似ている

ということになる。

今の質問の中で一つ面白いポイントがあるんで、それについて少し説明をしたいと。それは、例えば全く意識してないで例えば家に帰る、あるいは酔っぱらった後にいろいろしゃべるという人がいるわけだが、この人は明らかに他から見れば生きてるわけだし、そしてしっかりと活動してるわけである。

これと同じように、わたしたちの死後も同じ現象が起きると。つまり、表層意識の止滅の後、潜在意識へと移行し、そして死から生へのプロセスのときにはっきりとした意識状態に到達するわけである。ところで、ここで一つ付加しておかなければならないことは、この表層意識が止滅し、潜在意識に入ったとき、それは酔っぱらったときにもそうだが、その潜在意識に入ったとき、その状態というものは、その人が瞑想体験によって潜在意識に自由に入ることができればはっきりと覚えているものです。よろしいでしょうか。

（質問者B） わかりました。ありがとうございました。

◉マルクス主義と新興宗教

（質問者C）わたしは、この東北大学で、学生運動のはしっこで闘ってる者なんですけど、いわゆるマルキストっていうか、マルクス主義の人たちは、新興宗教っていうのを一般に否定するわけですけど、そんなにも僕自身は、まだ海のものとも山のものともわからないと。それで、どれだけのものを持ってるのかっていうことを、今日ここで少し参考にできればと思って聞きにきました。

それで、今日話されたこととちょっとズレてるっていうか、今日聞きたかったこと、全然話していただけなかったんでズレてるかとは思うんですけど、今日話されたのは個人的な修行による個人の集中力、まあすなわち充実感だとか、そういうふうにいった幸福っていうもんですかね、そういう個人の、修行して幸福になるという、そういう個人的なことしかお話しにならなかったと思うんですけど、僕らとしては社会を対象にしているわけで、僕の考え方では、個人の幸福っていうのは社会体制とは無関係にいられない、社会体制が悪ければ個人の幸福ってい

うのはあり得ないんじゃないかと、そういうふうに考えてるわけです。

で、例えば、この前っていうか、あまり皆さん知られないかもしれないんですけど、日雇い労働者の方が九月の十七日かに千葉の松戸で、台風の何号かで水が増水してるにもかかわらず仕事を続けろってこと言われて、それで七人が溺死してるんですよね。

で、いったい、オウム真理教っていうか、麻原氏の考え方によっては彼らの幸福っていうのはどうやって得られるのか。で、その問題と僕ら自身の問題っていうか、僕ら自身も日々ね、受験勉強だとかから、まあ僕はもう四年生なんで同僚の連中が全く新聞とか読む暇もないっていう、今、世の中何起こってるのかっていうことさえ知らない、知り得ないっていう、そういうふうな環境に置かれてるわけですけど、この環境を変革することなくして修行だけで果たして幸福が得られるのか、こういうことをお伺いしたいと思います。

（尊師） 結論からいうなら、できますと。それはどういうことかというと、まず

一人一人の意識革命がなされない限り、全体の革命はできないとわたしは思うんだけど、それはどうかな。つまり、社会的にいかに今の権力とぶつかり合ったとしても、それははっきりいって、ものすごい力対小さな力のぶつかり合いで、結局もみ消されてしまうと。それだけではなくて、社会は多くの情報を流す権利を与えられていると。

よって、例えばあなたの思想が正しいとしても、その思想が日本全体に浸透することはなかなか難しいと。ところがだよ、ここに、もしその個人個人が意識革命していって、例えばすべての魂のために生きるんだという、まあこれは大乗の思想という思想があるわけだけど、そこに根づいた場合、つまりそれに気づいた場合は、その人たちは少なくともその周りの人たちに対して、何らかの干渉、干渉という言葉は正しくないね、何らかのいい影響を与えることができると。そして、その個人個人がそういう形で変化しない限り、今の物質社会からより高度な社会形態への以降はできないと考えるわけだけど、それについてはどう思います

か。

（質問者C）いや、そのとおりでしょう。

（尊師）うん、だよね。だから、例えば今実際のところ、ロシアが求めてるものは宗教なんだよね。で、なぜ宗教なのかというと、マルクス主義が一応崩壊したと。で、理想社会をつくるためには、どうしてもそれを支えるだけの偉大な宗教が必要であるということをいってるわけです。まあ実際に、いくつかの教団が入り込んで布教を始めてるわけだけど——まあもう少ししたらおそらくオウム真理教もそうなると思いますが、それは先程言ったとおり、結局個人個人、一人一人が高い意識状態、要するに神の意識状態に至らない限り、この世の中を神の世界に変えることはできないんだということなんだよ。

だから、例えば、その先程の労働者七人の方、これは確かにかわいそうな方だと思います。しかし、そういう問題というのはたくさんあると思うんだよね、日本では。どうかな、それは。

（**質問者C**）まあ、それはたくさんありますけど…。

（**尊師**）だよね。つまり、一つずつ、それに対して対処していらっしゃる方々っていうのは、確かに犠牲的な精神を持ってそれはそれで素晴らしいと思います。しかし、オウム真理教の方向性というのはそうじゃなく、一人ずつがそういうことに対してしっかりと考えられる智性だとか、あるいはそういう現象を起きなくするようなそういう力とか、智性とか得るために修行をしてるんだというふうに考えてください。そして、その方がわたしたちは早いと考えてるわけだよ。理解してもらえるかな。

（**質問者C**）まあ、麻原氏が社会変革ってことも目指してるってことをまあ言われたんで…。

（**尊師**）それでね、あなたに、わたしの弟子、これはよく知ってるアパーヤージャハという、青山弁護士という人がいるわけだけど、その人が『理想社会――共産党宣言から真理へ』という本を書いています。その中に、共産主義に対してオウ

ム真理教はどのようにとらえてるのかということがしっかりと書かれていますから、それをわたしの方であなたに差し上げますので、それを読んでください。よろしいでしょうか。

（質問者C）ありがとうございます。

◉宗教、そしてオウム真理教の目的

（質問者D）オウム真理教の目的は何であるのか、また、キリスト教、仏教、ヒンドゥー、イスラム、ラマ教等々の宗教を否定したところにオウム真理教はあるんでしょうか。

それとですね、宗教とは何であるのか。人がまだ動物というか、獣の域を出ないうちは神や仏といった思考は浮かばなかったはずで、その時代、動物たちの恐れの対象は自然の力でしかなかったわけで、それがいきなり脳の容積が大きくなって思考が深い領域まで入っていくようになったからといってなぜいきなり神仏の

登場の必要があったのでしょうか。そのへんをお聞きしたいんですが。

（尊師） まずオウム真理教は、すべての宗教――ま、といっても、一つの流れに属する宗教は肯定しています。で、オウム真理教の目指しているものは何かというと、それらの中に統一性があるはずであると。そして、その統一された部分こそ真理であるというふうに考えてるわけだね。

というよりも、別の見方をするならば、オウム真理教の教えというのは、今から二千五百年前にお説きになった釈迦牟尼の、サキャ神賢の教えこそすべての教義を内在しているというふうに考えてるわけです。で、それを証明しようとしてるわけだね。で、これが、だからオウム真理教の存在であると。

で、じゃあオウム真理教の目的とは何かというと、要するにその教義体系というものは、現実に可能な、わたしたちを人間から神にし、そして――まあ、仏陀というのは実際あるステージであるから、ここではそれを包含する概念として、十の力を有する魂という言葉を使いますけども――この十の力を有する魂へと人々

を変革していくことを目的としていますと。

で、次の段階で、なぜ動物から人間へ移行したとき云々ってあるわけだけど、ここで一つ疑問があることは、人間の、例えば大脳イコール、生命体において最高の容積じゃないわけだよね。それはあなたも知ってると思うけども。例えばまあ、クジラの大脳の容積は当然人間よりも大きいわけだし、あるいはサル系統の中にも人間よりも大脳の容積の大きいものはいますと。

で、そこから考えると、大脳の容積の変化によって生じたのではないと。で、これについては魂の落下のプロセスを正確に説き明かした「創世期経」という経典があります。で、その経典を現代的にわかりやすく説き明かした『創世期（オウム出版）という経典がありますので、それを差し上げますので読んでください。

それによって、魂がどのような形で落下したか、というのはね——笑ってるけど、それ一つ説明するだけで一時間以上かかっちゃうんだよ。だから、それをここで答えちゃうと皆さんに迷惑がかかるでしょ。それで、ね、差し上げますから、

それを読んでください。ということだね——そうすることによって、もともとわたしたちは高い世界にいたにかかわらずこうやって落ちてきてるわけであって、で、よって、ふと気づいたときにまた元の、ちょうどそれは先程、ね、質問にあったように酒を飲んだときに自宅に帰るのと同じように、ふと気づいたときに、いや、このままではいけないと。元いた自分の高い世界に帰りたいという、ね、心が生じてそちらの方向に向かうわけだね。いいですか。

（質問者D） ああ、いいですけども、誤解されていた部分があったので、大脳の容積が増えたからといって、神仏が登場したっつうわけじゃなくて、思考がより何ていうかな…。

（尊師） 高度になったということでしょ。

（質問者D） ええ、そうですね。そういうことです。

（尊師） うん。

◉精神と物質の違いと共通点

（質問者E） 精神と肉体っていうか、物質との違いと、共通する点をわかりやすく話していただきたいんで。

（尊師） はい。それは、その話をする前に定義を述べておかなければならないと。それは、大きく世界を分類すると三つに分けることができると。それは、先程も述べた、心だけでできあがっている世界と。それから、例えばあなた方が夢で経験するように、形はあるのだけども触れることができない、あるいは触れたとしても実態のない身体と心によってできあがっている世界と。そして、この世の中のように、粗雑な元素と心と、それから先程述べた幻影の身体と三つを共有している世界。この三つがまず存在します。

そして、まずこの粗雑な世界から説明をするならば、この粗雑な世界を五つのカテゴリーに分類します。それは、第一のカテゴリーが、固体、つまり固形だね。第二のカテゴリーが液体と。第三のカテゴリーが熱元素と。第四のカテゴリーが、

そうだね、風、空気――まあ空気といっても気体成分と考えた方がいいだろう――で、第五のカテゴリーが空間と。この五つの要素によって形成されていると。

例えば、人間の肉体を見るならば、骨というものは固体に属するし、例えば血液は二番目の液体のカテゴリーに属するし、例えば体温を発生させるもの、これは火のカテゴリーに属するし、例えば呼吸は風、気体のカテゴリーに属するし、例えば鼻孔とか口腔とかいわれている空間、これはすべて空のカテゴリーに属すると。

そして、これらの五つの要素と、そして内なる幻影の身体と、心の構成要素――まあ、この心の構成要素というのは、感覚を生起させるもの、つまり感覚を生じさせるものと、それからイメージを生じさせるものと、それから経験によって次の行動を起こさせるものと、そして識別、つまりいろいろと判断を加えさせるものと。この四つ――が存在していると。

で、この物質的な元素、この固体、液体、熱元素、そして気体元素、そして空

間。これらは、三つの要素から構成されていると。その三つの要素とは何かというと、熱の要素、そして振動の要素、そして光の要素と。この三つから構成されていると。この熱の要素、振動の要素、光の要素、これがすべての物質の根本であるというふうな考え方を持ってるわけだね。

で、第二の世界、より深い世界に入ると、先程述べた心の構成要素、感覚から識別に至るまでの要素と、それから形状しかない世界に入るわけだけど、ここでは熱の要素が完全になくなり、そこに存在するのは光の要素と振動の要素によってできあがった形状と、そして心の構成要素しか存在しないということになると。

そして、最も深い世界、最も心の本質に近い世界は、その振動の要素がなくなり、光の要素、この光の要素によって心の構成は形成されてるわけだけども、その光の要素のみが存在すると。

そして、最終的な段階では、その光の要素も存在しない状態へ至ると。

（質問者E）は、はい。いや、といいますか、ただ単純に、浮きますよね、なん

かテレビとかで見ると。その、精神が肉体に作用するっていうことは、ある程度相互作用があるということは、共通点がなければならないと思ったんですけれども。

（尊師）いや、だから先程言ったとおり、心の本質が、そのどの要素に影響を与えるかということなんだよ。先程三つ、三つを五つに分けたわけだけど、その三つ、あるいは五つをどのような形にしろ影響を与えることができると。

例えば、ここは東北大学だから、あんまり神秘的な話をしても皆さん信じないとわたしは思ってるんで、それで、実はかなり、ね、下がって話をしてるわけね。下がって話をしてるっていうのは、学問的に話をすることによって、今日のところはわたしの役目はそれでいいんじゃないかと。っていうのは、深く突っ込んで学びたい人は、いろいろなオウムの出版物があるわけだし、それは入信すれば済むことだから。

というのは、もともとここで講演を行なうということは、布教活動をしてはい

けないと。で、布教活動をするとするならば、それは今回担当してくれた、オウム真理教の、この大学にいる信徒さんに大きな迷惑をかけることになるんで、それでわたしとしては下がって話をしてるんだよ。

だから例えば、ね、制約のないところでやるならば、もっと具体的な話ができるんだけども。例えばだよ、まあ例を挙げるならば、わたしが君たちの額に手を触れただけで、君たちの火元素、あるいはエネルギーの流れは変わってしまいますよと言っても信じないでしょ。でも、これ実際、先月の終わりに二百五十名ぐらいに対して行なったわけだけど、ほとんどの人はその体験してるからね。

だから、そういう具体的な話をすると布教活動になるから、だからやりたくないわけだよ、わたしとしては。約束は守らなきゃならないと。

（質問者E） あ、じゃあ、どうもありがとうございます。

（尊師） ごめんなさいね。

◉オウム真理教の理想像

（質問者F）オウム真理教の理想像とはどういうものですか。

（尊師）いや、それはすべての魂が神になることだよ。そして、神を超えて、先程言った十の力を有する魂へと至ること、これが理想です。で、そのために、例えば一人で、ね、活動したとしても社会的に広がりがないので、教団というものを作って、その教団の組織的な力によってその教えを浸透させようとしていますと。

で、理想としては、その教えがすべての魂に浸透すればそれは理想です。よろしいでしょうか。

（質問者F）どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

一九九一年十一月三日

◆第三話　高い世界へ生まれ変わる思考を　（東京大学において）

「下位と上位に結びつけるきずなと転生」

◉愛欲を満足させる六つの世界

真理とは最高の科学である。わたしたちが、この世界に生存している意義について、徹底的に分析すること。そして、わたしたちが、この世界より高い世界へ生まれ変わり、あるいは喜び多い世界へ生まれ変わる。このために真の宗教は存在している。わたしが、最高の科学、宗教とは、いや、真理とは最高の科学であるといったのは、それらを証明しながら実際に体験していく教えという意味でこの言葉を使ったのである。

では、それらの説き明かす世界とは、いったい何であろうか。

まず、この愛欲を満足させる世界には、六つ存在している。

それを順に説明するならば、まず激苦地獄。激苦地獄とは、皆さんの知っている、よく、血の池地獄だとか、針山地獄だとかいわれている地獄である。実際ね、これは地獄に行ってみると、そういう世界だけではなく、もっと多岐にわたる地獄が形成されているわけだが、まず第一番目にこの世界が存在している。

第二番目は、動物としての発生であると。この動物としての発生については、皆さんにはいうまでもないことであろう。

そして、第三番目は、低級霊域であると。この低級霊域というのは、ま、この中でも、一生懸命勉強し、そして金縛りに遭い、幽体離脱を経験した者がいるかもしれないが、その世界こそが低級霊域なのである。

そして、下から四番目の世界、それは、この人間の世界である。

では、下から五番目の愛欲を満足させる世界は何だと。これは、意識堕落天と

いわれている世界である。この世界は、要するに格闘、あるいは相手を叩きつぶすとか、傷つけるとかいう心の働きをもとに形成されている世界である。

そして、六番目の世界、これは戯れ堕落天であると。この戯れ堕落天は、皆さんがこの人間の世界で経験している喜び、特に感覚の喜びのすべてを、完全な形で満足させる世界であると考えてよろしい。

◉愛欲界より高い世界とは

これらの、最も下位の六つの世界、この上に形状の世界が十七存在している。この形状の世界は、例えばアラー神だとか、あるいはヤハウェ神だとか、あるいはヒンドゥーのいろいろな神々だとか、そういう神々が存在している世界であると考えたらよろしい。

この魂は、原則としては不死である。原則として不死とは何かというと、宇宙が創造し、そして破壊されると。この期間以上の期間を生きているから、不死と

いうふうに定義づけられている。しかし、真理の教えにおいては、これらも、例えばある魂は二カルパ、ある魂は四カルパと――このカルパというのは、宇宙が創造され、破壊され、また次の宇宙が創造されるまでの期間、これを一カルパというふうに規定している。

そして、この形状界の最高位である超越童子天といわれる世界は、五百カルパ――つまり、五百回この宇宙が創造され、維持され、破壊され、そしてまた創造されると――このサイクルの間、生き続けることができると。よって、人間的なレベルから見たら、不死の世界ということができる。

これらの形状界の上に、四つの非形状の世界、つまり形のない世界が存在している。この非形状界は、空無辺境、識別無辺境、無所有境、非認知非非認知境という四つである。

そしてこれらは、まず、空無辺境、あるいは空間無辺境とも訳するわけだが、ここは二万カルパの長きにわたり、わたしたちはそこへ生存することができると。

そして、識別無辺境、これは四万カルパ、無所有境、これは六万カルパであると。そして、非認知非非認知境については、その認知が生起するまで、よって期間の規定はないが有限であると。

その上に、認知経験滅尽という、皆さんもよく知っている、ニルヴァーナとか、涅槃とかいわれている世界が存在している。

◉五つの下位に結びつけるきずな

そして、これらの世界、愛欲の六つの世界、形状界の十七の世界、そして非形状界の四つの世界、これらの世界にどのようにして到達するのかと。これこそが真理の実践なのである。そして、それをサキャ神賢は、五つの下位に結びつけるきずなと、そして五つの上位に結びつけるきずなという分類をしていらっしゃると。

この五つの下位に結びつけるきずな、あるいは五つの上位に結びつけるきずな

とは、これらの要素を持つ者は、それぞれがそれぞれの世界へ転生するんだということなのである。

例えば、第一段階の有身謬見といわれている下位に結びつけるきずながあると。この有身謬見とは、わたしたちがこの肉体であると。肉体こそわたしたちなんだと考える誤った見解にとらわれるものは、肉体の死と同時に気絶状態に入り、肉体を求めると。それによって、苦しみ多き肉体を何度も何度も経験させられる。

第二番目の動物。動物の発生は、疑念であると。これは、真理というものを否定し、そして、絶えず疑いの心を持つ魂が行く世界であると。

そして第三番目の世界、これは、誤った誓いや誤った戒律を実践した者が行く世界であると。この世界が低級霊域である。例えば、例を挙げるならば、宗教により煩悩を増大させると。そして、その煩悩をこの現象界において満たし、他に施すことをしなかった魂は、当然低級霊域の中心的な生命体であるプレータ、つまり餓鬼として転生すると。

そして、下から四番目、人間の世界は愛欲の憤激であると。つまり、異性に対して強烈な興奮をする魂は、人間として転生するのである。

第五番目のパート、この意識堕落天は、害心、つまり相手を傷つけてやろうと、相手を叩きつぶそうと、相手を排斥しようとする心の働きのある魂が行く世界である。

このような形で、このような条件が生起すればこのような世界へ転生し、このような条件を止滅すれば、つまりこのような条件をなくしてしまえばその世界へ転生しないと。これが真理であり、そして、今から二千六百年前、お釈迦様がお説きになった法則なのである。

◉五つの上位に結びつけるきずな

では、上位五分結とは何であろうか。

まず、形状に対するとらわれ、これが一番に来ると。つまり、美しいものに対

してとらわれる魂、それでいて先程言った五つの条件をクリアしている魂は、形状の世界へ、形状界へと転生する。この形状界の寿命は、一カルパ、つまり、この宇宙が創造され破壊されるまでの間、生きることのできる世界へ転生するのである。

そして、上位に結びつけるきずなの第二番目は、非形状、つまり形のないものに対するとらわれ、あるいは無に対するとらわれである。この、無に対するとらわれ、あるいは形のないものに対するとらわれだけで、それでいて先程の六つの条件をクリアしているものは、非形状の世界へと至り、空間無辺の境地へ到達する。これは、先程述べた二万カルパの長きにわたり、そこで楽しみを享受することができると。

三番目の上位に結びつけるきずな、これは慢である。この慢は、形状、非形状という二つの条件をクリアした上で、もし慢が生じるとするならば、それは識別無辺の境地へ到達し、四万カルパの長きにわたり、そこで生存することができる

と。

そして、四番目の条件、これは、興奮である。まあ、よくわたしがテレビで怒鳴ったという話があるけども——実際、わたしは怒鳴ったつもりはないわけだけども。ま、それはいいとして——その興奮、これは上位に結びつけるきずなの、上から二番目のカルマということになる。もちろん、先程述べた八つの条件をクリアしてこの興奮のみが存在している場合、この魂は六万カルパの長きにわたり、そこで生存することができると。

そして、最もこの上位に結びつけるきずなの中で最高のものは、非神秘力である。この非神秘力とは、自分の経験したもの以外は信じないという考え方である。しかしこの、自分の経験したもの以外は信じないという心の働きは、結局光を遮断することになり、そしてすべての現象をありのままに見つめることができないと。ありのままに見つめることができないがゆえに、経験のよしあしというものを、結局経験によってのみ判断するしかなくなってくると。

そしてこの、非神秘力を完全に超越したとき、その人は、最終の解脱、最終の離解脱を得たことになる。仏教でよく「縁起、縁起」といわれるのは、実はこの条件のことをいっているんだね。

そして、皆さんは、今日、この話を信じる人、信じる人は早速その実践を行ない、そして、できるだけ高い世界へ生まれ変わる思考をする。これは、智慧ある者の態度だと考える。もし、そういうものは信じないという人は、大変残念な来世を送ることになるだろう。

このような形で、仏法というものは、あるいは真理というものは、完全数学の形、あるいは、完全科学の形で展開されている。いっさい、曖昧な要素というものは存在しないのである。

はい、それでは質問を受けましょう。

【質疑応答】

◉高い世界へ生まれ変わる実践法

（質問者A）僕がまず聞きたいのはですね、例えば講演の最後におっしゃられましたよね、この真理をお聞きになった方は信じて実践してみてくださいと。それはどういう実践なんでしょうか。

（尊師）先程も言ったと思うけども、例えば、この肉体イコールわたしではないんだというふうに考える訓練をするとか、あるいは、例えば人生についていろんな疑念がある場合は、あるいは現象に対して疑念がある場合は、それを徹底的に検討するとか、あるいは、それは例えばあなたが何かの教えを実践している場合でもしていない場合でもいいわけだけども、もししている場合、まあしてない場合にしろ、あなたの人生論というのがあると思うんだけど、その人生論について徹底的に検討を加える必要があるとかね。

例えば、性的な憤激、興奮に対して、それを鎮める努力をする必要があるとか、

あるいは、例えば害心、他人に対して害をする、まあ他人を傷つけるような心の働きというか、それを止める訓練をするとか、そういう努力をしたらどうだという話をしたわけだ。

（質問者A） あ、そうですか。それについて、ちょっとじゃあお聞きしてもよろしいでしょうか、今おっしゃったことについて。

（尊師） はい。

（質問者A） 性的興奮を鎮めるなり、まあそのような欲望を鎮めるなりといいますか、特に僕はその性的なものについてお聞きしたいことがありまして。人間というのは、まあここにいる皆さんもちろん人間ですから、生殖器持ってるわけですよね。当然ですね、それはね。

で、そういうものを持ってる以上、これはとりあえずは、まあ神というものが存在するにしろ存在しないにしろ、僕は仮に神という言葉を法則というもの――法則っていうのはどういうことかというと、当たり前のことです。例えば、重力

というものがあるということとか——例えば、そういうものと同じようなレベルとして見た場合、例えば人間がこうして生殖器を持って生まれているということは、わざわざそれを、性欲を抑える、ま、異常に、うーんとそれを興奮させてはいけないとは思いますけれども、日常的な人間のレベルで、それを行使するというか、まあ行使するという言葉は変だと思いますけれども、それ自体は別に抑止する必要はないと思いますけれども。

（尊師） うん、確かに君の言うとおりだ。ただし、ただしだよ、何を言いたいかというと、人間が生まれ変わるとき、人間として生まれ変わるとき、必ずその性的憤激が因となるんだよ。原因となるわけだ。つまり、性的憤激が原因となるとするならば、それを捨断しない限り人間界へ転生してしまうじゃないかと。だから、転生を捨断したければそうしなさいよということなんだよ。だから、下位に結びつけると言ったでしょ。地獄から始まって意識堕落天の五つの世界に生まれ変わらないための条件を話してるわけだから。そうじゃなくて、人間として楽し

んで、まあ次、他のことを捨断して人間界へ生まれたいと考えるならば、それはいいんじゃないか、好きにして。

（質問者A）あ、すいません。あ、それは先程のお話がちょっと僕にとって難解でしたから、ちょっと解釈の仕方を間違えたかもしれませんけれども。

（尊師）ということなんだよ。

◉「とらわれ」の起源は？

（質問者B）わたしは、人類学という学問を通して、人間の宗教とか文化とかについて、それほど長くはありませんけれども勉強してきまして、やはり仏教的な論理の優越性みたいなものは、まあ感じずにはいられないと。例えば、どこの本だったか忘れましたけども、ニーチェがキリストは仏教徒だったというふうに言ってるようなことなんていうのはそういうことなんじゃないかなっていうふうに解釈してるような…。

（尊師）そのとおりです、それは。

（質問者B）そういう人間なものですが、まあそういう立場からちょっと質問をさせていただきたいんですが、尊師は先程人間というか、まあ魂といいますかは、いくつかのステージに分類できて、それは執着の種類によって分類されるのだと、こういうふうにおっしゃられたということでよろしいんでしょうか。

（尊師）段階を正確に分けるならば、まず、そうだね、執着というよりもとらわれの方がいいかもしれないけど…。

（質問者B）とらわれ？　わかりました。

（尊師）はい。まず、第一段階で自分の経験したものだけにとらわれる場合と、それから自分の識別、つまり判断にとらわれる場合と、それからこの肉体ではない、夢で生じる身体があるわけだけど、その身体と心の働きにとらわれる場合と、それから感覚器官にとらわれる場合と、それから渇愛にとらわれる場合と、それから愛著にとらわれる場合と、生存にとらわれる場合という段階があるよね。

（質問者B） それで、質問したいことは一つだけなんですが、そういったそのとらわれっていうものですか、それに対する、それの起源っていうものは、いったい何なのか、結局こういう宇宙というものが、そういうとらわれによって構成されてしまっているということはなぜなのか、もしくは、まあ他のもので構成される可能性というのはなかったのか、こういうことについて、もし今の日本語で説明が可能でしたならばお答えいただきたいと。

（尊師） 一言でいうならば、非神秘力と。非神秘力というのは何かというと、わたしたちの本質――まあこれはアートマンっていってるわけだけども――これは仏教でもアートマンって使ってますから、アートマンって使わせてもらいたいわけだけど、真我、つまり〝真実の我〟がすべてを見通すことなく、瞬間的に――まあ、仏教でいう貪・瞋・癡、ヨーガでいうところのラジャス、タマス、サットヴァという三つのエネルギーがあるわけだけど――その美しさに翻弄されたがためにそこから落下が始まったということだね。

（質問者B）それは、その三つの要素に翻弄されたということが起源であると。
（尊師）そうです。
（質問者B）なるほど。その三つのものの起源は、たどることはできるんですか。
（尊師）いや、っていうか、その段階から二元論が始まるんです。
（質問者B）なるほど。その前までは一つであったという…。
（尊師）その前は別個の要素が存在して、真我という存在と、それから先程言った、まあグナとか、あるいは三つの要素、貪・瞋・癡といわれる三つの要素とが別々に存在してたと。
（質問者B）それが一つになったときが宇宙の始まりであるということ？
（尊師）そうです。
（質問者B）わかりました。
（尊師）はい。

◉水子の魂の存在理由

（質問者C） まず一つ質問ですけど、例えば水子のように生まれることさえできずに死んでいった魂というのはどうなるのか。それと、あと…。

（尊師） 一つずついこう。まずそういう魂は、人間としての要素が不完全な状態で入ったわけだよね。で、殺生、まあ前生の殺生のカルマによって殺されるということにより、まあ低位霊域で存在するか、あるいはもう一度人間の身体に生まれ変わるか、あるいは動物へ生まれ変わるか、この三つの要素だと考えていいと思います。

（質問者C） はい。それじゃあ、そういう魂の現世における存在理由っていうのは何なんでしょうか。

（尊師） 存在理由は、先程も述べたとおり、その先程言った、非神秘力から始まって、経験の構成、そして識別、それから心の働きと形状-容姿と、まあ段階があるよね、先程説明した。その段階、つまり執着、あるいは愛著というものがこの

人間に生まれる要因であるということだね。

だから、例えばあなたが今人間として生まれているわけだけど、今いろいろ心に浮いてくるそういう愛著をすべて捨断した場合、この人間界に存在する意義を見いだすかどうかといったら、どうかな。

（質問者C） 見いださないでしょうね。

（尊師） でしょ。

（質問者C） はい。

（尊師） ということだね。

◉運命をつくりあげるのは日々の積み重ね

（質問者C） それと、日本における最終解脱者が、尊師お一人だとすれば、最終的に他の人たちの魂の向かうところっていうのは何なのかって…。

（尊師） 他の人たちも最終解脱に向かってるんです。

（質問者C）あ、それじゃあ、いずれはすべての魂が解脱できるんでしょうか。

（尊師）はい。それを目的としてます。

（質問者C）目的っていうことは、でも、それはやっぱり生きているっていう状態で何らかの努力をしていないといけないわけですよね。

（尊師）あのね、太陽が七つになるって話があるわけだけど、この宇宙が崩壊するときに魂が二分化されるんです。これは仏教で説いていることも同じだし、キリスト教で説いていることも同じだし、あるいはユダヤ教で説いていることも同じだし、そうだね、どの宗教も同じことを説いてるね。もちろん、オウム真理教も同じように説いています。

その段階で、この破壊されるときに、例えばまだ未成熟の魂は他の宇宙の地獄へと追いやられ、そうじゃない魂はこの宇宙を超えた光音天の世界へと至りますと。いいかな。

（質問者C）あ、それじゃあ、まあ例えば、尊師のお話を聞いて一歩でも解脱に

近づけたであろう、例えば地球の裏側で不慮の事故によって死んだ人っていうものはただ不運だったんでしょうか。また、不運だとすれば、解脱は運によって左右されるもので、人間性が反映されないんじゃないかっていうような気がするんですけど。

（尊師） それは簡単だよね。例えば、ここに種があると。ね。この種の中で、どれかはまかれ、あるいはどれかは日干しにあったとしようじゃないか。でも、種の状態のときは両方とも成長する、あるいは花となる可能性があったわけでしょ。で、一方は、それが例えば日光によって完全に焦がされてしまい、一方は花として成長すると。これは何かというと、条件だよね。条件っていうのは、だから縁といってるんだよ。

で、日本では条件といわず縁といってるからわからないわけだけど、まあ人と縁があるというのはそうではなくて、出会うという条件があったんだというふうに考えたらわかる。

で、そっから考えると、例えば地球の裏側にいた人はわたしと会う条件になかったと。ところが、君は会ったということだよ。

（質問者C） あ、それじゃあでも、運命論になっちゃわないですか。

（尊師） いや、運命論ではなくて、その運命をつくり上げているものは、わたしたちの日々の身の行ないであり、心の働きであり、言葉の働きなんです。だから、運命論じゃないんだよ。それを、運命をつくっているのは自分たちだから、そういう運命論、固定的な運命論としてとらえないわけだね、仏教は。

（質問者C） わかりました。どうもありがとうございました。

◉上座部と大衆部

（質問者D） ちょっとお見受けするところから考えまして、このオウム真理教っていうのは仏教の流れを継いでいるものと考えてよろしいですね。

（尊師） 仏教の流れ、うん、ま、はい、いいでしょう、それで。はい。

（質問者D）そうですか、すいません。そしたら、いろんな仏教の新興宗教がありますね。例えば、鎌倉時代にできた浄土宗とか、そういうものも含めていろいろな流派がありますけれども、それらとは具体的にどこが違っているのでしょうか。そのへんをちょっと詳しく聞きたいんですけれども。

（尊師）まず、お釈迦様の教えというのは原始仏教、しかも、それは、今スリランカに伝わっている経典を最も古いものとします。これはまずいいかな。

（質問者D）はあ、それでいいです。

（尊師）はい。で、その教えを――まあ、仏教には大きく分けて二つの弟子のタイプがいたわけだけど、一つは上座部といって一生懸命学び修行した人たちと、それから、まあ学ぶことよりも、どちらかというと実践によって法を広めた大衆部という二つの流れがあったわけだね。

で、その大衆部というのは、要するに、上座部というのはただ個人の解脱・悟りだけを求めてという批判を土台として大乗の教えというものを展開していった

わけだよ。

で、例えばその鎌倉仏教など、浄土宗、あるいは浄土真宗等の教えというのは、その大乗部の教えの阿弥陀信仰に属するわけだね。これはいいかな、まずそこまでは。

（質問者D） はい、だいたいいいです。

（尊師） で、ただ、例えば道元が持ち帰った宗教というのは、どちらかというとまあ上座部に属するわけだけど、しかしそれも北伝系の教えであって、上座部の教えの一部を持ち帰って日本に伝えたと。ところが、もともとお釈迦様は完璧な人だったわけだから、そのもともとの原始仏典にはそのすべてが説き明かされていると。つまり、大乗部といわれてる教えも、それからタントラ・ヴァジラヤーナといわれてる部分もすべて上座部の教えの中に含まれるんだというのが、今のわたしの見解なんだよ。

これは、おそらく世界でもわたしだけが採っている見解だと思います。それは

なぜかというと、一般的には南伝に伝わったものイコール小乗という教え、つまり小さな乗り物という教えで否定されてると。しかし、それは日本にその南伝のパーリ三蔵が正確に翻訳されていないがための悲哀であると。

（質問者D）あ、そういう見解で…。

（尊師）ということだね。現に、北伝の最高峰であるチベットにも、その南伝のパーリ三蔵に記されている大乗、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナの教えというのは伝わっていないということが判明してるわけだよね。

（質問者D）はい、わかりました。

（尊師）ということだ。

◉救いの十三段階

（質問者D）そしたら、もうちょっと具体的な話に落として、いろいろ昔につくられた宗教でしたら、お題目を唱えるだけだとか、それで救われるというものも

ありましたが、そこのことについて、例えば踊って悟りが得られるとか救いが得られる――題目を唱えて救いが得られるということに対して、尊師はどのように…。

（尊師） いや、それはそのとおりだと思うよ。つまり、救いにも段階があるんだよ。十三の段階があるわけ、救いには。

その一番低い段階は、信を持つ段階と。これは、例えば、要するにマントラを唱えるとか、あるいは題目を唱えるだけで救われるという人たちだね。

で、次の段階が何かというと、要するに裕福な家から家へと――あ、そうだね、その前に、この現象の世界、愛欲の世界に七回転生して救われる、救われるというか最終の段階に至る救われ方と。

それから、家から家へと三回、四回転生して、つまり、豊かな家から家へと、三回、四回転生して――これは人間界ということね――で、救われるタイプと。

それから、人間に一度だけ転生して最終的な段階に至る魂と。

それから、天界に一度だけ転生して最終的な段階に至る魂と。

それから、形状界の最上位である超越童子天へ転生して、そこから最終段階に至る魂と。
それから、形状界に転生して、そこでまあ修行しながら最終段階に至る魂と。
それから、形状界に転生し、何もしないで最終段階に至る魂と。
それから、形状界にいったん入り、そこから瞬間的にポワされて最終段階に至る魂と。
それから、修行して死に、それから中間状態に入り、で、最終段階に至る魂と。
それから、死後、即意識を移し変え、最終段階に至る魂と。
それから、死後、即最終段階に至る魂と。
で、生きながらにして最終段階に至る魂と。
この十三あるんだよ。だから、その十三のどのパートに属するのか、つまり、この信というのはすごく広い意味が含まれてるから、例えば南無阿弥陀仏とか南無妙法蓮華経——南無妙法蓮華経、これは例えば、妙法蓮華経に帰依しますよと

いう意味があるわけだけど、南無阿弥陀仏というのは、阿弥陀如来に帰依しますよという意味があるわけだけど――そういうマントラを一生懸命唱えることによって信を培い、いずれかの生でそういう真理の流れに入り済度されるとするならば、第一段階の済度の段階ということになるよね。いいかな。

（質問者D）はい。わかりました。

◉原因不明の病気に対して

（質問者E）個人的な話になってちょっと申し訳ないんですけども、今日はわたし、妻とですね、妻の母と来てまして、妻の母がですね、目の病気っていうか、病気と断定されるわけでもないんですけれども、目がちょっと悪くてですね、ふだん集中したりしてるときには非常によく見えるらしいんですが、集中してなかったりとか人と話をしたりとか、そういうときに目が開けられないというかパチパチしちゃうんですよね。

それで、いろんなお医者さんにかかってですね、診てもらったんですけれども、目も全部綺麗だし、病気もないと。要するに原因がわからないというようなことで、今までカイロプラクティックとかですね、いろんなところに行って病を治そうとしたんですけども、結局わからずじまいであると。

で、オウムでもですね、病院持ってますよね。そこで医学というものを検討されてると思うんですけれども、そういう原因不明の病気ですね、こういうものをどうしたらいいのかちょっと…。

（尊師） いや、それについては、意識の緊張が原因だと思いますから、生起のサマディと究竟のサマディ——つまり、精神集中と弛緩のプロセスを繰り返し繰り返し行なうことによって、大丈夫だと思いますよ、それは。

（質問者E） あ、治る…？

（尊師） ええ、治るというよりも病気でも何でもないと思いますから。

（質問者E） あ、そうですか。

（尊師）え、病気だったら大変ですけど、病気じゃないと思いますから、単なる心の緊張だと思いますから。

（質問者E）あ、じゃあ心の状態が正しい状態になれば消えていくということで…。

（尊師）なぜならば、精神集中によってそれが起きるとするならば、つまりふだんの中途半端な緊張状態が続いてる状態から解放されて、集中することによってそれが生じるとするならば、それは明らかにふだんの生活の状態が中途半端な緊張状態であると見るべきなんだよね、それは。だからそれについては、逆にリラックスを徹底的にさせる、つまり集中を強烈にさせて、その後リラックスさせることを繰り返すことによってそれは普通の状態になります、それは。

（質問者E）あ、そうですか。はい、わかりました。どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

◉キリスト教でいう最高の「愛」が仏教の「慈悲」

（質問者F） よろしくお願いします。キリスト教とか仏教でよく――キリスト教では「愛」とか呼ばれまして、仏教では「慈悲」ということをですね、よくいわれると思うんですけども、それは違いがあるのかどうかということについてお教え願いたいんですけど。

（尊師） キリスト教でいう最高の愛が慈悲だよ、結論からいうならば。つまり、ヨハネとか、あるいはマタイとかが実践した愛ではなくて、キリスト自身がすべての魂のカルマをしょって十字架にかかったと。あの状態が慈悲です、結論からいうならば。で、あれを目的として修行してると。

（質問者F） 仏教の方では、愛という言葉あまり聞いたことないんですけど…。

（尊師） あります。

（質問者F） あるんですか。

（尊師） つまり、四つの偉大なる心の訓練というのがありまして、その第一番目

にくるのが聖慈愛です。で、これはどういうことかというと、すべての魂に本当に真理の実践をしてほしいとか、すべての魂に本当に高い世界へ至ってほしいとか思う心、これが愛なんです。

で、二番目が哀れみです。聖哀れみっていわれてるもので、これは例えば真理と巡り合っているのに、それに気づかない魂に対する哀れみとか、あるいは真理を知っていて、それを否定する魂に対する哀れみとか、あるいは、真理の邪魔をする魂に対する哀れみとか、これが聖哀れみといわれるものです。

で、第三番目が、聖称賛です。これは、要するに、自分より徳の優れてる人、智慧の優れてる人に対して、心から称賛する心を培うと。

で、最終的には、第四番目が聖無頓着といわれてる心の働きがありまして、これはいっさいの現象に対して、例えば非難されようが、罵倒されようが、殴られようが、それに対して頓着しないと。そういう修行があるわけだね。

この四つをもって偉大なる心の実践、四無量心といってます。

（質問者F）で、慈悲というのは、キリスト教でいえば…。

（尊師）一番目と二番目なんだよ。聖慈愛と聖哀れみを合わせて慈悲というんです。慈というのが愛なんです。悲というのが哀れみなんです。

（質問者F）わかりました。

（尊師）はい。

◉死後の世界は心・口・行為の要素の蓄積によって決まる

（質問者F）あともう一つお願いしたいんですけども、あの世の、死んだ、死後の世界ですね、それに天国とか地獄とかよく聞くんですけども、そういうことについての、どういう状況なのかっていうことがわかりましたら、ぜひ教えていただきたいんですけども。

（尊師）わたしも、地獄・天国両方に何度も行ったことあるんだけども、説明をどうしたらいいのかな。こういう地獄がありますよとか、こういう天国がありま

すよというのか。それとも…。

（質問者F） 天国とか地獄に、死んだらみんな行かれると思うんですけども…。

（尊師） いや、行かないで人間に生まれ変わる魂もいますし、例えば動物へ生まれ変わる魂もいますし、例えば修行することによってそういうものから完全に超越した、高い神々に至ることもありますし。

（質問者F） あ、それはもう、自分が死んですぐにもう生まれ変わるということですか。

（尊師） そうです。だいたいまあ四十九日間と規定されてますけども。

で、これはね、こう考えたらわかるよ。ここに、例えば油の入ってるツボがあったとしましょう。これを水の上に置いといて叩き割ったと。そしたら、どうなるかというと、ツボは下に落ち、ところが油は上に上がるよね。これは、天界に行くパターンです。ところが、例えばツボの中に砂が入ってたと。それを叩き割ったら、そのツボも下に落ちるし、当然砂も下に落ちると。これは地獄へ至るパター

ンです。

何を言いたいのかというと、わたしたちが日々、身の行為について、言葉の働きについて、それから心の働きについて慎重に生きるならば、先程言った油の状態をつくりあげることができると。その場合は天界であると。逆に、怠惰というものを条件として、もしわたしたちが身の行為について悪業をなし、言葉の働きについて悪業をなし、心の働きについて悪業をなしたならば、先程の砂を蓄積することになるから地獄へ落ちるということだ。

（質問者F） やっぱり、自分の生きてる間のこの心の状況によって変わるということですね。

（尊師） 心と、言葉と、行為です。

（質問者F） で、天国とか地獄に行かれたって先程聞いたんですけども、そういう、どういう人々がっていうか、どういう感じでいるのか、ちょっとわかりましたらお聞きしたいんですけど（笑）。

（尊師）いやあ、それはもう長くなるから…、っていうのは、ものすごい天界も大きいし、いろんな世界があるし、地獄もいろんな地獄があるんです。

（質問者F）あ、例えば代表的なので結構ですので。

（尊師）じゃあ、それが載ってる本（『ターガタ・アビダンマ 第一誦品』『真実！ 六道輪廻』等）を差し上げるよ。わたしが書いたやつを。ね。

（質問者F）わかりました。どうもありがとうございました。

◉植物は第一天界の管轄下にある生命体

（質問者G）生き物の中で植物っていうのはどのように考えたらいいんですか、位置づけというか、そういう…。

（尊師）植物は、第一天界の管轄下にある生命体であると考えてください。それでいいかな。

（質問者G）あ、いいです。どうもありがとうございました。

◉だれにでも解脱はできる！

（質問者H）宇宙のサイクルと、カルパっていうこと言っておられたんですけれども、自分もどちらかっていうと、一応文学部にはいるんですけど、科学的なことで頭がちょっと埋まっていまして、目で見たとかそういう点でかなり縛られているっていう偏見を持っているような人間なんですけれども、十万カルパとか六万カルパとか言っておられましたけれども、それもさっき言われた経典に書かれてあられたんでしょうか。

（尊師）はい、それは経典に載ってるね、それは。

（質問者H）その教えを尊師は広められているということなんですか。

（尊師）わたしもだから、その経典の――まあ、こうしたら解脱するよという教えがあるわけだよね。で、こうしたら解脱するよという教えを実践して解脱をしましたと。わかるかな。

（質問者H）はい。

（尊師）だから、要するに、まあ君たちの側から見るならば同じ穴のむじななんだよ。

（質問者H）同じ穴の…ですか。

（尊師）つまり、ある教えがあって、その教えに傾倒し、実践し、解脱したと。ということは、その経典が正しいということになるよね、わたしにとっては。

（質問者H）ああ、そうですね。はい。

（尊師）絶対ということになるよね。だから、自分で経験したことを説いてるわけだよ。

（質問者H）僕たちのような、まあ凡人――といったらいいのかどうかわかりませんけれども――にも、尊師さまのようになる可能性というのは…。

（尊師）もちろんあります。

今日わたしがこの東大に来たことは、わたしにとっても大変有意義なことだと考えています。というのは、まあ現代の、そうですね、最高峰といわれている東大の方々がどの程度の智慧の持ち主であるか、それをよく理解させていただいたと。で、これは今後の救済計画にとって大きな利益となると思いますので、それは本当に皆さんに対して感謝したいと思います。

で、今日の話は、絵にかいた餅にせず、あなた方のとらえられる部分だけでも結構だから、それをね、実践の、つまり日々の生き方の中に取り入れ、そしてより素晴らしい人生を歩んでくれたら、わたしにとって本当に最高の喜びです。

はい、しっかり頑張ってください。

一九九一年十一月二十三日

◆第四話　一番活況を呈した大学祭（京都大学において）

「真理はすべてを明らかにする！」

◉オウム真理教は性善説か性悪説か

（質問者A）オウム真理教の教義は、いわゆる性善説、性悪説というと、性悪説的な立場を採っておられるんですか。

（尊師）いや、性善でも性悪でもない。つまり、その人が前生において善行をなすならば、それは当然性善になるだろうし、前世において悪業をなすならば、当然それは性悪になるだろうし、前世において善行も悪業もなさないならば、それは性善でも性悪でもないということだよね。つまり、固定的にものを見るのでは

なく、その人が前に何をなしたかで決まるということです。

◉尊師が説く神の定義

（質問者A） それで、いわゆる、尊師が説かれる神というのを定義していただきたいんです。神とは何でしょうか。

（尊師） 神というのはいろんな神が存在する。ただ、まず、そうだね、神についての説明をするとするならば、かなり時間がかかるんだよ。というのは、例えば十七形状界にそれぞれ神は存在しているし、この愛欲の世界にも七つの神が存在しているし。まあ要するに、神というのは人間より優れた生命体と。当然、その中には創造主も含まれると考えてください。

（質問者A） 創造主とは、別なわけですか。別な神も存在するわけですか。

（尊師） うん。つまり創造主というのはね、形状界の神聖世界の大神聖天を創造主といっているんです。これは、インド・ヨーロッパ語族に伝わる宗教の創造主

はすべてその神を指します。これは、キリスト教もまあ実際インド・ヨーロッパ語族的な影響があるわけだけど、例えばヒンドゥー教でいうところのブラフマン、ね、これは創造主っていう意味だけど、このブラフマンと、それから例えばキリスト教でいうヤハウェっていうのは全く同じ定義として経典には書かれています。ですから、それはわたしたちが到達できる範囲の一部であるということもまた間違いない、これは。

◉世界救済のヴィジョン

（質問者A） 世界救済のヴィジョンをぜひ語っていただきたいと思います。

（尊師） これだもんね。

（質問者A） つまり、万民救済なのか、一部の選ばれた者だけが救われるのか。

（尊師） いや、それはね、二つの考え方があって、一つは万民救済といえば万民救済であると。あるいは、一部を救済するといえば一部を救済するものであると。

どういうことかというと、多くの法をできるだけ振りまくと、一般に。これはまずOKだね。

で、その法を聴いて実践する人、それは当然救済されることになるわけだから、その聴く人が万民であれば万民救済であると。しかし、その法がそこに存在するのにそれを実践しないで、例えばここに薬と毒とあったとして、その毒を取って毒を飲む人は、それはしょうがないじゃないかということだよね。わたしたちは当然、薬を飲みなさいという宣伝はします。

だから、そのために、まあ例えば書籍の値段を、ね、破格の値段に引き下げたりとか、ビデオの値段を引き下げたりとかいう工夫をしながら、できるだけ多くの人に、入信する入信しないはともかくとして、まずオウム真理教の教えを広める必要があるということで実践しているわけです。答えになってるかな。

そしてその延長上に、まあ最終的な救済が存在するわけだけども、まあ開かれた法であることは間違いないと。で、開かれた法イコール万民救済だというなら

ば、それは万民救済であるということだよね。

◉いろんな解脱の段階

（質問者B） 尊師は、日本でただ一人の最終解脱者であるということらしいんですけれども、わたしには、解脱というのは輪廻の苦しみ、その輪廻の輪の鎖から解き離たれることであるというふうに、ま、解脱は一つであるというふうにこれまで思ってきたわけなんですけれども、最終解脱とおっしゃるからには、解脱といってもいろんな段階があって、その最終段階であるということだと思うんですけれども、ではそれはいったいどういう境地なんでしょうか。

（尊師） 境地ということを説く前に、まず解脱には、そうだね、全部で九段階の解脱があるとか、八段階の解脱があるとかいうふうに、一般的にいわれています。

で、この九段階の解脱、八段階の解脱とは、これはどういうことなのかというと、一つ一つの世界から離脱することイコール解脱なんだね。例えば、わたした

ちがこの粗雑な世界から離脱することイコール解脱であるし、あるいは先程述べたアストラル、つまり微細な世界から離脱することイコール解脱であり、あるいは空間から離脱することイコール解脱であり、あるいは識別から離脱することイコール解脱であり、あるいは無の境地から離脱することイコール解脱であり、あるいは認知から離脱することイコール解脱であると。

そして、最終の解脱というのは認知経験滅尽といわれてる状態であると。認知経験滅尽とは何かというと、過去における経験の因を受けないということなんだよ。つまり、例えばある行為をなしたと。例えば、飲み物があって、その飲み物が大変おいしかったと。おいしいから、次にまたその飲み物を飲みたいという心の働きが生じてこないと。一回一回新鮮な状態で動きが生じるということなんだよね。

（質問者B） あ、そうしますと、例えば、今の現代の日本の人々がまあオウム真理教に入って解脱を求めるとするならば、どの段階まで行けるんでしょう。

真理はすべてを明らかにする！

（尊師）いや、それはその人の機根によって、最終の段階まで行ける人もたくさんいると思いますよ。

◉仏陀とイエス・キリストの教えの違い

（質問者B）で、イエス・キリストであるとか、あとゴータマ・シッダールタであるとか、そういった方々も最終段階まで行かれたということですか。

（尊師）少なくとも、ゴータマ・シッダールタが最後まで行かれたことは間違いない。キリストというのはね、イエス・キリストというのは、そういう解脱を目的としたんではなく、微細な世界の神の息子になることを目的として法を説いてるんです。

つまり、それは『タターガタ・アビダンマ』（オウム出版）、多分、今日配られると思いますけども、その『タターガタ・アビダンマ』の中の、形状界の神になることを目的として説いたのがキリストの教えなんです。

特に、この宇宙が存在しているときには神聖世界へ生じ、宇宙が存在していないときは光音天の世界へ生まれ変わるということを目的として説いたのがキリストの教えなんです。

ところが、ゴータマ・シッダールタ、つまり仏陀の教えというのはそうではなくて、その形状界を超えて、空間、識別、それから無、そして認知ね、これを完全に超越し、最終的には経験まで超越したところに自分自身を置こうと。つまり、自分自身を構成しているものすべてをゼロにすることを目的として説いたのがゴータマ・シッダールタの教えなんです。

だから、そういう意味でいったら、ゴータマ・シッダールタの、仏陀の概念の中にキリスト教の概念は含まれるというふうにとらえていいと思います。

◉尊師の来世

（質問者B） 少し失礼な質問なんですけれども、尊師もこの世に肉体がある以上

は、いつかはその肉体も滅ぶときが来ると思うんですけれども、そうするとその後、その尊師の魂――といっていいのかわかりませんけれども――はどうなるんでしょうか。

（尊師）経典からいくならば、俗にいうところの創造主の世界へ行くことになっているけども、しかしわたしとしては、まあ人間の世界へ行くのか、あるいは第一天界へ行くのか――つまり、そうだね、龍とか、あるいはガンダッバとか、まあいろいろあるわけだけど――そういう世界に行くのか、まだ決めてないと。

（質問者B）あ、いや、尊師がもう決められるわけですか。

（尊師）もちろん、わたしが決めます。

（質問者B）は、はい。

（尊師）というか、最終の解脱というのは、あなたが決められる権利があるんです。というのはなぜかというと、つまり、例えばね、そうだね、ここに一から百までのカードを持ってる人と、一しか持ってない人との違いなんだよ。その一か

ら百までのどのカードを選ぶかというのは、持ってれば選ぶことができるよね。持ってなければ選ぶことはできないよね。ところが、一般の人はそのカードを一つしか持ってないんだ。つまり、今生で人間としての完全に業が切れた、その業の切れた段階で、それまで経験してきたものが次の生を形成するんです。

（質問者B） ありがとうございました。

◉分析し、合成するのはだれか

（質問者C） 真理というものは、シンセシスとかアナリシスを経て得られるものだということですが、分析、それから合成するというのは、だれがいったい分析し、だれがいったい合成いたすんでしょうか。

（尊師） あ、すごく難しい質問だね、それは。まあ結論からいうならば、そうだね、真我のオーダーということになるわけだけど、その真我というのは最終地点で純粋化されるわけだけども、ま、その真我のオーダーというふうに考えていい

んじゃないかと思うね。

（質問者C） その真我のオーダーっていうのは、人間だれしも普遍に持っているものなんですか。それとも…。

（尊師） いや、みんな持っているんです。

（質問者C） みんな持っている？

（尊師） はい。昔から、永遠の昔から持ってるものなんです。

（質問者C） 尊師の見解の、人間は人生、生きていると苦というものを味わわなければならないということは、それと同じく、主観的な考えにすぎないと思うんですけれどもどうでしょうか。

（尊師） うん？　主観的な考えにすぎないってどういうことかな。

（質問者C） つまり、いろいろな考え方がありますから、真理とおっしゃいましてもいろいろな到達点が考えられるんではないかと思うんですけれども。

（尊師） うん、だからそれを突き詰めていけば一つになっちゃうんだよ。例えば、

人間は死ぬものであると。これはどうかな。

（質問者C） はい、それは正しいです。

（尊師） 生まれて死ぬものである。これはどうだ。

（質問者C） はい、そのとおりです。

（尊師） 正しいよね。じゃ、生まれて死ぬ中間状態で老いるものである。これはどうかな。

（質問者C） あ、それも正しいです。

（尊師） つまり、そういうだれが見ても正しいことを突っ込んで考えて、それが果たして苦なのか楽なのか、つまり幸福に導くものなのか不幸に導くものなのかということを行なうこと、これが分析なんだよ。だから到達点は一緒なんです。

（質問者C） ああ、わかりました。

◉高い生命体が生きていると判断する論拠

（質問者C） それではもう一つ、質問させていただきます。高い生命体というのは、どういうことでそれが生命かと、つまり生きていると判断しているのか、その論拠を教えていただきたいんですけれども。

（尊師） これは難しいところで、経験だね、結論からいうならば。

（質問者C） あ、あなたの経験ですか。

（尊師） わたしの経験だけではなく、ま、それはキリストも経験していることだし、仏陀も経験していることだし、それは経験だよ。

（質問者C） 経験からそうお感じになる？

（尊師） 感じるのじゃなくて、そういう経典がたくさんあって、そして実際それを経験してると。それからもう一つ別の言い方をするならば、その生命体が生きてないとしようじゃないか。じゃ、わたしたちは生きてるんだろうかという、次に論議が出てくるわけだよ。

（質問者C）つまり、わたしはですね、科学っていうか、生物を勉強してますが、今のところ、それで考えますと、つまり生きてるという状態は、物質の秩序を保つ方向に動いているという状態を生きていると考えていますが、高い生命体っていうのが精神世界のものであり、そういう秩序に向かう方向の働きっていうものがどういうものなのか想像できないんですが、そこのところをおっしゃっていただきたいんです。

（尊師）例えばね、ある神がいたとしましょう。で、その神にわたしが会ったと。そのときに、わたしだけじゃなくて他の人もそこで会ってたとしましょう。で、その神との会話をわたしが記憶していて、その人も記憶してたとしましょう。ね。じゃ、この経験は正しいか正しくないかと。これはどうかな。

（質問者C）それを判断できるのは、その会った人っていうか、そうおっしゃられた会った人たちだけだと思うんですが、我々には判断不可能だと思うんですけれども。

（尊師）いや、だからそれが、そこでのまやかしがないとするならばの話をしてるんだ、わたしは。

これは何を言いたいかというと、例えばあなたがね、BさんとCさんと会ったとしましょう。で、ところがBさんとCさんが会ってないのに会ったと言って、あなたも会ったと言ったならば、これは正しくないけども会ったことになるよね。どうかな、それは。

（質問者C）それは、でも、真理とおっしゃられるに不十分…。

（尊師）いや、不十分じゃなくて会ってないことになるねと言ってるんだ、わたしは。それはどうですかと言ってるんだ。

（質問者C）あ、はい。

（尊師）だよね。で、それと同じ次元で、嘘をつくとするならば、それはそうかもしれないけど、この人間の世界ですら、そういう意味でいったらわたしたちはマーヤ、つまり幻影だと思ってるわけだよ。つまり、そういう世界と同じレベル

で見るならば、そこで生じる現象はすべて同じであると。

（質問者C）あ、わかりました。どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

◉形からものを見る見方を離れて

（質問者D）神ですけれども、神が最終的な何ものなわけですか。

（尊師）いや、だから神を超越して、神ですら永遠じゃないんだと。例えば、最も長い神といわれているものは、六万カルパ、つまりこの宇宙が六万回創造され破壊される間、生きることができるといわれてるわけだけど、それでも六万回後にはまた生まれ変わるわけであって…。

（質問者D）そういうふうにいわれている神は、生命体としてある意味で形を持つんですか。

（尊師）形を持つものと持たないものがある。つまり、形を持たないものを非形

状の神といい、形を持つものを形状の神といいます。

（質問者D）我々はもう形からものを見る見方にすごいひたりきってますから、そういう言い方をすると、何かすごい実体的な何かを想像してわからないだの何だのこう考えがちですよね、神といった場合。

（尊師）でもね、例えば、そうだね、光ファイバーの中を光が通って情報伝えてるね。この光を、例えば光として認識することはできるけども、形状として認識することはできないよね。どうかな、それは。

（質問者D）はあはあ。ええ。

（尊師）しかし、わたしたちは、それを通常の生活の中で使ってるわけでしょ。

（質問者D）あ、そうですね。どうもありがとうございました。

◉神様が試練を与えたのはなぜか

（質問者E）ちょっと一つ教えていただきたいんですけども、人間っていうのは

生まれてきて修行して、それが真理に近づくと、いいところというか、より優れた生命体になれて、で、もし真理から外れた生活とかをして死ぬと、まあ地獄っていうかそういうところに行ってしまうっていうことなんですが、まあやっぱり今の世の中っていうのは真理どおりに生きるのは非常に難しい世の中だと思うんですが、神様が僕たちにそういう試練を与えたのはなぜかっていうのをお伺いしたいんですけども。より高い生命体に上がるっていうのが、どういうふうな意義があるのかっていうことをお伺いしたいんですけども。

（尊師） それを話す場合、宇宙の創造から話さなければならないわけだけど、もともとわたしたちは純粋な真我と、そして三グナと呼ばれている、これは動性、善性、暗性という三つのエネルギーが存在していたと。そして、その動性、善性、暗性といわれる三つのエネルギーと真我が干渉し合うことによってこの宇宙が生じたという考え方があるわけだね。

で、この三つのエネルギーと、それから真我のぶつかり合い、これを生じない

真我も存在していると。で、そのエネルギーのぶつかり合いによっていろんな経験が始まるわけだけど、その経験こそが本来真我が持っている、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という三つの状態を破壊するものであると。で、だとするならば、そういう三つのエネルギーの干渉がどのような形で起きたにしろ、それに対して全く耐えることのできる真我の状態にしていくことこそが最高の状態であるということだよね。

そうすると、例えばわたしたちが、じゃなぜその干渉によって巻き込まれるのかと。例えばだよ、例を挙げよう。ここに性欲の大変強い男性がいたとして、その男性は性欲を満足させるためにどのような女性でもいいからつきあいたいと。で、まあどのような女性でもいいからまあ寄っていってつきあうことになったと。次に、あまり性欲は強くないけど性欲を持っている男性がいたとした場合、まあその人は好みの女性が近づいてきたら、当然つきあうだろうと。次に、全く性欲がない男性がいたとした場合、いかなる女性が寄ってきてもおつきあいしないだ

ろうと。

これと同じように、大いなる経験をさせることによって、そのいっさいのエネルギーの干渉を完全に遮断してしまうと。これがもともとの意味合いなんだよ。理解できるかな。

（質問者E） まあ、少し理解できました。

（尊師） 今の理解できないというのは、どこが理解できないかな。

（質問者E） いや、だからそのより高いところに上がれるというのはわかったんですけども…。

（尊師） より高いではなくて、その真我の独存位というのは普遍なんです。つまり、より高くもなければ、低くもなければ、要するにその中に絶対的な自由・幸福・歓喜が内在されていると。で、その状態は壊れないということなんだよ。

（質問者E） わかりました。で、もう一つお伺いしたいんですが、そしたらまあわたしらが呼んでるところの、その究極の神様というのも、昔は人間だったこと

とかはあるんでしょうか。

（尊師）はい、あります。

（質問者E）わかりました。どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

◉人間が行くことのできる世界

（質問者F）尊師はよく欲六界ということをおっしゃられますけども、現在我々が相互作用できるのは人間界と動物界だけということでよろしいですか。

（尊師）いや、餓鬼界にも行けます。

（質問者F）というか、我々は動物だったら、あ、犬がいるなって感じで認識できますけども…。

（尊師）餓鬼界というのはね、低位霊域というふうに正確にいうと訳することができてて、例えばあなたがめちゃめちゃに疲れたと。そのとき金縛りに遭って行

く世界、これが低位霊域です。ですから、わたしたちはこの人間界、それから低位霊域、動物の世界、三つに行くことはできます。

（質問者F）ということは、天界とかそれから地獄界とかっていうものは、現象することは絶対ないわけで、我々がいわゆる一般に認識と呼んでおるような状況で現象することは…。

（尊師）難しいね。それは難しいね、それはね。

（質問者F）難しいですか。はあ。下位ということであれば、真我の集合体ってこと考えてると認識してよろしいわけですか。動物界とか、それから天界とかっていうのは。

（尊師）どういう形で生じるか、まあ世界の様子というふうに考えてほしいんだけど、例えば地獄の場合は激苦地獄というふうに表現されてるし、動物の場合は動物の発生というふうに表現されてるし、餓鬼の場合は低級霊域というふうに表現されてるし、それから人間の場合は人間の世界というふうに表現されてるし、

それからまあ一つ上の世界は意識堕落天というふうに表現されてるし、それからもう一つの上は戯れ堕落天というふうに表現されていますと。これが愛欲の…。

（質問者F） ええ、それは知ってるつもりなんですけれども。

◉生命の寿命の長さは普遍

（質問者F） じゃあ、ちょっと変わった質問しますけれども、人間界の寿命というものは、麻原さんの本にも書かれてますけども、地獄界とかの場合も寿命とかいうのがあるわけですか。何年とかいうふうにいえるわけでしょうか。

（尊師） それは、その人の苦しみを生じさせるカルマが切れるまでですから、まあ一応表現としては何カルパとか何十カルパとかいう表現はあります。

（質問者F） それは寿命みたいな形でとらえていいんですか。一般的に、確かにカルマというものはあるんだと思いますけども、人間界だったらば、現在だったら例えば八十年とか、そういうふうにだいたい決まってると思うんですよ。カル

マの大小はあるのかもしれませんけども。

（質問者F）いや、それは違うよね。例えば、インドは平均寿命は五十歳以下だし…。

（尊師）ええ、それはそうですけど、例えば一億年生きる人間というのはきっといないと思うんですよ、現在の寿命で。例えば、まあだいたい何年というオーダーではかられるようなもので、あんまりこうかけ離れた数字って出てこないと思うんですよ。三千年生きるとか、ちょっとこれはオーダー違いますね。そういう形で出てくることはないと思うんですけれども。

（尊師）ただ、『聖書』とか仏典にはそれが載ってるし、そしてもう一つは、人間の寿命の最長は何歳まで生きられるんだという場合、例えば今でも百五十とか二百とか生きる人と、それから逆にまあ五歳十歳で死んでいく人と考えるならば、少なくとも二十倍、四十倍のカテゴリーで生きることはできると。そうすると、最長の二百から、それからまあ二十倍、あるいは四十倍とするならば、四千歳、八千歳という寿命があっても当然であると。そういう形の、どちらかというと、

そうだね、段階的発想でいくならば、生命の寿命の長さというのは普遍といっておかしくないと思うんだ。

例えば五歳しか生きられない人は、二百歳まで生きたいと考えるだろう、絶対。どうですか、それは。

（質問者F） え？

（尊師） 例えば五歳で死が決まってる人がいたとしてね、長生きしたいと——例えば、二百歳まで長生きする人がいたとして——その人はやはり、ものすごい長命、想像もつかないような長命に見えるよね、当然。

（質問者F） ああ、はい。

（尊師） 同じことが、例えばいえると思うんだよね。だから二百歳、それから、二百歳を起点とするならばまあ二十倍、四十倍のカテゴリーが成立していいとするならば、四千歳、八千歳というのは当然いけるわけでしょ。だから、そういう生命体が存在して当然であるとわたしは考えるけど。

（質問者F）ああ、その生命、存在するってことはまあ存在してもいいと思うんですけれども、知らないですから判断は保留ということで。

◉ニュートンの法則が成立しない世界がある？

（質問者F）それでは、例えば我々の現実世界において、例えばニュートンの法則とか、それからまあ何でもいいんですけれども、いわゆる自然法則というのが成り立ってますけれども、これはどうして成り立ってるわけですか。これは管理存在とかあるわけですか、やっぱり。

（尊師）いや、そうではなくて、エネルギーの流れによって成り立ってるんだよ。例えば、経験したらわかるわけだけど――まあ、ここらへんはほんと経験の世界になるけどね――例えば意識堕落天というのは、だいたい地上から、そうだね、五〇センチとか一メーターとか浮いた形で動いています。これは例えば、ギリシャ神話なんかの神も地に足が着かないという話があるわけだけど、それと同じです。

ということは、その世界においてはニュートンの法則は成立しないと。

ところが、この人間の世界は、多くの魂、ほとんどの魂が下へ落ちるわけであって、よってその落ちるという法則が中心に働いていると。これが仏教的な考え方です。だから、もし上流、つまり上に向かう魂が多くなれば、その分だけ、当然エネルギーの流れの変化は生じるはずです。

（質問者F） で法則は、例えば、百年前も成り立ち、今も成り立ってるっていう、そういうことがあると思うんですけども…。

（尊師） だから、それは短いよね。

（質問者F） ええ、それは短いですけれども。

（尊師） うん、短いよね、要するに。もっと長い…。

（質問者F） こういう法則自体を管理してるような存在というのはないんですか。

（尊師） 法則自体…、まあそれは夜摩天――支配流転双生児天という双子の神様、日本では閻魔大王といわれてるわけだけど――がいらっしゃるわけだけど、その

魂が管理してると一応いわれてるけども、わたしはそれより心の働きであると考えてます。

◉同じ行為でも基準によって

（質問者F） もう一つだけよろしいですか。例えば、盗みをしてはいけないとかいうことあると思うんですけども、これが、例えば同一の現象を行なったとしても、ある社会の基準というのがあって、おんなじ行為でも盗みと判定されるかされないかというのは変わってくると思うんです。

（尊師） それは素晴らしい質問だね。

（質問者F） これは変わってくると思うんです。

（尊師） なぜ素晴らしい質問といってるかというと、ここは一つのポイントになるわけだけど、意識が低位に至れば至るほど、その条件というものは甘くなります。しかし、その分、裁きも大きいと。例えば、例を挙げるならば、動物の世界

でお互いがかみ殺し合うと。この殺生は認められています。しかし、彼らはその分苦しみも大きいと。同じように、盗みもそうであると。

（質問者F）あ、どうもすいません。どうも長いことありがとうございました。

◉真理の奥の深さ

（質問者G）次の世代で上位になりたいとか、解脱をしたいとか、そういうようないろんな人間の欲、感情はどういうふうに構成されているのでしょうか。

（尊師）これは、仏教にも欲如意足というのがありまして、つまり欲の船に乗って欲を消滅するという教えがあります。これはどういうことかというと、例えばね、アメリカに行きたいと考えている人がいたとして、で、例えば飛行機を使ってアメリカまで飛んだと。そして、アメリカに着いてしまったら、アメリカに行きたいとは考えないだろうと。どうかな、これは。

つまり、解脱したいと考えてる人がいて解脱してしまったら、もう解脱したい

と考えないと。ところが、解脱に至るためにはその欲が必要なんだということだね。

（質問者G） いや、アメリカに関していうんだったなら、なぜアメリカに行きたいのかという疑問に対する分析があると思うんです。だから、人間が感じるときの、来世上位に行きたいとかっていうときに、あのう…。

（尊師） いや、来世はみんな持ってるんだよ。

（質問者G） いや、来世に行ったときに上位に行きたいと、そういう欲に対する空しさ、やましさを感じるんですけど、それに関しても分析を…。

（尊師） いや、だってだよ、その欲に対してやましさを感じようが感じまいが、例えばだよ、ここにフライパンがあって、そこにあなたが乗っけられてて火であぶられてるとしようじゃないか。で、いや、わたしは前生においてこういう世界に、ね、行っても構わないと。つまり、あのときわたしは上位の世界へ行くことはやましいと考えたからこういう世界へ行ったんだと言ったとして成り立つと思

うか、それが。

（質問者G） いや、僕はそんなのが、まだあるかないかわかんない感じで、僕は現実の世界に立脚をした生き方をしたいと…。

（尊師） うん。だから、現実の世界を分析することによってこの現実の世界の価値を正確にとらえる、そしてそれを超えるということがまず第一段階にあるわけです。わかるかな、言ってることは。例えばだよ、あなたの言うその現実を十分に満喫したいと、あるいは現実を充実した形で生きたいと考える。これそのものは悪いことではないよ。ただそこにおいて問題になってくるのは、その現実の意義、つまり来世の意義を考える前に現実の意義を考えていないではないかと、分析していないではないかと。これはどうかな。

（質問者G） だから、もっと現実に対する分析は、日本の社会に対してどう働いてどういうふうにしていくかという方をもっと完全に変えていった方が、まあ僕は人間に立脚する考え方より重要なのではないかと思うんですが。

（尊師） いや、それは先程も言ったとおり、まず個人から発生して、個人の生とか老いとか、病とか死とかいうものについて考えること、ね、それと同等で、例えば、ま、君の今のその命題というのは、同等であるか、あるいはそれ以下だと思うんだよ。で、なぜ同等であるかそれ以下だといえるかというと、この第一の命題の生・老・病・死というのは、だれもが通過する問題であると。これはどうかな。

（質問者G） それはそうです。

（尊師） しかし、社会の諸現象というのは、ある人は関係があるし、ある人は関係がないよね。例えば、例を挙げるならば、消費税の問題があったとして、消費税は、例えば大金持ちにとっては大した影響がないと。逆に大金持ちにとって、まあ優位に展開したわけだけども、大した影響はないと。しかし貧しい人にとっては影響があると。しかし、これらの貧しい人も大金持ちも最終的には死ぬわけであって、その死について考えた方がより有意義じゃないかと思うわけだけど、

どうだそれは。

（質問者G）いや、まあそこはあの、僕はその死以降についてはあえて考えないというか、あるかないかわかんないような世界に行ったとして、そのための生き方をするよりもという、今のある世界に立脚して生きていった方がと思ってるんで、ちょっとそこは相容れないかなあとか思うんですけど。

（尊師）いや、だからね、例えば、そうだな、ということは、君は死後の世界はあるかないかというのは、もう今生では考えないということだね。

（質問者G）いや、考えてもわからないから、それを考えてもわからない…。

（尊師）いや、だから考えてもわからないじゃなくて、その教えを聞いて実践することによって、経験ができると言ってるんだ。

（質問者G）まあ、それはそれで一回人生使ってしまうことになりますんで（笑）、それをあえてしない…。

（尊師）それは勘違いだよ。なぜ勘違いといえるかというと、例えば、サーリプッ

タは二週間で悟ったし、マハーモッガラーナは一週間で悟ってます。あるいは、ケーマー比丘尼は九カ月で悟ってます。だから一生は使ってません。

それをだよ、君の、この世の中を変えることは、今まで多くの人が――例えば、まあ例を挙げるならば、そうだね、マルクスが社会主義あるいは共産主義というのをぶち上げて、で、試みたわけだけど、失敗したわけでしょ。

（質問者G） まあそうです。

（尊師） 何百年かかっても、結局は、みんながそういう意味で平等というか、本当の意味に幸福になるような社会というのは不可能なんだよね、この人間の世界では。

（質問者G） 全員がオウム真理教の信徒になってもですか。

（尊師） いやあ、それは可能性があるかもしれないけど（笑）。いや、それは可能性があるかもしれない。でもまあ、一般的には不可能なわけでしょ。

（質問者G） いやだから、何らかの形で可能性があるというふうに今お見えになっ

たのに、あるかもしれないですし、まあわからないというかね…。

（尊師） ただその場合、この現実の価値観よりより高い価値観を提起しない限り、それぞれが持っている利権とかそういうものは手放さないよね。これはどうかな。

（質問者G） うん、だからまあ、人間はどうしても、こう、ごたごたした存在だとは思いますけど。

（尊師） そうだよね。で、当然、この現実の生活を分析する瞑想というのも存在してるわけです。だから、先程の比喩においては、現実の生活のまあ例というのを挙げてるわけだね。当然、それは瞑想において、しょっちゅうそういう瞑想はします。そして実践します。

例えば、まあ例を挙げるならばだよ、今オウムが実践している、一冊五百五十円で本を出すためにはどうしたらいいかという検討までわたしはやってるわけだ。でしょ。というのは、一般的に出すならば、やっぱり今一冊千円ぐらい出さないと、ねえ、原価割れしちゃうわけだけど、それはどうやって出したらいいんだと。

そのためには、例えばこういう機械を導入して、このような形でもっていけば五百五十円で出せるなと。で、それができるというのは、より高度な分析ができるからなんだよね。

だから例えば、例を挙げるならば、今二年間あまり、まあ社会的にオウム真理教というのはかなり強く叩かれたわけだけど、平然として組織は維持できたというのは、まあもともとそれだけのものが生じる、つまりオウムはバッシングされるんだということを予言して、その準備をしてたからなんだね。経済的にも、いっさいどこからも借り入れをしないで自力でやっていくということを、もうその叩かれる三年も前から準備をしていたから、平然と生きてこれたわけです。

そういう智慧というのはあるわけだけども、それはあくまでもわたしたちにいわせると低次元の智慧なんだね。ということです。

（質問者G）だいたいわかりました。ありがとうございました。

（尊師）はい。

◉犬のウンチも神から見れば……

（質問者H）教えの方でちょっとお聞きしたいんですけども、そもそも人間と神とはどのように位置づけられるものだとお考えになりますか。

（尊師）いや、それは、要するになしてきた部分の違いであると、過去において。

（質問者H）確か、幸福の科学の教えでは、ま、それを信じている信じてないは別としまして、確か人間といいますのは、神の創造物というよりはむしろ表現物であると。だから、神のある一面の現われが人間であると。確か、そのような教えをのたまわったと思うんですけれども、尊師としてはどのようにお考えになりますか。

（尊師）質問していいかな。

（質問者H）はい。

（尊師）人間のどの要素に、神の具現化された形があると思うか。例えば、犬のウンチを拾うことが、神の具現化した形だと思うか、君は。例えばね、例を挙げ

るならば、まああのときわたしは発言させてもらえなかったから発言しなかったんだけど。いや、明らかに、ね、これは――ま、こういう話、君たち好きだから、あんまり話したくないんですよ（笑）。いや、事実、例えばインドに行くよね。インドに行って、例えば果物の皮とかを投げた方がいいんだよ。なぜかというと、牛とか、実際に自由に生きてて、そういうものを食として生きてるわけだよね。わかるよね、言ってることは。

つまり、日本のある意味での、人間の感覚から見たカルチャー感覚からいくと、犬のウンチを拾うことは大変素晴らしいことかもしれない。しかし、そうではなくて、例えばもっと大きな視野で見るならばそれは大したことじゃないわけだよ。だから、条件によって違うことを、ま、その教義の中枢として、例えば、ね、マスメディアを使って報道する、あの報道のあり方にわたしは大変な疑問を持ってるわけだね。

で、犬のウンチを拾うことが神の意思なのかどうかというと、神の意思として

は、要するに、犬のウンコであろうと人間のウンコであろうと、本当は自然に返って、それが肥料となって、例えば糞そのものも微生物の栄養分になるわけだから還元してあげてもいいわけだよね。

（質問者H）ありがとうございました。

（尊師）そういう考え方もあるわけですよ。

一九九一年十一月二十四日

◉どんな質問にも丁寧に答えられる尊師

京都大学文学部　福井利器

会場に入ってまず驚いたのが、聴きに来た人の多さ。三十分前に行っておけば席を取れるだろう、という甘い考えはあっさり裏切られ、超満員の人混みの中で立ち見の席を確保するのが精一杯でした。一新興宗教の教祖の話を聴くために、信者でもない一般学生がこんなに集まるとは考えてもみませんでした。

前半は教義の説法で、概略的だったこともあってそれほどの感銘はありませんでしたが、オウム真理教の教義が原始仏教にのっとっていることははっきりと確認できました。

後半の大質問会は、強く印象に残っています。尊師のお答えの内容もさることながら、つまらない質問、訳のわからない質問、さらには挑戦的な質問に対しても、一つ一つ丁寧に明確にお答えになるのは、大したものだと思いました。

この講演会をきっかけとして、わたしは上っ面の「知識」と、実感の伴う「智慧」についていろいろと考えることになりました。そして、もっといろいろなことを聴いてみたかった、とつくづく思いました。時間が短かったのが残念です。

◆第五話　島田裕巳氏（日本女子大助教授）と共に語る（気象大学において）

「現代における宗教の存在意義」

◉宗教学者対宗教者の対談

（司会）現代における宗教の存在意義というものでございますが、まず最初に、現在の日本の若者が宗教に走っているというか、宗教に非常に関心が深いと。その状況について、お二人に話をしていただきたいと思います。

（島田助教授：以下島田）はい。今日はこういう形でお話をするわけですけども、司会のMさんの方から最初にお話をいただいたのが七月の末ぐらいだったと思うんです。そのときは、僕の方に講演をしてくれということで連絡が来ました。と

ころが、何かの折にオウム真理教の方がわたしのほうにお見えになって、日本女子大の学園祭ででも講演ができたらというようなお話があったんですね。

それだったら、気象大学校からお話があったんで、どうせならというのは変ですけども、現物というか、実物なんて言ってはいけませんけれども、実際に宗教学者と宗教者でやってみたら面白いんではないかということでこういう企画を考えたわけですね。

◉島田助教授の目から見た幸福の科学とオウム真理教

その後、九月になりましてから、例の幸福の科学という宗教団体の問題が起こりました。たまたまわたくしが、九月の五日発行の講談社の月刊誌『月刊現代』に幸福の科学を批判する文章を書いたために、わたくし自身が幸福の科学と講談社の問題に引き込まれることになってしまいました。そして、テレビで幸福の科学の幹部の方とか、あるいは景山民夫さんとお話しする機会がありまして、先々

月の月末には「朝まで生テレビ」という――皆さんの中にもご覧になった方がいらっしゃるかと思いますが――生番組に、幸福の科学の方も出られたし、麻原さんも出られましたし、わたくしも出ました。

そのときには、深夜にもかかわらず五・一パーセントという高い視聴率で、ふだんの倍ぐらい、かなりの方が見ていらっしゃったということです。わたくしが会った人も、必ずといっていいくらいに見ていたというようなことで、現在では宗教というものがホットな話題になってるんじゃないかなと。

そういうようなことで、最初にお話をいただいたころと今回との間では、かなり宗教に対する関心が社会の中で変わってきたのかなと。その中で、幸福の科学が大きな問題になりましたが、一方、オウム真理教の方もいろいろ話題にもなってきているような気がするんです。

わたくしとオウム真理教との関係といいますか、今回こういうふうな形で講演会をするようになった若干の経緯を述べさせていただきますと、最初は去年の七

月に出ました別冊宝島の『いまどきの神サマ』という本に、オウム真理教がディズニーランドであるという文章を書いたんですね。

それは、その前の年に、いわゆる〝オウム叩き〟ということが行なわれるようになったり、『サンデー毎日』という週刊誌が十月ぐらいからキャンペーンを張りまして、オウム真理教は非常に危険な宗教であるということを強調したわけです。そこにまた坂本弁護士事件が起こって、オウム真理教との関係がいろいろ取り沙汰されたりもしてかなり話題になった。

なおかつ、次の年の衆議院選挙には、オウム真理教が真理党という政党を作って立候補したというような経緯がありまして、オウム真理教というのはどういう宗教であるのか、宗教学者から見たらどうなのかと、わたくしのところに別冊宝島の編集部の方から依頼がありまして、それで書いたというわけです。

あるいはオウム真理教の方からすれば、宗教学者の見方として非常に浅薄であるとか、批判的であるとか、誤解してるとか、そういう部分があったかとも思う

んですけれども、まあそういうのを書きました。

◉オウム真理教への納得

そのときは別にオウム真理教の方とはあまり接触はなかったんです。その後に、オウム真理教が熊本に道場をつくりまして、波野村と対立が起こった。それに関しまして、地元の熊本日日新聞が、「揺れる山里」という連載記事を始めまして、これがかなり長く続いたんですね。

で、その一環として、熊本日日新聞の記者の方がわたしのところに、こういう問題についてどう思うかということで取材に見えたんです。そのときに、「実際に行ってみないとわかりませんよ」という話をわたくしがしまして、それで、記者の方が、「じゃあ、それだったら先生、一度熊本の方に来たらどうか」というようなことになりました。そこで、昨年の暮れの十二月二十五日から二十七日の間に、僕は熊本に行ったわけです。

二十五日の日には、道場の方に寄せていただきまして、オウム真理教の方からいろいろお話を伺って、道場も見学させていただいたんですね。

翌日の二十六日に、オウム真理教とそのころ——まあ今でもそうだと思いますが——敵対関係といいますか対立関係にあった村の方ともお会いしてお話を聞いたり、あるいはオウム真理教に対して批判的な記事を書いている江川紹子さんというジャーナリストの方と会って話をしたりということがありました。

それから、二十七日の日に、わたくしはそのときそれを知って行ったわけではないんですが、オウム真理教の信者であって、また弁護士でもある青山吉伸さんの熊本地裁での第一回公判が開かれるということで、麻原さんもお見えになっていた。わたくしも裁判を傍聴に行ったんですが、その前の時間に、熊本市内のホテルで麻原さんと初めてお会いして、一時間ぐらいだったと思いますが、お話をすることができました。

そのときに、オウム真理教が、世の中から叩かれる原因はいったいどういうと

ころにあるのかというようなことをお話ししまして、わたくしなりに納得できるところがあったんですね。

道場での印象を簡単に申しますと、一つは意外なほどしっかりした施設であるという気がしました。生活に関しても、修行が中心であって、かなり皆さん真面目にやってらっしゃるなと。それから、麻原さんとお話ししても、言ってらっしゃることはよくわかる。それなりに共感を覚えたような記憶があります。

それからは、「朝まで生テレビ」と今回で、都合三回、麻原さんとお会いしたことになります。

◉島田助教授の大学時代

わたくし自身のことも言っておかないといけないだろうと思うんです。実は、大学の四年生のときに、宗教学科というところにいたんですが、新宗教運動の調査・研究というゼミに参加したんですね。

それは一九七五年のことで、今からもう十五年ぐらい前になります。今は、〝新新宗教〟というような言葉があって、オウム真理教のような新しい宗教団体のことを新新宗教といってますが、その新新宗教のはしりになるような団体を、大学の三年生と四年生が中心になって調査するというゼミがあったんですね。

そのとき、どういうところを取り上げたかというと、今幸福の科学の関連で話題になっているGLAとか、手かざしをやります真光とか、それからガンも切らずに治るという神霊教とかの教団ですね。それに、キリスト教のカトリックの中でカリスマ運動というのがあるんです。これは、聖霊が降りてきて、集まった人たちが異言を語るというか、要するに古代何とか語とかを語り出すような、そういうような運動がありました。

◉ヤマギシ会を担当して……

その中でわたくしが担当したのが、今ヤマギシ会とかヤマギシズムという名前

で世の中では知られていると思いますが、山岸会という共同体があったんですね。そこを調査することになって、わたくし以外にも学生が全部で四人、その山岸会を、一緒にではないですが、各自バラバラに調査することになったわけです。

山岸会では、一週間にわたるヤマギシズム特別講習研鑽会という、外から見れば洗脳のための機会ではないかと思われているものがあります。一週間にわたって、参加者が隔離されたような場所で研修を受けるというようなことがあります。

このサークルのMさんたちがお作りになったパンフレットの後ろの方に、統一教会、原理運動の研修会のことが出てますが、内容に関してはかなり違うと思いますけども、形式は同じようなものです。

わたくしは当時二十一歳でしたが、その講習会に行きまして、回心したというのか、山岸会の考え方が非常に面白いなと思うようになりました。わりと素朴というか、純粋に感動して、山岸会の運動に共感を持って、参加してみたいなと思うようになったんですね。

ミイラ取りがミイラになったという言葉がありますが、調査する人間が、調査という目的を捨てて、運動の方が面白いなということで山岸会の運動に飛び込んでしまったというようなことがありました。

山岸会は、これはオウム真理教と似てるかとも思いますが、出家とはいいませんが、自分を財産もろともすべて組織の中に投げ込んでしまう参画という制度をとっています。参画して共同生活を送るという、そういうところなんですね。最近ですと、卵だとか鶏肉だとかを一般の人たちに売っています。養鶏を中心とした農業によって生活を立てている共同体なんですね。

◉宗教学者の意外な経歴

その共同体の中にわたくしは七カ月ほどおりました。埼玉県の大宮の近く、川越線の指扇という駅がありますが、その近くに共同体があったんです。そのころの山岸会はかなり貧しい集団でありまして、今とは違って肉とか卵の販売も順調

にはいっていませんでした。

したがって、住居はプレハブの二階建てで、そこに若い人間が五、六十人生活していました。しかもそのプレハブというのが、お金がなかったもんで、人が住むようなプレハブではなくて資材置き場に使うようなプレハブだったんです。埼玉というのはものすごく寒いところで、冬なんかはほんとに寒い。それをプレハブの薄い壁一枚で過ごしたわけです。

その後に、一カ月ぐらい、南那須というところで鶏を飼ったりとかもしたんですけども、途中でいやになったという感じでまた婆婆の方に戻ってきたという…。

山岸会を出てから大学院に次の年に入って、それと並行しながら、山岸会からの落ちこぼれが中心になったコミューン運動、共同体運動を二、三年やっていたと思います。

山岸会は宗教団体とはいえないんですけれども、やはり〝ヤマギシズム〟という思想といいますか、イデオロギーがありまして、考えようによってはかなり宗

教に近い。そこに一回はまってもう一回戻ってきたという、宗教学者でそういう経歴を持っている人はあまりいないと思うんですけれども、そういう体験をしてきました。

◉オウムのやってることの意義がわかってきた！

実は熊本に行ったときに、オウム真理教のプレハブを見てなんか懐かしいなと思ったのは、やはり自分の体験がかかわっていたからだと思います。当時の山岸会と現在のオウムとを比べた場合に、技術力は圧倒的にオウムの方が上だと思いました。プレハブの建物にしても、真ん中に断熱材がちゃんと入っているんですから。

わたくし自身の若気の至りだったと思うんですが、そういう体験が今日のオウムでの出家という形態と共通する部分がかなりあるんじゃないかなと。自分が過去にやったことについては、今思い返せば反省すべき点とか批判すべき点はある

かと思うんですが、オウムがやっていることの意義がわたくしなりにわかるような気がして、特に道場に行ってからそういう見方をするようになったということがあります。

◉物質的豊かさの中での精神性

これは麻原さんからお話しいただいた方がいいのかもしれませんが、今の日本の社会は現実主義であるというか、日本人の価値観では現世が中心にあると思うんです。現世を中心において、今我々が生きている社会の中でいかに物質的に豊かな生活を実現してそこで幸福を勝ち得ていくか、そういう傾向が日本人には強いのではないかと思うんです。

特にそういう傾向が強くなってきたのは戦後だと思うんですが、戦後の高度経済成長はその典型です。一回はオイルショックでそれが崩れたように見えたんですが、また日本の経済力は伸びていってバブル経済を生んできた。現世中心主義

を原動力としながら経済を発展させてきたのが日本の社会だと思うんですね。

そういう中で、いい大学へ入っていい会社に入るっていうライフスタイルが理想とされている。しかし、果たしてそういうことが本当に価値のあるものかどうかということが、今問われているのではないかと思うんですね。

そこで、今のその社会を捨てて、自分たちの精神性を開拓し、深く極めていこうとするような出家という形態をオウム真理教の人が選ぶということは、そういう意味でも理解できるんではないかなと。

日本の宗教は、常に現世中心主義に価値をおいてきました。一般のお坊さんの生活を見てもわかると思いますが、出家とはいうものの、家族をつくって、例えば仏教の戒律の中にお酒を飲んではいけないという戒律がありますが、そういう戒律は守らない。だから、本当の出家にはなっていないわけですね。だから、いつも現世中心主義に宗教が取り込まれてくるような傾向があると思うんです。

それに対して、オウム真理教の今の社会における存在意義は、そういった傾向

に対する一つの批判、あるいは一つの抵抗みたいなものとしてあるのではないかなと、わたくしは今のところとらえているんです。それは、麻原さんの方から見たら、あるいは違うのかもしれませんが。今の社会におけるオウム真理教の目指すところについてお話ししていただきたいと思います。

◉あらゆる状況に対応できる乗り物を

（尊師）まず皆さんにお話ししたいことは、例えば最高の高級車であるベンツがあると。で、このベンツというものは、例えば高速道路や、あるいは一般道路の中でも、道が整備されているところを走る場合、それは最高の快適な乗り物であるし、またスピードも出ると。まあ、出るときには二三〇キロくらい出ますから。で、しかし、これがひとたび、例えば、先程島田先生がおっしゃった波野村に例えば入るならば、即車の底にあるオイルパンが割れて使いものにならないと。ところが、日本人のライフスタイルというものは、まさにこのベンツ志向だと

思うわけですね、わたしは。それはどういうことかというと、例えば、現実生活として生まれ、そして死にゆく間は最高の乗り物であるけども、それに対して、その死後に対しては全く車としての機能を果たさない、人生観――つまり車を与えられると。

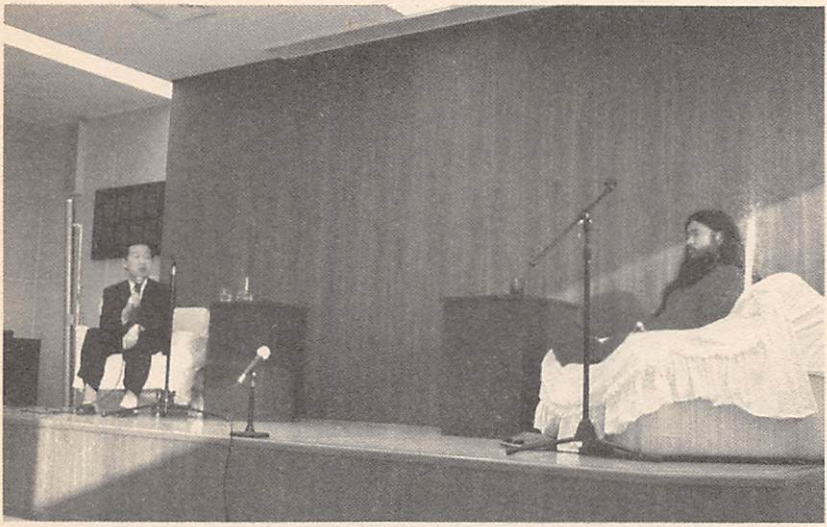
で、ここで問題になってくるのは何かというと、じゃあ、例えばそういうものに、つまりこの生という問題、そして死という問題、この生という問題と死という問題の両方に対して、しっかりと使いものになるような車、こういうものを用意したらどうだろうかと。例えばそれは、まあ4WDの少し車体の高いような、例えばまあハイラックス系統のようなね、車、これを用意したらどうだろうかと。そうすると、この車は、例えば高速ではあまりスピードが出ないし、しかも揺れが激しいと。しかし、それは結果的にはいかなる所へでも、例えば荒れ地でもどこでも平気で走ることができると。

そうすると、例えば高速において、ベンツと、それからハイラックスを比べた

場合、当然その4WDのハイラックスの方が走りが悪いと。乗り心地も悪いと。つまり、これは、例えばある人が宗教を実践し、その実践のためにある程度の時間を人生に費やしてる状態と大変似ている。もしその人が、生、つまり生きていることに集中するならば、おそらくベンツのような快適な乗り物として一生を終わることができるはずであると。

しかしそうではなくて、あらゆる状況に対して対応できるような乗り物に自分の人生というものをつくり替えるとするならば、それは、ある部分では、一見乗り心地が悪いと。しかし、用は十分に足せると。特にこの日本というのは、まあわたしは、インド、あるいはチベット、中国、そうですね、あるいはラオスとかスリランカとか、タイだとか、まあいろんなところへ行ったわけですが、そういう国に比べると、ずっと豊かであると。

しかし、例えば、その国の人たちと日本人とを比較するならば、どちらが本当に幸福なんだろうかと。彼らは、彼らなりに来世というものを考え、あるいは死



後というものを考え、そして、それに対して時間をある程度使っていると。というのは、例えば「わたしは無神論者である」という言葉を吐いて称賛されるのは日本ぐらいであると。ここから考えても、そのタイムスパンの長さの違いによって、ライフスタイルが変わってくると。つまり、車の選定が変わってくるということになると思うわけです。

オウム真理教の教えそのものは、もちろん最高点には在家の修行を達成した者が出家し、そして解脱を得る、あるいは悟りを得るというシステムがあります。これは、もともと仏教の開祖であられる釈迦牟尼――まあオウム真理教ではサキャ神賢、つまり最も賢い神、サキャ族の最も賢い神としてサキャ神賢という言葉を訳語として当ててるわけですが――聖者サキャ神賢の、偉大なる救済者サキャ神賢の教えの中にも、同じように在家の段階があり、そして出家の段階があり、そして出家の段階において解脱・悟りがあり、そしてその解脱・悟りを達成した者が、それからまた現世へ降りて、そしてその法を説き明かし、苦しめる衆

生に、より長い視野に立って現象を見つめさせる教えを説くと。

◉物質文明に飽き出した日本人が次に求めるもの

ところが、文明の発達とともに、人間は、目先の生活を豊かにしたいがために生まれた家がそうであったように、神棚に参拝し、あるいは仏壇に食事をあげるといったような風習が、どこの家でもある程度あったはず。そして、そういう基本的なライフスタイルの中に、例えば来世を考え、あるいは人生の本質的な苦しみというものを見つめるという人生の流れがあったはずなのに、例えばテレビの発達や、ラジオの発達や、あるいは雑誌等の多くの情報網の発達によって、そういう自分の内側を見つめるよりも、そういう情報に乗っかり、そして、その情報の中で遊ぶ方を楽しいと考えるようになった、この日本人の行く末というものは、決して楽観視できるものじゃないと思うわけです。

で、オウム真理教がこの日本に存在した一つの理由というのは、この日本は、わたしはアメリカ以上に、文明、というよりも、物質文明の発達した国だと思います。そして、この物質文明を既に小さいころから経験している若者たちは、その物質文明では、自分たちの心の安定だとか、心の豊かさだとか、本当の意味での幸福というものは、得られないんだということを何となく感じ取っているのではないかと。

それは先程、島田先生が、二十一歳のときのいろいろな体験の話をなさいましたが、まさにそれは島田先生の一つの心の深い部分にある本質ではなかったのかと思います。

そして、まあおそらくそういう点から考えると、この物質的に豊かな日本人、物質世界に飽き出している日本人が次に求めるものは何かというと、本当の幸福、本当の幸せ、そして、自分とはいったい何なんだろうかという命題に取り組むことになるのではないかと。自分という命題に、当然トライするならば、そこに思

想か宗教という二つのカテゴリーが存在すると。

わたしは、この思想にしろ宗教にしろ、全く同じものであると考えています。例えば、近世における最高の宗教は何かといったら、わたしは即座にマルキシズム、つまりマルクス主義であると答えます。それは、その教えに多くの人が傾倒し、そして自分の生き方を変え、そのすべての人生をその教えの中に没入させたわけですから、これ以上の宗教は存在しないと。ただそれを、宗教的なスタイルで説いたのか、あるいは思想的なスタイルで説いたのかによって違うだけである。

では第二番目の、この近世における最も影響を与えた宗教は何かといったら、わたしは、当然それは毛沢東思想であると答えます。これは、マルキシズムを一歩発展させた形で、中国人の、まあその当時六億とも七億ともいわれた多くの民に対して影響を与えた思想であると。

ではなぜ、この、思想と宗教とが同じだと麻原は断定するのかというと、例えば毛沢東思想を例に採って挙げるならば、彼の教えの中には戒律というものが存

在していると。例えば、人のものを盗んではいけないだとか、あるいは優しくしなさいよとか——これは、日本にも毛沢東語録として伝わってきたわけですが——その内容を見て、わたしはまさにこの教えは宗教だなと考えました。つまり、思想と宗教の間に一線はないんだと。

◉最終的な魂の二分化

では、オウム真理教の存在した理由とは何かというと、まあ今は、確かに社会の反対側に位置しているように見えるかもしれませんが、わたしはこれからの世の中は、この物質文明に対して、精神文明の勃興というか、物質文明対精神文明の対立が生じるのではないかと考えています。

それは、その前段階において、自由経済対統制経済の対立があり、そして統制経済が負けたと。これは、つまりソビエト連邦の崩壊等があるわけですが、まあ間もなくおそらく中国も、共産主義体制を崩すことになるでしょう。この次に来

るものは何かというと、物質文明対、そして精神文明の、対決であると。

そして、その精神文明と簡単にいわれているものは何かというと、先程述べた、思想、宗教、これらすべてを通しての、一本の正しい生き方――これは、オウム真理教では真理とかトゥルースといってるわけですが――このトゥルースを、だれが、より正確に、早く現わすかと。そして、その現われた時期こそ、物質文明と精神文明の対決の始まる時期ではないかと考えているわけです。

それはなぜかというと、これは宇宙の構造の話をしなければなりませんが、仏教的宇宙観というものは、もともと真我という非物質、それに対して三つの要素――これは、まあ仏教では貪・瞋・癡といってます。そして、ヨーガではラジャス、タマス、サットヴァといってるわけですが――この三つのミックスによってこの粗雑な世界は形成されているといわれてるわけです。

まあ、実際問題として、素粒子に三タイプがある等々で、まあこの三グナと三タイプの素粒子は同じでないかとかまあいろいろ出ていますが、そこに論及する

ことは、わたし自体まだそれについてあまり研究してませんので、ここでは避けるとして、要するに、非物質である真我と――真我っていうのは真実の自分自身と――それと物質を構成している三つの要素とのミックスが、このわたしたちの生活している世界を形成していると。

で、この二つの要素というものは、最終的には完全に分離されます。これは、宇宙の破壊期において完全に分離されるわけですが、ということは、この物質世界に対して、この物質こそわたしたちの本質であると考える魂と、そうではなくて、この物質を超越したところに自己の存在があるんだと考える魂の二分化が起きなければならないと。

◉物質文明に飽きて、修行へ

つまり、人類というものは順番にその進化を続けているというのが、わたしの考えなんですね。順番に進化を続けているとはどういうことかというと、魂の質

がそれによって向上するという意味ではなく、一つ一つテストされ、そして落とされていってると。それが、まず、先程述べた、マルクス主義と、例えばルソーから始まる、まあケインズに終わると——まあケインズ以降偉大な経済学者がいるのかもしれませんが、まあわたしはケインズしか知りませんけども——その自由主義との対立であったと。

そして、まず共産主義が落とされたと。で、次は、先程述べた物質主義——これは、解放経済、物によって幸福感を得る生き方と——そして精神的な豊かさを求める生き方の対決が始まっているのではないかと。

例えばルソーがそうであったように——まあ今、すべての自由主義の基本的な概念というのは、ルソーにも、思想によって表わすことができるといわれていますが——ルソーがそうであったように、例えばオウム真理教の教えが、将来においては、わたしはおそらく、思想の根本となる——というよりも、今オウム真理教の教えそのものは、仏教、キリスト教等を含めた、多くの宗教の、その根っこ、

根本的な生き方、あるいは根本的な神というものに対する考え方を徹底的に研究してるわけですから――そうならざるを得なくなってくるのではないかと、そう考えてるわけです。

そして若者が、今宗教を求めている最大の理由は、先程も述べたとおり、物質文明に飽きたからであると。これは、仏教の経典にもヨーガの経典にも、まずこの現象に飽きて、この物質文明に飽きて、その後修行に入るんだという教えがあります。ですからそれは、まさにそのとおり進んでいるんだなというのがわたしの今の印象です。

これについて島田先生どうですか。

◉オウム真理教に対する誤解

（島田） 具体的なところから話をしていった方がいいのではないかと思うんです。先程言いましたオウム叩きが始まって二年ですね。この間に世の中が宗教を巡っ

てかなり動いてきたと思うんですね。

オウム真理教が叩かれたパターンというのは、いかがわしい宗教のイメージに一番適合するものとしてだったと思います。何かえたいの知れないいかがわしい教祖がいて、そこに若い人たちが入って親が説得しても帰ってこないとか、お金とかをどんどん巻き上げられるといった具合にです。

そういう形で、今までのタイプの宗教批判がかなり出てきた。オウム真理教は、まさにそのパターンを地でいくようなものとして見られたんじゃないかなと。

それで、どうなんでしょうか。叩かれた最初の時点で、そういう事態についてどうお感じだったんでしょうか。

◉個人的には〝忍辱〟として

（尊師） わたしは、大変喜びました。というのはどういうことかといいますと、仏教の修行には六つの修行のプロセスというのがあります。その中で、第一番目

は布施と。第二番目は持戒と。第三番目は忍辱と。

で、この忍辱というのは、要するに、社会的に叩かれることによってカルマを落とせと。つまり、前生においてはこうだけど、今生においてなしてきた悪業を徹底的に落とせという修行なんですね。ですから、それは、今の弟子たちもそうですけども——例えば、まあこれは信徒さんのレベルでもそうですけども——指がスポンと仕事で飛んでしまったと。痛み一つなかったと。

で、それは何かというと、まあそういう現象に対して心が縛られていないからであるということがいえると思うわけですね。

で、やはり、まあ人間が進化していく場合、いくらいいことだけを積み上げても、過去においての悪いことっていうものは、当然ある意味で清算しなければならないと。で、そういう意味においては、まあ人間の修行として、当然それを淡々と受け止めればいいじゃないかということですね。

まあ、それは、その個人的なスタイルはスタイルとして、やはり社会的な一つ

の宗教団体としての形はありますから、それについてはある程度の法律的防御をしなきゃいけないということですね。

ですから、個人的な部分と、それから教団としてのスタイルというのは、全くの別であるというふうに考えていただいたらわかると思います。

◉一つの試行実験

（島田）一時は、オウム真理教というと衆議院選挙のときのイメージが強かったんではないかなと思うんですね。派手なパフォーマンスというのか、象の帽子をかぶった若い信者が、麻原さんと一緒に宣伝カーの上で「しょうこうしょうこう」と歌ったりとか。そういうイメージがかなり強かった感じですね。

衆議院選挙に出る目的は、今の世の中が非常に危機的な状況にあって、宗教の分野だけで救っていくことはなかなか難しいんで、政治的な手段に訴えるという説明だったと思うんですけれども、今考えると衆議院選に出たことはどう位置づ

けられるのでしょうか。

（尊師）要するに、そういうものはすべてテストですよね。つまり、世の中がどういう形で受け入れていくかというようなテストをしながら、つまり試行実験という形で行なわれているわけです。

だから、例えばまあ、選挙に出ることが利益になるのか不利益になるのかと。で、例えば、不利益になるならば、つまり、わたしたちの考えている救済計画、この救済計画というものは何かというと、まあ十三段階のステージがあるわけですけども、その十三段階のステージとは、まず――これは、仏典の中に詳しく述べられていますが――まず信に従う人と。

次は、第二段階で、家から家へと、つまり裕福な家から家へと転生して、数度転生した後に――あ、その前にもう一つ、極七返っていうのを説明しなきゃなんないか。この欲の世界に七回だけ転生して、そこから解脱する魂と。それから次は、裕福な家に三回ほど転生して、その後に解脱する魂と。それから、人間の世

界へ一回転生する魂と。それから、この欲の世界の、神々の世界に一回だけ転生する魂と。

で、まあこういう形で十三段階あるわけですけど、この流れにすべての魂を入れていくということが狙いなわけですね。で、これが、オウム真理教の救済計画の中身なわけです。で、その中身に対して、どのようなアプローチをしたら最も早くそれを進行させることができるのかということがあるわけですけども、それにとってプラスであれば実践するし、マイナスであればそこで止めてしまうということを繰り返し繰り返し試行しているわけですね。

◉予言の今後に関して

（島田） 当時は、九〇年代にかなりの天変地異が起こるというようなことを、パンフレットなんかでいっていたような気がするんですけれども、最近はあんまりそういう面はオウム真理教の主張の中に見られないように思いますが。

（尊師） 二つのとらえ方がありまして、その第一段階のとらえ方は何かというと、まず、生命に対して愛着している人たちに対する法則の説き方と。これは、イエス・キリストの説き方です。もう一つは、そういうものを一切無視して、つまり生と死というものがあり、その生と死というものを超越するための教えを説く方法ですね。

で、これは、オウム真理教の中に両方とも存在しています。で、今、どちらかというと二番目が世の中に出ていますけども、一番目の流れがないわけではなくて、一番目の流れは流れとして存在してます。ということですね。

（島田） 具体的には、天変地異の予言とかに関してはどういうふうにお考えですか。

（尊師） ええ、それについては、わたしたちは今後起きると考えています。

（島田） それは人間のカルマ、人間社会の今のあり方がそういうところに反映しているということなんでしょうか。

（尊師）というよりも、今までの蓄えられたものが現象化するということですね。例えば、カルマというものは、今日何かなしたから今日返ってくる、というのは、本当にそれは優れた修行者で、その人がそれを望んでいる場合にのみ起きるものでして、そうじゃない場合は、ある時期が来た段階で一気に現象化するということですね。

これは、時期のズレこそありましたが、例えば、わたしの書いた『滅亡の日』（オウム出版）の中で、ソビエト連邦の崩壊と。あれは、二〇〇四年と確かいってると思いますが、あれ、どこでズレたのかというと、ソビエトが覇権主義に至ったベルリンの壁問題がありますね。あそこをポイントにするのか、それとも第二次世界大戦の参戦ですか、をポイントにするのかで、ズレてるわけですけども。で、まあベルリンの壁をポイントにすれば、計算どおりぴったし四十二年後に現象化してると。

それからもう一つ、ですから、中国共産党の崩壊についても同じことがいえま

して、おそらくチベット侵攻の時期ではないかと。で、これは、チベットに侵攻した時期とするのか、ダライ・ラマ法王がチベットからインドへ亡命なさった時期とするのかによってズレますが、おそらく時の流れからいくと、その前後に起きるだろうということですね。

（島田） その四十二年という時間には何か意味があるんですか。

（尊師） ええ、それは「ヨハネの黙示録」の中にきっちり解かれてます。で、例えば、第一段階、第二段階というものがしっかりと起きたら、その次には、七つの災害が連続的に起きると考えています。で、その七つの災害が起きた後に、俗にいうところの核戦争が七日間起き——これは仏典にもうたわれていることですけども——相当に被害が生じるということですね。

（島田） 今の情勢を見ていると、あまり核戦争の方向に行くようには思えない。むしろ核廃絶という方向に世界は動いているように見られるわけですけれども、そういうことではない…。

（尊師） そこでの教えの難しいところは、アメリカとソビエトが一緒になってあるところを叩くんだということですよ。

（島田） ああ。

（尊師） だとするならば、アメリカとソビエトは行かない可能性がある。

（島田） じゃあ、相手は何なんですか。

（尊師） そうですね、まあ、大変難しいところですね、それは。

（島田） 幸福の科学の大川隆法さんにくだってきたノストラダムスの霊は、日本という国がこれから世界の覇権国家になっていき、他の国はほぼみんな滅んでいくという予言をしています。これは、大川さん自身の予言というふうに解釈したらいいと思うんですけれども、そういうような状況が生まれてくる可能性があるということでしょうか。

（尊師） それはないです。

（島田） ないですか。

（尊師）その後に来る人類っていうのは、先程も述べましたけども、高度な精神文明によって、つまり、要するに、本当の意味でいたわり合えるような社会が到来するわけですから、それは存在しません。つまり、上下関係がなくなるというか、例えば経済的に豊かな国は、貧しい国を援助するだろうし、という形になると思うんですね。

（島田）そうすると、日本の役割は、その情勢の中で当然変わっていかざるを得ないということになるんですか。

（尊師）まだ変わらないんじゃないかと思います。変わり出すのは、そうですね、九七年ぐらいからじゃないでしょうかね。

（島田）ところで、僕が最初に言いました日本人の現世中心主義――まあ、麻原さんも物質文明ということで言われたと思うんですけれども――の原因というのはいったいどこにあるんでしょうか。

インドでは、仏教が生まれてくる前から、はるか昔から、現世否定が伝統になっ

てきた。人間が生きていること自体を苦としてとらえる、現世中心主義とは全く反対の考え方があったと思うんですね。

それに対して、日本にはそういう伝統がない。仏教は確かに日本に伝わってきているわけですけれども、そういう現世否定の考え方は来なかった。そうすると、今の現世中心主義という日本のあり方はかなり根が深くて、それを変えることはかなり難しいような気がするんですけれども。

◉日本人の真面目さへの可能性

（尊師）まず、仏教の以前から、まあ現世否定の宗教だったということですが、まさにそれはそのとおりだと思います。といいますのは、仏教そのものも原始ヨーガの流れをくんでるんですね。ですから、例えば、使ってる言葉はアートマンだとか、ブラフマンとか、全く同じ言葉を使ってますし。で、ではその流れはどこから来てるのかというと、実際、そうですね、イランの方から流れてきてるわけ

です。で、その世界観も一致してますし。

で、まあそれはいいとしまして、その教えがなぜ日本に入ってこなかったのかというと、それは国家が招いた仏教だからなんですね。これは、国家が招いた仏教というのは、どこの国もそうですけども、同じように現世仏教として発展してます。というのは、当然、その王権に対して都合のいいような形で発展するでしょうし。ですからまあ、日本にそういう現世仏教以外の仏教は入ってこなかったと。

しかし、日本人は大変真面目な国ですから、例えばある段階で仕事を終わってると。で、仕事をすることが称賛された時期があるわけなんですけど、そのわーっとやることによって物質的豊かさをつくりあげてしまったと。

で、次は何をやるのかと。日本人っていうのは、新しいことをつくりあげるってできないんですね、特質的に。で、まあ今までアメリカに追いつけ追い越せという感じだったのが、一応、外的に見たら同等の生活レベルを得てると。

で、次は何をやるかというと、要するに、そこから別のものを立てることにな

るだろうと。それが、わたしは、精神世界だと考えているわけですけども。で、まあ真面目ですから、これは、もともと修行の第一は何かというと、不放逸、つまり怠惰でないこと、真面目なことというのが第一番目に来るんです。で、そういう意味においては、日本人っていうのは最高の国民性であると思います。ですから、そういう第一番目の条件を備えているものっていうことじゃないでしょうかね。

（島田） こちらから見てですね、オウム真理教の信徒というか、出家者の方というのは、今、日本人は真面目だとおっしゃいましたけれども、真面目さの度合がものすごく強いのではないかという気がして、真面目さゆえにオウム真理教にひかれていくのかなというように思うんですけれども。

（尊師） そうですね、真面目に取り組んで、まあ教祖はちょっと真面目じゃないですけども（笑）、少なくとも弟子たちは大変真面目ですよね。まあ、弟子の一部は真面目じゃありませんけどね（島田：笑）。で、その真面目さが、結局は、

そのすべての精神世界の扉をわたしは開くんじゃないかと考えています。

（島田） そういう真面目さに可能性があると…。

（尊師） そうです。まあ、それで、その日本人に可能性があるといえるんだと思うんですね。

◉宗教とマスメディア

（島田） 今、第三次宗教ブームといわれ、幸福の科学みたいな団体が出てきているわけですね。この宗教ブームというのは、かなりマスメディアがつくったようなところがある。宗教に対して批判的に扱うのもマスメディアですが、宗教がはやっているというイメージをつくり上げるのもマスメディアであると。

そうすると、今の社会の中では、マスメディアに対して宗教がどう対応していくかということが問われているのではないかと思うんですね。

幸福の科学の場合は、最初にマスメディアを通して自分たちのイメージをつくっ

て、二十億といわれる莫大な広告費をかけて自分たちが巨大な教団であるということを印象づけたと。

気象大学校の学生の方もいらっしゃったようですけども、七月十五日に東京ドームでのイベントがあった。そのレポートが今日のパンフレットの中にも書いてあって、途中から眠っていたと書いてありますけども、中身としては、僕も見ましたけど、そんなに面白いものじゃなかった。ただものすごく派手で、テレビ向きというか、レーザー光線を使ったり、人をたくさん集めてマスメディアの注目を集めるという点では、それをうまく利用してるようには見えたと。

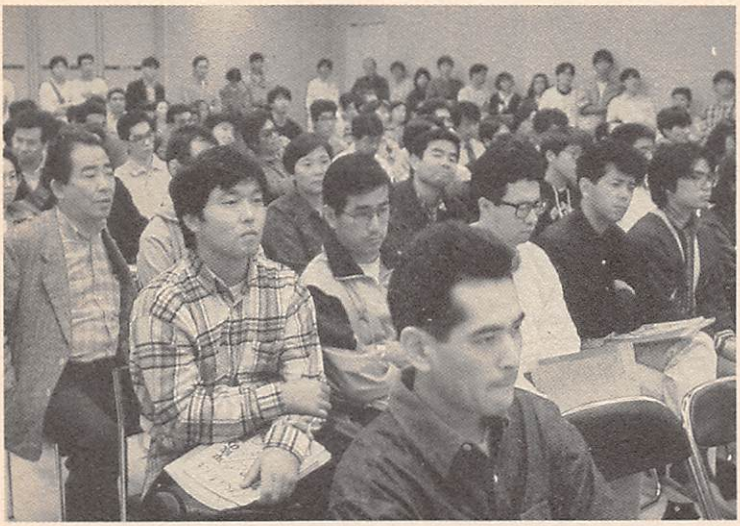
そこで、オウム真理教とは違って、幸福の科学というのはすごく洗練された教団であるというイメージがかなり広まったと思うんです。ところが、ひとたび講談社、『フライデー』の問題が起こってくると、幸福の科学は今まで自分が使っていたマスメディアに対して敵対するようになった。

大川さん自身も、講演の中で、マスメディアが、今、日本の中で第一権力になっ

ていて、横暴なマスメディアが宗教に対していつも敵対しておると。宗教は社会の中でマスメディアからいつも叩かれる立場にあって、そのマスメディアの姿勢を変えない限り、宗教は今の社会の中で力を得ていくことができないというような批判をしているわけなんですね。

しかしですね。マスメディアは確かに今の社会の中で力を得ている。ただ、権力とはいっても、ある特定の人たちがある特定の目的にマスメディアを利用しているというよりも、その段階はかなり過ぎてしまっていて、マスメディアは一種の社会になっている。あらゆるものが、マスメディアに映されることによって社会の中に存在をしたり、意義を持ったりするという、そういう段階にまできているんじゃないかなと。

ですから、宗教の場合も、マスメディアに耐えるというのも変ですけれども、マスメディアに取り上げられて、それが評価されたときに初めてその宗教の意義が明らかになってくるのではないかと。



◉「朝まで生テレビ」の残酷さ!?

麻原さんも、わたくしも出ました、「朝まで生テレビ」という番組がありますが、これは〇時五十五分から六時までともものすごく長い番組なんですね。全部で五時間ぐらいかかるわけなんですが、これが、マスメディアの特性を表わしているような気がします。

ふだんのテレビ番組というのはものすごく短いんですね。十五分とか、あるいは二十分ぐらいで一つの話題を扱うわけですけれども、それが五時間にもなると、その中で、本当に宗教なり、思想なり、あるいはそこに出ている人の人柄なりというものがだんだん明るみに出てくるというか、少なくとも隠すことができなくなる。だんだん自分の本性みたいなものがそこに出てくると。

ですから、非常に残酷な面もあるし、また、公平な面もあると。そういうようなメディアのあり方みたいなものを「朝まで生テレビ」というのが示していたんではないかなと。

幸福の科学の人たちは、結局その五時間の場に耐えられなかったのではないでしょうか。番組の中で犬の糞論争というのがあったんですが、落ちている犬の糞を公園の中で心おきなくというか、人の目を気にすることなく拾えることで幸福の科学の教えが価値があるんだと景山さんが言い出して、それが三十分か一時間ぐらい続いた。麻原さんが、「景山さん、そんなことは当たり前のことではないですか」とか言ったのを記憶しているんですけれども、まあそのくらいの宗教性しかないのかなと。

あるいは、幸福の科学の一般の会員の方で、若い二十代の方がスタジオにいらっしゃいました。客席にいたその人にマイクが来たときに、絶叫調で、いかに幸福の科学の教えが素晴らしいものであるかということを、カメラを見据えながらしゃべるんですね。これにはみんなびっくりしました。司会の方もあぜーんとしてましたけれども。

客観的に見て、そのとき麻原さん自身が番組に出たということが大きくて、幸

福の科学の大川氏の方は出てこなかった。この前ようやくテレビに生で出て、田原総一朗さんと議論してましたけども、できれば「朝まで生テレビ」に出てきて討論の中に参加した方がよかったんではないかと。

とにかく、討論に積極的に加わったことで、オウム真理教がおかしな宗教ではなく、お話の中にありましたように仏教の伝統に根ざしていることが理解されてきたのではないでしょうか。やはり、日本人は仏教的というか、インドから流れてくる東洋の宗教、あるいは思想の流れの伝統の上にいると思うんですね。

◉日本におけるキリスト教

ですから、日本ほど、先進諸国の中でキリスト教徒の割合が少ない国というのは珍しいんです。調査によれば一パーセント強ぐらいで、信者の実数としても百五十万人ぐらいしかいない。初めて日本にキリスト教が伝えられて四百五十年ぐらい、禁教が解けてからでも百五十年ぐらい経ちますが、そのぐらいの数しかい

ない。

お隣の韓国になると、二十何パーセントぐらいいるんです。世界で、キリスト教やイスラム教のような一神教の文化、唯一絶対の神を中心にした一神教の文化を共有しているところは約三分の二ぐらいあるわけで、先進国のほとんどがその中に含まれている。

その中で、日本だけキリスト教の割合が少ないということは、逆にいえば、仏教的な世界観が日本人の間に浸透している証拠ではないでしょうか。大川氏は、啓示宗教と経典宗教とに分けて、オウムは経典宗教であって、幸福の科学は啓示宗教であり、日本の中では啓示宗教がなかなか理解されないんだということを、週刊誌のインタビューで言ってましたけれども、確かにそういう面もあって、啓示宗教的な部分は日本人にとってなかなか理解し難い。ある意味では、啓示宗教にはいかがわしい部分があり、神様が下ってきたといってもそこにどんな証拠があるのか、本当に神様が下ってきたのかどうか疑わしいところがあってなかなか

受け入れられないんだと。それに比べれば、仏教の方がはるかに我々の生活の中に根ざしていることは間違いありません。

◉オウムの傾向が変わってきた?

オウム真理教は、最初はヨーガの学校から始まって、印象ではヨーガを強調していたと思うんですが、だんだん仏教の伝統の方に帰ってきていると。

わたくしは、熊本の道場に行く前に、オウム真理教が出してる機関誌にパーリ語から訳した経典が載っているのを見たのですが、そのころはちょっと疑っていて、これは本当にオウム真理教の人がパーリ語から日本語に訳しているんだろうか、もしかしたらどこかにアンチョコがあってそこから引用しているだけなんではないかと疑いを持って、少し調べてみたんですが、どうもそうではないみたいだ。実際に熊本に行って、そういうことをやっていると聞いて、まあその生活ぶりから考えても納得がいったわけです。

最近ではチベット語の方もやってらっしゃるようですが、パーリ語というのは結局、仏教の中でも北の方を通って日本に来たような大乗仏教的なものとは違う、南の方から流れてくる部派仏教的なものというか、出家しての修行を重視するような系統だと思うんです。それはやはりオウム真理教が、流れの中でそういう傾向が変わってきたというふうに考えてよろしいんでしょうか。

◉もともと一つの流れだという確信はあった

（尊師）まず、最後の問題からお話をさせていただきたいんですけども、もともと、わたしの初め学んだ経典は、中村元先生の『原始仏典』なわけです。で、それからまあ増谷先生の『阿含経典』と。その後密教についてずいぶん学びましたが、それについて説く段階に至らなかったと。

つまり、わたしの中で納得できなかったというとこがあるわけですね。というのは、まあよく弟子たちに言ってたことは、これはかなり削除されてるなと。つ

まり、経典全体の中の一部分しか表わされてないと。で、この一部分しか表わされてない状態で説いてしまうと過ちが多くなるということで、で、そこへいくと、要は原始ヨーガの系統というのは、もうまさに瞑想のプロセスで解脱までスパッといってるんですね。

で、ですから、まず、説いた内容のスタートは原始ヨーガですが、わたしの中にはその流れは一つであると確信がありましたし、で、いずれ、仏法の本物というかを説く必要があると。

それからもう一つ、実は、中国の仏教の流れの最も大きな影響を与えたものは『阿含経典』があるわけですが、これは、実はスリランカから持ち帰られたものだということが、今一般にいわれてまして、で、まあそういう意味においても、やはりその原典である南伝仏教を何としてでも訳することによって、わたしの疑問はすべて解決するんじゃないかと考えたわけです。

で、実際問題として、そのパーリ仏典に接して、まあそれまでのわたしの仏教

の知識とか経験とかいうことから踏まえますと、これは間違いないということで、結果的には、まあどんどんどんどん、その法の全容を少しずつ今現わしていってるわけですけども。

それからもう一つ、あの、全然別個の話で、大川隆法氏についてのわたしのコメントを言わせていただきたいんですけど、わたしは、彼が狙っているのは、宗教ではなくて、要するにヒトラーの、何ていうんですか、日本におけるヒトラーだったんじゃないかなと。というのは、彼の方式を見ますと、それと全くそっくりの方法を採ってるんですね。説法の仕方、それから写真の撮らせ方、登場の仕方等がですね。ですから、彼が狙っていたのは、日本におけるヒトラーだったんではないかとわたしは考えています。で、まあ…。

◉マスコミの前で公開討論会を

（島田） ヒトラーというのは、ナショナリズムというか、民族主義的な運動とし

てということでしょうか。

（尊師）ではなくて、要するに、そういう独裁権力を得ることを狙ったんじゃないかというふうに考えています。で、まあそれが、結局破綻したと。というのは、彼が宗教法人でなければ、もう少し後にいって、まあ、幸福の科学としてはやりやすかったのではないかと思いますけども、どうしても宗教法人になりますと、これはオウム真理教がそうであったように、やはり同じ土俵に上がります、他の宗教団体と。そうなったらば、当然いろんな勢力があります。

で、わたしは島田先生の話を聴いてて、これは、わたしは全く同意見なんですけども、マスコミに耐えられないような宗教じゃしょうがないと思うわけですね。逆に、マスコミの前でどんどん公開討論会というか——まあわたしは、ですから生しか出ないわけですけど——生でどんどん公開討論会やって、どの教えが本当に正しいのかとか、あるいはどの教えが人を幸福にするのかということをどんどんやるべきだと思います。

で、そういうところを、まあ実際しない幸福の科学というのは、やはり、まあ問題があるというよりも、取るに足らないんじゃないかと思います。ただ問題は、取るに足らないとはいえ、それを信じている人たちがたくさんいるっていうことは、一つの驚異でもあります。

◉オウムは敷居が高い？

（島田） なるほど。その場合に宗教の選び方というのも変なんですけれども、若い人がかなり宗教に関心――まあ若い人に限らず、日本人全般の中に宗教に対する関心があると。ところが、宗教団体というと、敷居が高いし、どういうふうに宗教を見ていったらいいかという視点が難しいんではないかという気がするわけですね。

オウム真理教は敷居が高い宗教の代表みたいなもので、今オウムへ行くにはかなり勇気がいるんじゃないかなと。もちろん敷居の高さを越えて中に入れば、そ

れだけ得るものもあるのではないかと思うんですが、それに比べれば、幸福の科学は会員になるのはものすごく簡単で、葉書一枚出せばなることができる。それに、宗教団体に入らなくても、本屋さんで大川氏の本を買うことによって宗教に一応は接することができるわけですね。

大川氏にはいろいろな神様や霊が、イエス・キリストだとか、アラーの神とかいろんな神様が下ってきて、一応は世界の宗教が網羅されているように見えて、しかもこれが最高・最大・最強の教え、一番いい教えだということになっている。大川氏は仏陀の生まれ変わりであるということで、品質保証みたいなことを自分たちで言っていると。

で、初めて宗教に接する人たちにはそういうものの方が入りやすいし、それがわりと簡単に引き入れられた原因ではないのかと思うんですね。そこらへんのところはいかがでしょうか。

◉大川隆法氏の企業努力

（尊師）ええ、まさにそのとおりだと思います。で、わたしは、実は、大川隆法氏の中で学ばなきゃならない点があると一つ考えてるわけですけど、それは、彼の企業努力ですね。で、これはどういうことかというと、そういう、これだけマスメディアが発達してると、やはり宗教団体というのは自分たちの教えを広めるために努力する必要があると。で、まあそういう意味での彼の努力というのは、やはり抜群のものだったんではないかと思います。

ただ問題は、教えの中身については、先程島田先生もおっしゃったとおり、宗教というよりも、わたしは、何だろう、漫才を（島田：笑）…いや事実、気がするんですけども。

というのは、彼の本というのは、数時間で五冊、十冊読めちゃうんですね。というのは、おんなじ内容が繰り返し繰り返し説かれていますし、で、まあそういう中身のない宗教に人が引き込まれるというのも、やはり、逆の言い方をすれば、

まあマスコミによって、漫才とか落語とかが浸透して、その弊害みたいなもんじゃないかという気がしてますけどもね。

ただ、人間の心というのは、やはりより発展的な思考を望んでいますから、まあいったん幸福の科学に入って、その教えの浅薄さが理解できたら、その後オウム真理教に来る（島田：笑）っていうのがいいんじゃないかと、そう思っています（笑）。

（島田） 確かに今おっしゃったような漫才的なところがある。大川氏の初期の講演をお聞きになったことがありますか。

（尊師） いや、わたしは、『幸福の科学の会員よ聞きなさい！　真実の仏陀の教えはこうだ』（オウム出版）を書くときに、まあ本十冊をちょっと目を通させてもらいましたけども、それ以外はないんですね。

（島田） 初期の講演というのは漫談みたいなもので、この前初めて聞いたんですが、そこでは異言、つまり古代語でパートナーとしゃべるというのをやっていた

んですね。そのときは、信者の人たちは演芸場に来ているような感じで、大川氏も漫談調なんですね。ざっくばらんな調子でしゃべっていて――彼は四国の人ですけど、なまりそのままであって――二人で古代語の対話をするんです。

最初にパートナーの女の人にインドのお姫さまが出てきて、大川氏が「ほにゃらほにゃらほにゃら」とかというようにインド風の言葉でしゃべると、相手の女の人も「きゃきゃきゃほにゃら」とかしゃべって、それが途中から日本語になる。

そうすると、大川氏は普通の日本語でしゃべるんですけれども、女の人の方は「わ・た・し・は、な・ん・と・か城の、な・ん・と・か姫です」とか、たどたどしい日本語でしゃべる。そのパートナーの人は前世がインドの何とか城のお姫さまであったということで、途中から中国の霊に変わって、今度は古代中国語で、一応は中国語風なんですけどね、多分でたらめだとは思うんですけれども、そういうことをやって場内の人を笑わせている。

ですから、宗教であるというよりも漫談・漫才みたいなところがあって、霊的

な世界や宗教的な世界を話題にした一種のショーというか…。

（尊師）そうですね。そう思います。わたしは、それでしたら、やはりビートたけしを見た方が楽しいと思うんですね（島田：笑）。いや、事実そう思いますね、それは。

◉宗教性をどうやって開拓するか

（島田）ただ、日本人の宗教性を考えてみると、ざっくばらんな調子の方が見るべきものがあるというか、面白いところがあって、東京ドームで指をこう突き立てて「何とかであ～る」というふうにやるよりもはるかにましであるなという気はするわけです。

ところで、宗教性を探求していく方向ですが、もちろんオウム真理教の立場からすれば、オウム真理教に入ればすべてが解決するという部分があるのかもしれませんけれども、今の社会の中にいながら宗教性をどう開拓していくのか。一つ

には、宗教に対する見方というか、宗教にかかわるかかわり方を学んでいく必要もあるだろうし、知的な部分は確かに必要だと思うんですね。

『幸福の科学の会員よ聞きなさい！』というオウムの出した本がありますけれども、オウムからの幸福の科学に対する批判というのは、二つの宗教を比較しながらやっているんで、それなりにわかりやすいと。幸福の科学の本に書かれていることが、いかに原典というか、もともとの宗教の教えと違うかということがわかるようになっている。

ただ、一般の受け取り方は必ずしもそうではなくて、日本人の宗教的なものに対するアレルギーというのがある。先程無神論ということを言って平気なのは日本だけだというお話がありましたが、日本人の宗教に対する無知というか、無理解がかなりあって、そういうところから解決していかないと、本当の宗教性とか宗教的な部分を深めていくという方向に行かないんではないかという気がするんですね。

◉キリスト教でいう三つの選定条件

（尊師）まさにそのとおりです。で、それに対して、見分け方が、仏教にしろキリスト教にしろ説かれています。

で、まず、キリスト教の中で説かれていることは何かというと、まあ、真実の、これは「真理の御霊」っていう言葉を――これは、オウムの言葉ではなく、『聖書』にうたわれているわけですけど――が現われるときは、まずキリストについての証をするだろうと。で、キリストについての証とは何かというと、キリストのなした奇跡のすべてを、あるいはキリストのなした教えのすべてを正確に解説するだろうということですね。

それからもう一つ、これは、日本では特に嫌悪の対象とされていますけど、神秘主義、つまり、いろいろな奇跡がそこで生じるだろうということですね。

それからもう一つ、今回現われる真理の御霊というのは、自分自身、キリスト自身を超えるものであろうとキリストは予言しています。

で、まあ、これら三つの条件をもとに、例えばキリストの教えそのものを簡単に解明できるものであり、しかも奇跡を起こすことができる教えであり、しかも教えの体系の中に、これは、まあ皆さんご存じかどうかわかりませんが、バプテスマという言葉がありまして――（島田：洗礼ですね。）これ、バプテスマっていうのは要するに、オウムの言葉を使えばイニシエーションと同じ意味でして、それによって変化させることのできる、魂の質を向上させることのできる教え、まあいろんな条件があるわけですけど、そういう条件を備えているかどうかを選定なされば、選定条件として見分けられれば、間違った宗教に入ることはないと思います。

◉ロジカルなトリック

で、むしろ、そうでなければ、そうじゃない教えに入った場合、一つの怖さは、例えば、この日本人に生まれるわけですから、相当の物質的な徳があると――徳

というのは、物質的に豊かに生きるための条件を備えて生まれてきてると。その物質的に豊かに生まれるだけの条件を備えてきている魂が、宗教によって願望をかなえるとか、そういうことをすることによって、徳がどんどん消耗して、来世は低い世界へ生まれ変わるという条件にもなりますので――ですから、やはり、先程述べたポイント、例えばバプテスマ、つまりイニシエーションがなされるかとか、あるいはキリストの教えを完全な形で解明できている教団であるかどうかとか、あるいはまあもう一つは、体系というか、教えの体系がしっかりとした、過去のあらゆる宗教を完全に掌握しているものであるかどうかとか、そういうところを力点として見られたら、過ちはないと思います。

で、まあそういう点から見ると、例えば大川隆法氏の教団の大きな過ちのポイントは、例えば彼が仏陀であるとするならば、なぜ彼に仏陀の霊が出てくるんだとか、彼がキリストだとするならば、なぜキリストの霊が出てくるんだとか、つまり、他から借り物として、例えば大川隆法氏がAだとして、で、キリストがB

だとして、BがAに入ったときに、なぜBが駄目なんだ。つまり、Aの前生をBだとするならば、そこにBが存在するのはおかしいじゃないかとか、こういうロジカルなトリックについて、だれも気づかないと。まあここは、わたしは大変面白いと思っております。

まあそういう意味で、日本人の、まだ、思索のレベル、思考のレベルっていうのはそんなに高くないのかなというのが、今のわたしの印象ですけどもね。

◉思考レベルを高める方法

（島田） 高めていくための方法というものはどういうところに…。

（尊師） これは大変難しいとこだと思いますけども、現実をありのままに見つめることじゃないでしょうか。で、現実をありのままに見つめるとは、例えば、わたしたちは必ず死ぬものであると。例えば、仏教の観想のまず第一は何をやるかというと、まず肉体を解剖学的に見るんですね。

例えば、中心に骸骨があると。例えば、骨があって、例えば、骨に腱があって、筋肉がくっついていて、で、血管があって、あるいは表皮があって真皮があってというような形の。で、それを徹底的に観想するんだね。で、それによって、人間というものを、人間の表面、つまり皮膚を通して見る、外観的なものではなく、その本質的なものを徹底的に見つめようとするわけですね。

で、まあそういう訓練をなすことによって、同じように感覚についてもそうですし、例えば感覚の場合も、グッドフィーリング、素晴らしい感覚があるときは、同じように、痛み、あるいは他の苦痛も大きいと。それからもわかるように、結局、喜びと苦しみとはセットで強くなったり弱くなったりするんだということを、例えば見つめるとか。そういうことから、結局この世の中のすべてのものは苦しまなければならない、そういう訓練がなされるかどうかだと思うわけですね。

ですから、わたしが初めに、ベンツと、それからハイラックスの話をしたのも、その生きてる間に喜びを充足するっていうのはそれは素晴らしいことだけど、死

というものは絶対にあるんだと。つまり、ガタガタ道があるんだと。そのときベンツじゃ走れないよということなんですね。

◉試行錯誤の末に

（島田）オウムの信者の方はかなり若いと思うんですけれども、今の若い人たちというのは、今徳とおっしゃったけれども、物質的に豊かな日本の社会の中でずっと育ってきて、物質的には豊かでありつつ、なんかこれでいいのかというふうに思っていると。

ところが、物質的には豊かであっても、体験というのか、人生で、ありのままの自分を見つめ、それとぶつかり合うような体験をしないまま大きくなってきていると。

イニシエーションという言葉は、反面では大人になるという意味だと思うんですけども、今の若い人は大人になるための自覚が少ない。ものを見るときにも、

大人の目として見てるのではなくて、子供の目として見ていて、自分というものをどこかに預けて、それによって救われようとする。

今、精神世界ブームということで、チャネリングだとか、自己開発セミナーだとかがはやっていますけれども、そういうもの中にはまっちゃって、はまった状態で満足している。自立していないというか、そういう傾向がかなりあるのではないかと思うんですね。

オウム真理教の信者の方々も、最初の段階ではそちら側の若い人一般みたいな傾向を持ちながら、あるときに、何かふとしたきっかけでオウム真理教にぶち当たるという経緯をたどってきているような気がするんですけれども。

◉深い教えを与える努力

（尊師） そうですね、オウム真理教の信徒の方々は、やはりあの、ある意味で洞察力が、わたしはあるんではないかと思います。つまり、未来において来るもの

を来るとしっかりと見ていると。で、例えば、先程も述べた、老いもそうですし、死もそうですし、病もそうであると。

で、そういうものを、まだその現象が起きる前から用意してるということだと思うんですね。例えば、例を挙げるならば、もし、例えばあした家が火事になるとするならば、その火事が避けらんないとするならば、当然、その火事をできるだけ小さな状態で抑えるために消化器をたくさん用意するとか、あるいは水を大量に用意するとかいうことをやると思うんですね。

で、ところが、現代は、生、生きてることに、喜びに集中し過ぎるがために、その用意がなされていないと。で、結局死というものを境として、一気に苦しまなければならないということだと思うんですね。

で、それについては、例えば教化の仕方、つまり、例えばオウム真理教を含めて、もし真実の宗教団体が他にたくさんあるとするならば、その教団の、その教化の仕方、努力不足があると、わたしは思うんです。

で、それは、例えば仏典の中にもこういう話がありまして、あるけちんぼの夫婦がいたと。で、その夫婦は、その奥さんはそうでもないんだけども、夫は大変なけちんぼであったと。で、砂糖菓子を、まあ王様のところから帰る最中で食べてる人を見て、それに対して自分も食べたいと思ったと。でも、自分は大金持ちだから、それを作らせると、まあ要するにみんなに配らなきゃなんないということで、隠れて作るわけですね。

で、それを知ってらっしゃったサキャムニは、お釈迦様は、弟子のマハーモッガラーナにそこへ行かせて——まあ、これは神通を使って空中を行かせたわけですけど——行かせて、そして、そのけちんぼの魂を、実は脅すわけですね。脅しをなすことによって、マハーモッガラーナに布施をさせる気持ちを起こさせるわけですが、そうではなくて、それをそのままサキャ神賢のところに神通力で連れて行きまして、で、供養させると。

で、供養させることによって縁を生じさせるという教えがあるわけですけども、

それからわかるとおり、一般の人たちにそういう深い教えを与えてきたのが——そういうある意味でカルチャーショック的な、衝撃が必要じゃないかと考えているわけですね。

で、それでまあ少しずつ少しずつ準備はしてるんですけど、これについてはなかなか時間のかかることだし、こちらの精神的な準備等があるわけですけど、そういうものが本当に起きない限り、やはり日本人の意識が変わるというのは、なかなか難しいんじゃないかと思います。

(島田) このぐらいでどうでしょうか。皆さんから、もし質問とかご意見とかがあれば承りたいと思います。

【質疑応答】

◉創造神を経験した後、真理勝者に

（質問者A）キリスト教とかイスラム教においてはですね、一神教ですのでね、神というものが、超越的な神というものが存在するわけですよね。仏教の場合っていうのは、その仏陀っていうのはね、神というふうなことじゃないわけですよね。一応すべてを悟った人ということで、神という形で表われてないわけですけど、オウム真理教においてはその神ということに対して…。

（尊師）いや、それは大変な誤解でして、まず、キリスト教、イスラム教における神というものは、千宇宙、千の宇宙のただ一つの創造主ということになってきます。で、これは、確かに正しいと。なぜならば、彼らの定義は、まず性的交わりをしない神である。そして、創造主であるといっています。これは、インド・ヨーロッパ語族に伝わる宗教的な見地からいくと、ブラフマン、つまり創造主は、そういう要素を持っているわけです。まずよろしいでしょうか、これは。

そして、仏陀とはどういうことかいうと、最終的な真理勝者に至るときは、三千大千世界にただ一つの魂といわれてます。三千大千世界とは、千の三乗です。つまり、十億宇宙の中でただ一つの魂、ただ一つの神だといわれてます。で、現に経典の中にそういう創造主といわれている——神聖天とまあオウムでは訳していますが——大神聖天のね、魂を教化する場面が多く出てきます。よろしいでしょうか。

（質問者A） そうしますと、その仏陀っていうのは、何回か生まれ変わって、仏陀、まあ釈迦牟尼ですか、それになったわけですよね。

（尊師） 正確な言い方をしますと、五神通を有してから、四アサンキャ十万カルパ。十万カルパというのは、この宇宙が十万回破壊されて後に仏陀となっています。

（質問者A） ですので、そのいわゆる創造神というのとは、またニュアンスが違うんじゃないかという…。

（**尊師**）創造神は、その間に何生も何生も経験しています。わかりますか。創造神を経験した後に真理勝者となっていくんです。

（**島田**）そうすると、仏陀の位置というのは、世界の中でどういうものとして考えたらいいのでしょうか。

（**尊師**）無上、最上、これ以上のものはないということですね。はい。で、要するに、十億宇宙で、ただ一つの魂と。

（**島田**）それは、あるようでいてないようなものなんですか。

（**尊師**）要するに、服をすべて脱ぎ払った状態であり、しかも、いつでもどんな服でも着ることができるという状態だということです。

（**島田**）よく仏教では、「空」とか「無」とか、そういう考え方もありますけれども、そういうのと通底してくるようなものでは…。

（**尊師**）無を超越しまして、空を超越しまして、それで最終的にすべての生存の要素を完全に止めてしまっている状態。ですから、逆にいえば、その心の働きが、

生存したいと考えれば、どの世界へも自在に生存できるという魂だということです。

（島田） 創造神というものは、そういうようなものの中で起こってくるというか…。

（尊師） ええ、実際は、例えば、あしたカレーが食べたいというように考えた場合、まあ例えば、それは自分で考えているのか、あるいは奥さんが考えているのかわからない場合がありますね。で、実際、次にカレーが出てきたと。

で、それによって自分の願望がかなったんだと考えるのか、あるいは、それは、例えば奥さんが考えていた要素であって、自分の要素ではないと考えるのかという、その発想的違いというか、要するに、キリスト教、あるいはイスラム教は、その出てきた、自分が思ったからできた。よって、自分は創造主だという考え方ですね。これを唯一神としてとらえてるわけです。

仏教はそうではなくて、もともと宇宙が破壊されまして、破壊されて一番初めに、その宇宙ができて、その宇宙にただ一つ現われた魂、その魂は、早く別の衆

生がここに来いと思念し続けるわけですね。で、上から他の魂が落っこってきたと。よって、自分がそれを創造したんだと考えてるわけですけども、そうとらえるのかの違いですね。

つまり、視点が、どちらの方がより巨視的な見方をしてるかということになると思います。

◉霊が亡くなった場合

（質問者B）今宗教とかね、それとはまた別に、いわゆる霊の世界が見えるっていうふうなね、そういうふうなこともあるというふうなことを、最近テレビなんかでもね、亡霊とか、そういうのが、あなたのそばに霊がいるとか、あるいはまた、もっと前は霊障とかね、そういうことで、戦国時代の武将があなたのご先祖の何代かの前にいて、それが非業の死を遂げてどうのこうのとかっていうふうなことがありますけど、そういうふうなことからしますと、いわゆる仏教の輪廻転

生っていうかね、そういうのと別な世界になっちゃうんです。

（尊師） ならないよ。それは、仏教を知らないがゆえの質問です。説明しましょう。

欲六界というのは、まず一番下の地獄界と。これは、激痛地獄といわれている地獄があるんです。その次は動物の発生があります。その次は、一般的にはプレータ、これは餓鬼といわれていますが、実際は低級霊域といわれている世界です。つまり、低級霊域というのは、まあわたしもそういう経験があるわけだけど、実際にそういう低級霊が見えます。その上が人間界、そして意識堕落天という天界があります。これは、皆さんがよく言っている宇宙人です。その上が戯れ堕落天という世界だね。

だから、霊の世界云々というのは、包括概念として存在していることは事実です。ただその人たちが、その低級霊域をしっかり霊視してるかどうかは別問題であるというふうに理解してください。よろしいでしょうか。

（質問者B）いや、ってことは、霊が亡くなった場合でも、他に転生することはないってことですか。霊が亡くなったっていうか、死んだ場合…。

（尊師）違う違う。霊が亡くなった場合、霊の世界から転生するんだよ。で、霊の世界からまた、その場合、だいたい動物か、地獄か、人間界へ転生するんです。そういう世界であると考えたらいいよ。

（質問者B）あ、霊の世界があるという…。

（尊師）霊の世界があると。で、その霊の世界も無常であるから、転生するんだと言ってるんだよ。

◉在家信徒拡大もコツコツと

（質問者C）キリスト教を信じる人というのは、例えば教会の中に入って修行する人たちと、それともう一つ、日曜ごとに教会に通って教えを聴いて、それが生活の中に入ってしまっている人とだいたい分けられると思うんですけれども、オ

ウム真理教の場合、そうやって中に入ってしまって修行している方々っていうのは、こういうふうにいらっしゃるっていうのはわかるんですけれども、なんか敷居が高いと感じられるゆえに、一般の人っていうか、日曜ごとに教会に行くって感じの信者とか、そういうふうな姿があんまし見えてこないので…。

（尊師） たくさんいます。結論からいうと、たくさんいます。出家は一部です。在家はそれよりもたくさんいます。

（質問者C） あ、いるんですか。

（尊師） います。

（質問者C） そういうのを広げる活動とか、そういうのはするんで…。

（尊師） コツコツとやっています（笑）。

（質問者C） あ、どうも。

（尊師） はい。

（司会）じゃあ、最後にちょっと、本日の対談のまとめとしまして一言ずつお願いします。

◉宗教に関する議論を自分の問題として考えていただきたい

（島田）こういう形で、宗教者と宗教学者が話をするのは、実は難しいところがあります。幸福の科学の例をあげますと、幸福の科学の側からしますと、わたくしは神を信じない宗教学者だということで、そういうのはけしからんといつも責められています。それは、結局彼らの言っている神をわたくしが信じていないということを指して言っているわけですね。

そうしますと、宗教者と宗教学者の間で対話というか、話が成り立たなくなる。そういう難しさがいつもあって、今日の話が果たして対話として成り立っているかどうか、そういう評価は当事者にはなかなか下すことはできないんですけれども、こういう形で一応話ができたということは重要なことではないかと思います。

今は、宗教を特別視するとか、ある一部の人たちだけのものであると考える時代は終わりつつあるのではないでしょうか。それは、今の社会の中で、宗教というものが姿を変えながら、非常に大きな意味を持ちつつあるということかと思います。宗教をある特定の宗教団体の問題として考えてしまう傾向が、特に日本の戦後社会の中においては強かったと思うんですけれども、そういうものを脱するような時期に来ているんじゃないかなと。

宗教の世界というのは、単に日本にとどまらず、世界の中に広がっていかざるを得ない。人間と宗教というのはほとんど同じもので、人間の文化というのは、それこそすべて宗教であるというような、そういう側面を持っているわけですね。で、そういう部分を非常に現世中心主義的な日本人は、あんまり考えないで、この戦後はきてしまったんではないかと。

それが、今問われつつあって、こういう形で気象大学校といった場所でも宗教の話が行なわれるようになってきた。そういう状況の変化が現実にあって、その

上で考えていかなくてはいけないんではないかなと。

宗教学者は、ある特定の宗教を信じるという立場をとらないわけではありますが、そういう目から見ても、宗教の世界の奥の深さはかなりある。そういうものを我々が学ぶことによって、我々の人生が変わっていく契機になりえるという側面があると思うんですね。

麻原さんのような宗教者は、自らの人生の中でそういうものを実践しているわけです。別にオウム真理教だけではなくて、いろいろな宗教団体のやっているようなこと、あるいはそこで説いている教えを我々が聞いてみることには価値もあるだろうし、そういうことの面白さみたいなものもあるだろうと思います。

ひとまず、自分は無信仰である、無宗教であるとか、あるいは宗教を恐ろしいというイメージをどっかで捨てて、もうちょっと当たり前のもの、人間の文化の一つの形態として宗教を見ていく必要があるんじゃないかと思います。

ですから、今日だけの話ではなくて、これからもこういう形で、様々な所で、

様々な形で、宗教に関する議論が行なわれると思いますけれども、それを、できたら自分の問題として考えていただければいいのではないかと。これが一つのきっかけになればいいのではないかというふうに考えております。

◉宗教の最も基本的なもの——学問

（尊師） わたしは、今回のこの講演というのは、大変有意義なものだと考えています。それは、例えば、宗教を批判することができるのは、ある意味で宗教学者なんじゃないかということがいえるからね。なぜならば、あるセクトに——まあ、セクトという言葉が合うかどうかわからないけども——あるパートに属している宗教団体が他の教団を批判すると、それは単なる教団対教団の戦争という形になってしまうと。

しかし、そうではなくて、例えばまあ島田先生のように学問をしっかりなさってらっしゃる方が、その学問を通して宗教を見つめると。それで宗教を見つめる

ことによって、ある場合は是非であったり、あるいはある場合は忠告であったりなさると。

で、これは、特にこれから、まあ今もそうだけど、マスメディアが発達している日本においては必要なことだと思います。なぜならば、例えばある権力を有する人が、ある宗教を興すと。それで、宗教を興したがために、マスメディアがそれをいっせいに宣伝を始めると。そうすると、例えば、宣伝に弱いわたしたちは、その宗教が本物であると錯覚を起こしてしまうと。

つまり、先程も言ったとおり、パッケージでしかものを見られなくなってきてる、というのが、わたしは今の日本人の現状だと思うわけだね。で、パッケージを開けて中身まで見ようとする場合、どうしても躊躇してしまうと。それは、パッケージがおどろおどろしければ、それを実際に開かないと。

まあ、これは現に、商品を売る場合、まず何に気をつけるのかといったら、パッケージをいかに綺麗なパッケージにするか。あるいは、好ましいパッケージにす

るかということを、どこの会社も一生懸命奔走してるわけだけども、それからもわかるとおり、外側のイメージというものによってわたしたちは大きな影響を受けていると。しかし、実際は、そのパッケージの中身であって、パッケージではないんだと。

そして最終的には、やはりわたしは、その老舗になり得るようなもの、つまり、これから長く生き残ってすべての魂に利益を与えるものは、パッケージではなくて、やはり中身だと思うわけです。で、まあそういう意味でどんどん逆に批判していただいて、こちら側も、その考えなきゃならない点は、それは当然考えて修正を加え続けていくというか、それがやはり宗教団体には必要だと思います。

これはね、宗教団体といったのは何かというと、単なる宗教家、まあるいは個人がどの宗教を選ぶということについては、それは個人の自由だからいいと。しかし、宗教団体というのは、多くの人たちに多くの影響を与える、社会的に認められた組織であると。だとするならば、それなりに、やはり宗教においての責

任があるんじゃないかと。まあ、先程、だれか、社会的に云々という質問をしましたが、わたしは、宗教というのは、あくまでも宗教において責任を取ればいいと思うんだよね。でまあ、そういう意味において、今日のこの講演が皆さんの利益になれば幸いだと思います。

最後に、宗教の最も基本的なものは何かというと、これは学問であるといわざるを得ません。それはなぜかというと、例えば聖なる八段階の道、日本では八正道として知られている、この第一段階が正見解であると。正見解というのは、いかに多くの真理のデータを入れるかと。正しいデータを入れ、それによって人生を見つめるかと。

ここで、その〝正しい〟という言葉を使っているのは、ただ一つの定義しかないと。それは、先程おっしゃった方々と全く逆の話になるわけだけど、現世否定、それから離愛著。つまり、これは、とらわれっていうものをなくすことだね。滅尽。滅尽っていうのは、煩悩を止めてしまうということ。そして証智。証智とい

うのは、すべての現象を正しく知り得ることと。正覚。それは、正しく一つ一つの現象について悟り得ること。そして煩悩破壊と。これは、わたしたちをこの世の中から、再生しないようにする、もっと高い世界へ転生させるために煩悩破壊すると。

これらの流れにのっとって、正しい知識というものを植えつけると。そういう意味においては、やはりしっかりと学問をすることによって、どの教えが正しいのか、あるいはどの教えが正しくないのか、どの教えが本当に自分を幸福にするのか、幸福にしないのかということをしっかりと見つめるならば、皆さんにとっては大変幸福な人生が待っていると思います。

本当に今日は、どうもありがとうございました。

一九九一年十一月四日

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄
餓鬼→低級霊

阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天

楽変化天、化楽天→創造満足天
他化自在天→為他神以神通創造欲望満足
従事天
悪魔→破滅天

色界→形状界
梵天→神聖天
梵衆天→神聖衆愛欲神天
梵輔天→神聖臣天
大梵天→大神聖天
浄天→美天
浄天→総美愛欲本質神天
遍浄天→偉大果報愛欲本質神天
広果天→清潔居住天
浄居天→超空間愛欲神天
無煩天

無熱天→超燃焼愛欲神天
善現天→善安楽愛欲神天
善見天→善現象愛欲神天
色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界
空無辺処→空間無辺境
識無辺処→識別無辺境
無所有処→無所有境
非想非非想処→非認知非非認知境
想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山
東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮堤→南のバラリンゴの大陸
西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者

善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）

菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟

声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々ー八つの宗教的特性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）

阿羅漢→供養値魂

四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの聖なる絶対の真理
苦聖諦→苦しみの聖なる絶対の真理
集聖諦→苦しみの生起の聖なる絶対の真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理

四念処→四つの記憶修習の現象化

四正断、四正勤→四つの正しい努力

四如意足、四神足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習正覚段階
択法覚支→法則の検討正覚段階
精進覚支→精進正覚段階
喜覚支→喜正覚段階
軽安覚支→静寂正覚段階
定覚支→サマディ正覚段階
捨覚支→無頓着正覚段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い経験の構成の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心
慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の衝動による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉悔蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状・容姿
声→声
香→香り
味→味

触→接触

五下分結→五つの下位に結びつけるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の衝動
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結びつけるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八つの離解脱
八勝処→八つの克服境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素・形状・容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ

有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→滅少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一つの種子を持つ者
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

殺生→殺生（変更なし）
偸盗→与えられないものを強奪すること
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→嘘の言い方
綺語→軽薄語
悪口→乱暴な言葉
両舌→中傷の言葉
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

麻原彰晃の世界 シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

絶賛発売中!!

PART-1 幸福に至る四つの実践 定価2500円
PART-2 尊師、麻原彰晃が斬る！ 定価980円
PART-3 真実！六道輪廻 定価980円
PART-4 宗教にだまされるな！ 定価980円
PART-5 絶対の真理 定価980円
PART-6 願望成就の秘法 定価980円
PART-7 仏教真理・八正道 定価800円
PART-8 仏教真理 六波羅蜜 定価800円
PART-9 尊師、聖地インドを行く 定価750円
PART-10 仏教真理 五蘊無我 定価650円
PART-11 自己を超えて神となれ！ 定価820円
PART-12 仏教真理 十二縁起 定価620円
PART-13 これが尊師！ 定価570円

PART-14

宗教の条件

B6判　定価570円

今、本物が明らかになる！　真の宗教の条件とは？　第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

PART-15

絶対幸福への道

B6判　定価620円

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！　あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

PART-16

麻原彰晃　方便品

B6判　定価720円

難解な仏典の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！　釈迦牟尼の深遠な教えの真髄を、最終解脱者麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

PART-17

世界は尊師を待っている

B6判　定価1030円

転換期にあるロシアでの説法、大学での講演、インタビュー等を集めた第一部。テーラヴァーダ仏教の国スリランカでの高僧との対談を集めた第二部。四十八ページカラーで尊師の幅広い活動を紹介。

PART-18

THE説法 I

B6判　定価670円

「解脱が二十一世紀の日本を、そして世界を背負う！」――新しい時代の文明理念が今明らかに！　道なき現代社会に明確な指針を与える麻原尊師の説法集。

PART-19

THE説法 II

B6判　定価570円

本来ならば直弟子にしか明かされない秘儀、タントラ・ヴァジラヤーナの高度な内容も惜しみなく公開。激動の時代において絶対不動の自己を確立させてくれる麻原尊師の説法の集大成。

PART-20

麻原彰晃、戦慄の予言

B6判　定価620円

「これから二〇〇〇年にかけて、筆舌に尽くし難いような、激しい、しかも恐怖に満ちた現象が連続的に起こる……。」
衝撃の近未来予言と、人類最終戦争を生き残るための秘儀を麻原尊師が特別に伝授！

PART-21

麻原彰晃、戦慄の予言 第2弾!!

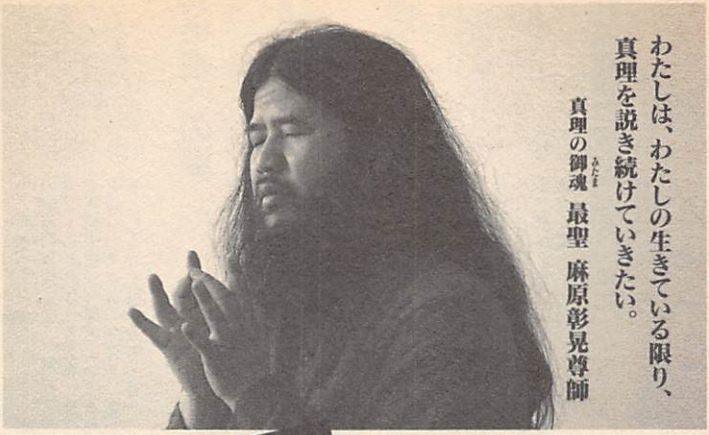
B6判　定価770円

衝撃の未来予言がまた明らかにされた！　目前に迫った人類最終戦争の様相、そのさ中に登場する救世主の役割、そしてユダヤ勢力、世界的秘密結社との戦いなど、世紀末の地球が壮大なスケールで浮き彫りとなる。

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京5-109325



ガネーシャ セット 5つのラインナップ

●まずは、何も言わずに
Aセット（20冊）
特別価格 **22,000円**

●さあ、もう1歩深く！
Bセット（26冊）
特別価格 **24,500円**

●これで聖者になれる
Cセット（25冊）
特別価格 **21,500円**

●これでもかこれでもかの
Dセット（112冊）
特別価格 **105,000円**

●あなたのお好きな本を——
Eセット（よりどり20冊以上）
定価の **5%OFF**

まほろしの『ヴァジラヤーナ・サッチャ』セット

●創刊号～No.10まで
10冊セット 6,800円を
特別価格 **6,000円**

※A～Dセットは、特別価格につき、定価の10%OFFになっております。
※上記の価格は、消費税＋送料込みの価格です。

●詳しいご案内をさしあげます。
まずはお電話かハガキにてお問い合わせください。
●お申し込み・お問い合わせ先
オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17　郵便振替／東京5-109325
TEL.03(3439)6043　FAX.03(5450)3558

読者の熱い要望に応えて！

ガネーシャセット

PRESENTED BY AUM PRES

販売開始

「麻原尊師の本を、オウムの本をもっと読みたい……」
そんな読者の熱い要望に応えて、この度「ガネーシャセット」ができました。
オウム出版が自信を持ってお勧めする数々の本を特別価格で提供。さらに、なかなか手に入らない「オウムグッズ」までプレゼント。これは、またとないチャンスです。

確実に手に入る！

今、爆発的な人気を見せているオウム出版の書籍。残念ながら書店では手に入りづらい状態になっています。これでは、読者の皆様の「オウム真理教ってなに？」という素朴な疑問にもなかなかお答えすることができません。

そこでオウム出版では、自信を持ってお勧めする「ガネーシャセット」を通信販売で提供することになりました。しかも今回は、発売記念特別価格で、お安く皆様にお届けします。

さらにビッグチャンス

「ガネーシャセット」をお申し込みになった皆様にもれなくオウムグッズをプレゼント！
特製ポストカード、アニメーションビデオ、尊師の歌のテープ等、一般ではなかなか手に入らない貴重品です。最近は類似品が出ているという噂も……。

九日前に予言されていた阪神大震災！
――それは世紀末の日本に襲いかかる、
数々の恐怖と惨劇のプロローグにすぎない。
想像を絶する規模で忍び寄る戦慄の世紀末！
次に日本を襲うのは……？
この空前の危機が
あなたを呑み込もうとしている！

「報道写真全記録 阪神大震災」朝日新聞社

緊急出版！

日出づる国、災い近し

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著

B6判／定価1285円（税込み）

『日出づる国、災い近し』それは、正確な近未来予言と、科学と神秘力に裏づけられた確固たる対処法が記されている秘密の書。

全国の書店で絶賛発売中！

オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL.03(3439)6043 振替／東京5-109325

真理の御魂（みたま） 最聖 麻原彰晃尊師、ついに沈黙を破る。

あなたは麻原尊師を、

オウム真理教を、

そして日本の現状と未来の行方を、

まだこれっぽっちも知らない……。

全国の書店で絶賛発売中！

全国民が注目する、
真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師
久々の書き下ろしメッセージ。

迷妄の魂よ、大悪業の恐怖を知れ

亡国日本の悲しみ

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著

B6判　定価1190円（税込み）　ISBN4-87142-114-7

オウム出版

〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL.03（3439）6043　郵便振替／東京5-109325

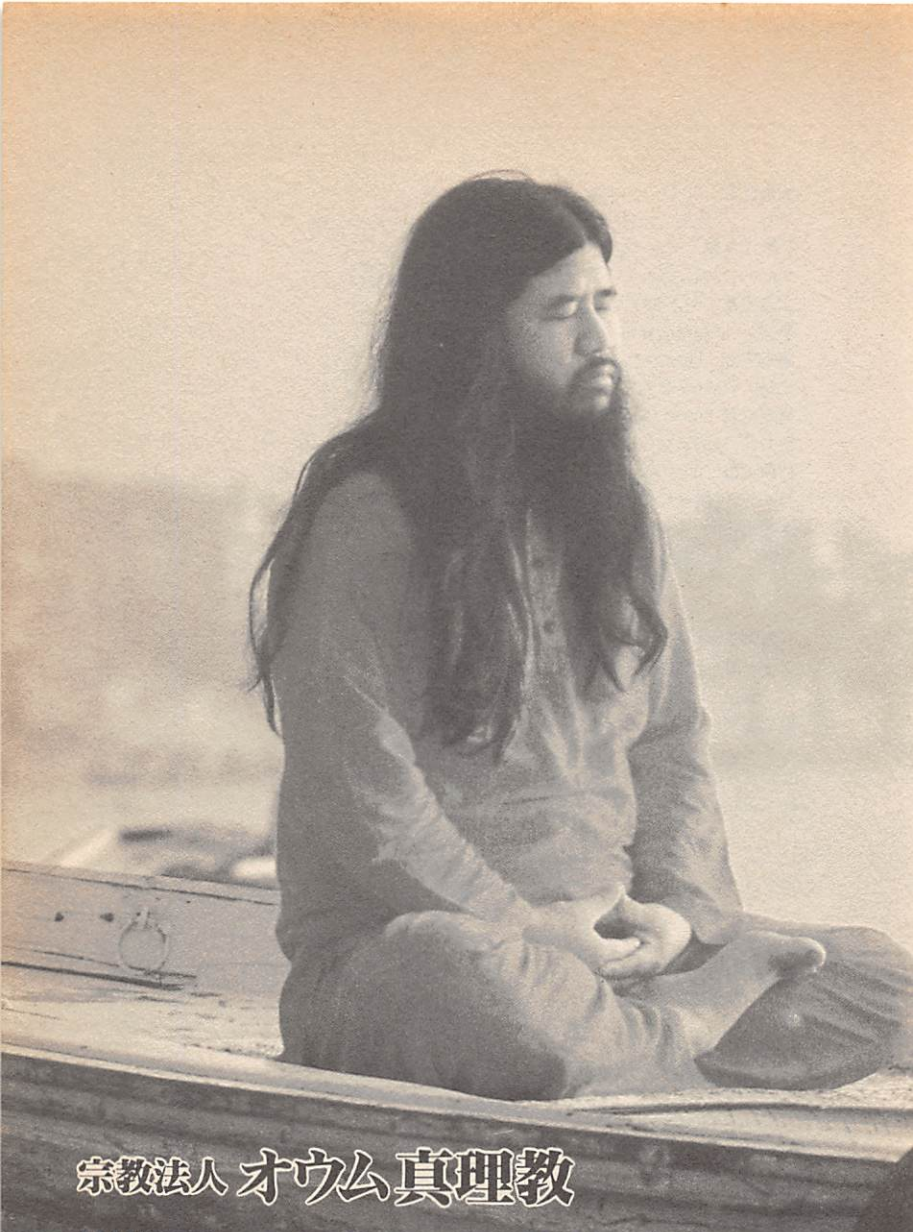
本物の実感！

集え！千年王国のために……

日々の生活に流され
本当に求める人生を
忘れていませんか。

世界でただ一人の最終解脱者
真理の御魂
最聖 麻原彰晃尊師が説き明かす
真実の法則が
本当の自由・幸福へと
あなたをいざないます。

新しい世界が
今まさに始まろうとしている
この時代に
新人類へと
進化の道を尊師と共に
歩んで……



宗教法人 オウム真理教

（キリトリ）

麻原彰晃の世界
PART11
資料請求券

資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて
最寄りの本部・各支部までご連絡ください。
入会案内等、詳しい資料をお送りします。

大阪支部　06 (251) 4264
〒541　大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15 マルイビル2F
和歌山支部　0734 (24) 2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
広島支部　082 (264) 7252
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
高知支部　0888 (84) 8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
福岡支部　092 (474) 2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
那覇支部　098 (866) 9537
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
深谷出張所　0485 (74) 8143
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212 (860) 0504
242 East 87th St.#5D, New York, N.Y. 10128 U.S.A.
ボン支部　(0228) 616647
Auf dem Hügel 48, 53121 Bonn, S.R.Germany
スリランカ支部（AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION）
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『麻原彰晃の世界 PART11』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版 『麻原彰晃の世界 PART11』読者係

◆各道場のご案内◆

富士山総本部
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
世田谷道場 03 (3327) 8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
杉並道場 03 (3396) 9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
札幌支部 011 (241) 4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
仙台支部 022 (268) 3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
水戸支部 029 (226) 8044
〒310 茨城県水戸市中央2-1-17 HDビル6F
高崎支部 0273 (46) 1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町1081-5
船橋支部 0474 (66) 4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
横浜支部 045 (243) 8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
藤枝支部 0546 (46) 2068
〒426 静岡県藤枝市築地堤下11-5
松本支部 0263 (28) 7429
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3
名古屋支部 052 (252) 0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
金沢支部 0762 (51) 8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
京都支部 075 (371) 3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F

麻原彰晃の世界PART11
自己を超えて神となれ！

一九九二年二月九日　初　版
一九九五年八月十日　第二刷

定　価　八二〇円
発行者　松本知子
　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒一五四　東京都世田谷区世田谷二－八－一七
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京五－一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

©His Holiness the Master, Shoko Asahara 1992
ISBN4－87142－014－0　C0014　P820E

9784871420143

1910014008208

ISBN4-87142-014-0

C0014 P820E

定価820円(本体796円)

麻原彰晃の世界 PART II

自己を超えて神となれ!